

青年期の友人関係の発達

— ‘グループ’ における対処スキルと関係性ステイタス—

2018年1月29日

白百合女子大学大学院 文学研究科

博士課程 発達心理学専攻

幸本 香奈

目次

第1章 青年期の友人関係の発達的变化と友人‘グループ’における研究の動向	5
第1節 青年期の友人関係の意義.....	5
第2節 友人関係の発達的变化.....	6
第3節 現代の青年の対人関係の特徴と仲間関係の変質.....	8
第4節 中学生・高校生の友人‘グループ’	12
第5節 ‘グループ’において必要な対処スキル.....	20
第2章 本論文の目的と構成.....	25
第1節 先行研究の課題と問題点.....	25
第2節 本論文の目的.....	26
第3節 本論文の構成.....	27
第3章 研究1 中学生・高校生の‘グループ’に対する認識.....	29
第1節 目的.....	29
第2節 方法.....	30
第3節 結果.....	32
第4節 考察.....	39
第4章 研究2 ‘グループ’関係の発達的变化と‘グループ’の対処スキル.....	44
第1節 目的.....	44
第2節 方法.....	45
第3節 結果.....	47
第4節 考察.....	55
第5章 研究3 ‘グループ’経験から得られる‘グループ’対処スキル.....	62
第1節 目的.....	62
第2節 方法.....	63
第3節 結果.....	64
第4節 考察.....	66
第6章 研究4 ‘グループ’経験による対人スキルの獲得.....	70
第1節 目的.....	70
第2節 方法.....	71

第3節 結果.....	74
第4節 考察.....	82
第5節 研究1～研究4の総合考察.....	86
第7章 研究5 関係性ステイタス作成の試み.....	90
第1節 目的.....	90
第2節 方法.....	91
第3節 結果.....	97
第4節 考察.....	109
第8章 総合考察.....	116
第1節 本論文の目的.....	116
第2節 青年期の友人関係の発達的变化.....	118
第3節 円滑な関係性に有効な‘グループ’対処スキル.....	122
第4節 関係性ステイタスと‘グループ’対処スキルとの関連.....	125
第5節 本論文で明らかになったこと.....	127
第6節 本論文の意義.....	128
第7節 本論文の限界と今後の課題.....	129
引用文献.....	131
要約.....	138
付録.....	141
謝辞.....	179

図表一覧

Figure 1	本論文の研究構成.....	28
Figure 2	友達との付き合い方の4群の分類.....	35
Figure 3	対人接近化スキルの学年差(男子).....	78
Figure 4	対人接近化スキルの学年差(女子).....	78
Figure 5	対人距離化スキルの学年差(男子).....	79
Figure 6	対人距離化スキルの学年差(女子).....	79
Figure 7	アサーションスキルの学年差(男子).....	80
Figure 8	アサーションスキルの学年差(女子).....	80
Figure 9	同一性地位判定尺度の流れ図(加藤,1983).....	93
Figure 10	‘グループ’関係性ステータスの流れ図.....	95
Figure 11	改良後の関係性ステータスの流れ図.....	98
Figure 12	関係性ステータスによる「内面的つながり」の違い(男子).....	100
Figure 13	関係性ステータスによる「‘グループ’の有用感」の違い(男子).....	100
Figure 14	関係性ステータスによる「‘グループ’不自由感」の違い(男子).....	101
Figure 15	関係性ステータスによる「依存性」の違い(男子).....	101
Figure 16	関係性ステータスによる「内面的つながり」の違い(女子).....	102
Figure 17	関係性ステータスによる「‘グループ’の有用感」の違い(女子).....	102
Figure 18	関係性ステータスによる「‘グループ’の不自由感」の違い(女子).....	103
Figure 19	関係性ステータスによる「依存性」の違い(女子).....	103
Figure 20	関係性ステータスによる対人接近化スキルの違い(男子).....	105
Figure 21	関係性ステータスによる対人距離化スキルの違い(男子).....	105
Figure 22	関係性ステータスによる対人接近化スキルの違い(女子).....	106
Figure 23	関係性ステータスによる対人距離化スキルの違い(女子).....	106
Figure 24	関係性ステータスによるアサーションスキルの違い(男子).....	108
Figure 25	関係性ステータスによるアサーションスキルの違い(女子).....	108

Table 1	‘グループ’の良かった点.....	18
Table 2	‘グループ’の悪かった点.....	18
Table 3	研究1の調査対象と調査時期.....	30
Table 4	友達との付き合い方項目の因子分析結果.....	32
Table 5	‘グループ’認識に関する質問項目の因子分析結果.....	33
Table 6	友達との付き合い方による‘グループ’への認識(男子).....	36
Table 7	友達との付き合い方による‘グループ’への認識(女子).....	36
Table 8	‘グループ’認識に関する質問項目の因子分析結果.....	47
Table 9	自己の安定性の因子分析結果.....	49
Table 10	自己制御に関する質問項目の因子分析結果.....	49
Table 11	自己の安定性の高低による‘グループ’認識の違い(男子).....	50
Table 12	自己の安定性の高低による‘グループ’認識の違い(女子).....	50
Table 13	自己主張の高低によると‘グループ’認識の違い(男子).....	51
Table 14	抑制能力の高低による‘グループ’認識の違い(男子).....	52
Table 15	抑制能力の高低による‘グループ’認識の違い(女子).....	52
Table 16	‘グループ’からはずされた経験の有無による自己の安定性・自己制御能力の違い(男子).....	53
Table 17	‘グループ’からはずされた経験の有無による自己の安定性・自己制御能力の違い(女子).....	53
Table 18	‘グループ’からはずした経験の有無による自己の安定性・自己制御能力の違い(男子).....	54
Table 19	‘グループ’からはずした経験の有無による自己の安定性・自己制御能力の違い(女子).....	54
Table 20	‘グループ’経験を通して学んだことのカテゴリー.....	64
Table 21	‘グループ’認識に関する質問項目の因子分析結果.....	74
Table 22	‘グループ’認識と学年差(男子).....	76
Table 23	‘グループ’認識と学年差(女子).....	76
Table 24	社会的スキル行使尺度の因子分析結果.....	77
Table 25	同一性地位判定尺度の質問項目(加藤,1983).....	92
Table 26	関係性ステータスの判定に用いた質問項目.....	95
Table 27	関係性ステータスに関する質問項目の平均値標準偏差.....	97
Table 28	関係性ステータス4群と学校段階(男子).....	98
Table 29	関係性ステータス4群と学校段階(女子).....	99

第1章 青年期の友人関係の発達的变化と友人‘グループ’における研究の動向

第1節 青年期の友人関係の意義

青年期は、親中心であったそれまでの時期と違い、親から独立し、自己の形成や自立性を確立する時期である。長く不安定な時期を乗り切るために、自立に伴う痛みや不安を共有できる仲間関係が重要になり、友人関係はこの時期の若者にとって何より大事な人間関係だと言われている。青年期の友人関係については多くの研究者が注目し、その意義について述べている(例えば、長沼・落合,1998; 碓井,2000; 難波,2005 など)。青年期の友人関係においてしばしば言及されてきたことは、この時期に親友と呼べるような、特定の親密な友人が登場することである。それまで親との関係が重要な安全基地であった子ども達にとって、仲間関係がそれにとって代わり、家族という集団より仲間という集団のほうが大切になってくる(宮下, 1995)。精神科医の Sullivan(1953)は、前青年期に同性同年代の友人とのきわめて親密で個別的な関係が見られることを指摘している。Sullivan はこの関係性を「チャム」と呼んだ。岡村(1998)は、この時期の仲間関係の重要性として、①保護者からの自立に伴う喪失感の補償、②新たに同一化する価値の拠り所、③集団所属欲求に対して防衛的かつ適応的であること、つまり、集団の中で自分が受け入れられているという情緒的な経験が得られる場であること、をあげている。海外においても青年期に友人関係が重要な理由を、心理的離乳に伴う新たな依存対象であること(Furman&Buhrmester,1992)、仲間集団に準拠することで新たな行動規範を学習すること(Coleman,1980)、などが挙げられている。この時期の子ども達にとって仲間関係は、保護者や教員から「心理的に自立していくときの根拠地」(竹内, 1987)としての機能を果たしていると考えられる。松井(1990)は、青年期の友人関係が社会化に果たす役割について注目し、緊張や不安、孤独などの否定的感情をやわらげ解消してくれる存在としての「安定化機能」、「社会的スキルの学習機能」、友人が自己の行動や自己認知のモデルとなる「モデル機能」を挙げている。西平(1973, 1990)は、挫折や欲求不満といった場面において、ひとりの真の友人が存在するかどうかによって耐性が左右されると述べ、青年期の友人関係は青年の心理的な発達を促すことを指摘している。さらに、発達課題を乗り越える際の同一化の対象(Kirchler,Palmonari,&Pombeni,1993)など、発達や精神的健康を促進させる機能も指摘されており、青年期の親密な友人関係は、青年自身の安定化といった側面と、社会的スキルや自己認知におけるモデルないしは比較対象といった意味を持つと考えることができる。

第2節 友人関係の発達的变化

落合・佐藤(1996)は、青年期に見られる友人との付き合い方から友人関係を類型化し、その発達的变化について検討した。中学生、高校生、大学生を対象に質問紙調査を行い、「友達との関わり方に関する姿勢」と「自分が関わろうとする相手の範囲」の2次元によって友人関係が整理されることを明らかにし、この2次元から得られる友人との付き合い方として、青年期の初めには「浅く広く関わる付き合い方」が多く見られるが、年齢を増すにつれて少なくなること、一方で、「深く狭く関わる付き合い方」は年齢を増すにつれて多くなっていくことを示し、友達との付き合い方はまず浅い付き合い方から深い付き合い方へと友達との関わり方に関する姿勢が変化し、次に広い付き合い方から狭い付き合い方へと、自分が関わろうとする相手の範囲の変化が起こることを明らかにした。また、榎本(1999)は、友人関係を外面的な「活動的側面」と内面的な「感情的側面」の双方から捉え、それぞれの発達的变化について検討した。中学生から大学生までを対象とした質問紙調査の結果、活動的側面では男子では友人と遊ぶことを中心とした「共有活動」から互いの相違点を認め合い、互いに尊重した「相互理解活動」へと変化し、女子は友人との行動や趣味の類似性を重視した「親密確認活動」から他者を受け入れない「閉鎖的活動」へと変化し、その後、「相互理解活動」へと変化していくことを示した。感情的側面では肯定的な感情と否定的な感情が混在し、発達的变化はあまり見られないことが明らかにされた。また、保坂・岡村(1986)は、青年期の仲間関係の発達段階について、ギャング・グループ、チャム・グループ、ピア・グループの3段階の位相を提示している。

ギャング・グループは、児童期後半、保護者からの自立のための仲間関係を必要とし始める時期に現れる徒党集団、従来の発達心理学ではギャング・エイジと呼ばれていた集団である。この集団では、特に同一行動による一体感が重んじられ、同じ遊びを一緒にするものが仲間であると考えられる。したがって、遊びを共有できないものは仲間からはずされてしまう。この段階にいたってようやく仲間集団の承認が親の承認より重要になってきて、大人がやってはいけないというものを仲間と一緒にやることになる。この集団は基本的に同性の同輩集団であり、どちらかといえば男子に特徴的に見られる。

チャム・グループは、思春期前半に良く見られる仲良しグループである。この語源とも言うべき Sullivan(1953)のいうチャム(親友)は、こうした‘グループ’から生まれた特別に親密な友人を指している。Sullivanはこの段階の友人関係をとりわけ重視し、それが児童期までの人格形成上の歪みを修正する機会になることを指摘した。この段階では、同じ趣

味・関心やクラブ活動などを通じてその関係性が結ばれ、互いの共通点・類似性(たとえば同じタレントが好き)を、言葉で確かめ合うのが基本になっている。この集団も同輩の同性集団であるが、どちらかといえば女子に特徴的に見られる。Brown(1982)は、思春期には友人同士で‘グループ’を作り、その‘グループ’内への一致の圧力が強くなることを指摘している。この一致への圧力を指す「Peer Pressure」は、仲間同士の行動の一致を求め、ドラッグの使用や飲酒など反社会的な行動を暴走させることもある(Santor, Messervey & Kusumakar,2000)が、逆にそういった反社会的な行動を止める向社会的な面も認められる(Brown,Clasen & Eicher & Petrie,1986)。グループ・ダイナミクスについての研究を行ったJanis(1982)は、このような集団で何かを判断したり問題を解決する場合、集団維持にエネルギーを注ぎすぎるあまりパフォーマンスに注意が向かなくなる「集団浅慮」について調査し、集団の雰囲気や壊す可能性のある批判がタブーとなる集団成員相互の同調圧力は、集団には決して珍しいことではないと指摘している。チャム・グループに見られる関係性は、成員個人の要因のみならず、このような集団特有の機能が働いていると考えられる。

ピア・グループは、思春期後半によく見られる仲間関係である。先に述べたギャング・グループやチャム・グループとしての関係に加えて、互いの価値観や理想、将来の生き方などを語り合う関係が生じてくる。ここでは共通点・類似性だけでなく、互いの異質性をぶつけ合うことによって、他者との違いを明らかにしつつ自分らしさを築き上げ、確認していくプロセスが見られる。そして、異質性を認め合い、違いを乗り越えたところで、自立したひとりの個人として互いを尊重しあうことができ的状态が生まれてくる。この集団は、異質性を認めることが特徴ゆえに男女混合であることも、年齢に幅があることもありうる。日本の学校段階で言えば、ギャング・グループは小学校高学年、チャム・グループは中学校、ピア・グループは高校で見られるとされる。斉藤(1986)は、この位相を確認するための調査を小学校高学年、中学生、高校生を対象に行い、友人関係が、小学校高学年ではギャング・グループが中心で、中学生では主にチャム・グループ、その後高校生ではピア・グループが中心となることを示している。

このように、青年期の友人関係については、「同じ」であることを重視する付き合い方から、互いの異質性・個別性を認め合い理解しあおうとする付き合い方へと関係の質が変化していくとされていた。しかし、現代の青年期の子どもたちの友人関係の発達段階は、従来の発達段階とは変わってきていると指摘されている。

第3節 現代の青年の対人関係の特徴と仲間関係の変質

近年、インターネットやソーシャルメディアが急速に発展している。それに伴い、友人関係の様相も従来の対面を中心とした関係に加えて、様々なメディアを介した関係が増えてきており、若者の対人関係や仲間関係についても変化が見られるとの指摘がある。

土井(2009)は、現代青年の対人関係の特徴として、親密圏において相手が傷付かないように細かい配慮をし、過剰な優しさで振舞う傾向を指摘し、このような関係性を「優しい関係」と呼んでいる。そして、彼らが親密圏の人間関係において「優しい関係」を求めるのは、「自分らしさ」の脆弱さゆえであり、そこでは強力な自己承認欲求があるとしている。福重(2006)は、現代青年のコミュニケーションのあり方について、次のように説明している。人が自分を開示する際には否定や無視などの非承認のリスクを常に内包している。よって、自分についてメッセージを発することができるのは、相手が自分を受容してくれるだろうという信頼が前提となる。しかし、現代社会ではそうした信頼の前提が失われ、自己開示にともなうリスクはこれまで以上に顕在化する。そのため否定されるリスクを最小化するような波風のたたないコミュニケーションが必要になるということである。このように、現代青年の対人関係の特徴として、深く関わることに消極的であり、関係性が希薄化していることが指摘されている。一方で、こうした希薄化論について疑問視する議論もある。浅野(2006)は、現代の青年は、多くの友人関係のチャンネルを持ち、状況に応じて、それぞれの関係性を選択的に使い分けると指摘している。そして、そのような関係性を維持するために、現在の関係や情報、文脈がどのようなものであるかを的確に見極める繊細さが要求されていると述べている。竹内(2009)も、高校生に対する調査から、友人の数といった量的な意味での友人関係の希薄化が高校生に広まっているとは言えないこと、「あっさり」した友人関係を切り取るなどの質的な「希薄化」傾向も若干しか見られないことを指摘している。そして、友人数が少ない高校生においては、質量ともに希薄化し満足度も低い一方で、友人数が多い高校生は、選択的な関係の中で活発な友人関係を築き、関係への満足度も高いことを見出している。このように、現代の青年に見られる友人関係については、傷付くことを恐れて距離を置いたり、拒否されるリスクを回避するために当たり障りのないコミュニケーションに終始するといった自己保身の側面が多く見られること、円滑な関係性を維持するためには状況に応じた自己を柔軟に使い分けの力やコミュニケーション能力が重要であり、その力の高低によって友人との関係性の深さや友人関係における満足感に差が生じていることが示されている。女子の友人‘グループ’について調査した三好(1998)

も、‘グループ’においても内面がどうであれ、周りに合わせたり、表面上をうまく取り繕うような関係性が見られる(三好, 1999)と述べている。希薄化論に対しては様々な観点から議論がされているものの、現代の若者の友人関係の在り様がこれまでと変化していることは間違いないと考えられる。

青年期の仲間関係について 3 段階の位相を示した保坂も、現代の若者の対人関係の様子の変化から、仲間関係を取り巻く状況も従来の仲間関係の発達の様相とは違ってきていることを述べている(保坂,2010)。特に、いじめなどのトラブルが深刻化してしまう傾向を問題視し、仲間関係にまつわる子ども同士のトラブルはこれまでも発達のプロセスの中でよく見られることであったが、テレビ等で目にするトラブルは、以前のそれとは変わってきていると述べている。仲間集団が同一であることを絶対的な条件とするギャング・グループやチャム・グループにおいては、同一であることを確認するためのゲーム的な仲間はずし、短期間に順繰りに仲間からはずされていくローテーション型のいじめが起きやすい(堀田,2000)。けんかなども含めてこうした人間関係のトラブルから子どもたちが学ぶことは、発達上必要なプロセスであると言えよう。同質性を特徴とするギャング・グループ、チャム・グループから異質性を特徴とするピア・グループまでの発達過程においては、こうした対人関係のトラブルが必然的に発生する。ただし、不幸にも事件になるようないじめは、特定の子どもに対して長期間にわたって固定化し、かつ身体への直接的な攻撃も含めきわめて陰湿な行為となっている。同時に、全国調査や事件報道から分かるようにその裾野はかなり広がっていると判断せざるを得ない(文部科学省, 2015)。保坂は、現代の子どもたちの仲間関係の発達に 3 つの変化の可能性を述べている。

1 つ目は、ギャング・グループの消失である。現代では、核家族化や少子化が進み、塾や習い事による遊ぶ時間の減少、都市化に伴う遊び空間の喪失、テレビゲームの普及など、子どもを取り巻く環境が大きく変化し、ギャング・グループの形成が難しくなっていると指摘している。西村(2007)は、環境の変化に加え、塾通いや習い事といった個人志向の高まりもギャング・グループを形成しにくくなった要因であると指摘している。それにより、現代の子ども達は、昔の子どもが仲間集団の中で学んだことが学べなくなってきたおり、仲間関係の形成、発展に大きな困難を抱える子どもが多いと言われている(小石, 1995)。ギャング・グループでの活動を通して、適切な自己主張の方法や、ルールを守るなどの社会生活に様々なスキルや知識が習得されるとの指摘もあることから(國枝・古橋, 2006)、自己主張や自己抑制のような基本的な対人関係スキルが身に付かず、また、友達関係におい

て自己開示をして受け入れてもらえたという経験の少なさから、自己開示に伴う不安が高まり、その結果、関係の質よりも一緒にいることに重きを置かれた関係性の薄いチャム・グループが形成されると考えられる。つまり、現代の青年の関係性の変容は、他者との円滑な関係性を維持するために必要なスキルが習得されていないためであるとも考えられる。

2つ目は、チャム・グループの肥大化である。保坂(2010)は、チャム・グループは、ギャング・グループの消失と入れ替わって、子どもたちの間で肥大化してきていると述べている。おそらくこれには日本の文化風土として集団の和を重んじる傾向が根強いこともあるだろう。そして、現代の子ども達の対人関係の特徴と言われる希薄化は、ギャング・グループを十分に経験しないままにチャム・グループを形成していく中で見られるものではないかと指摘している。つまり、現代の学校教育の中において見られる多くの友人関係は、「きわめて薄められたチャム・グループ」(保坂,2010)であると考えられる。保坂によれば、高校生の友人関係に関するアンケート調査において、「1人の友達と特別親しくするよりは‘グループ’全体で仲良くする」という項目に半数近くのもの肯定しているのに対して、「多くの人と仲良くするよりは、1人の友達との付き合いを大切にする」という項目を肯定したものは四分の一しかいなかった。また、「仲間はずれにされるのは絶対にいやだ」と64%のものが答え、「何をするにも、みなと一緒にだと安心する」「できるだけ仲間と同じように行動したい」などの項目に3~4割が肯定していることを報告している。この結果から、まず「仲間はずれにならないようにと心がけながら、とにかく仲間と一緒に行動し、仲間うちの流行に遅れたりはずれたりしないようにする」といった、仲間に対する同調性が強いことが見てとれる。そして、「その仲間に対する強い同調性は、心理的に一定の距離を置いた、表面的な行動レベルでの同調であり、『群れ志向』的な態度を示す『皮相的なかわり』が目立つ」と分析されている。また、藤川(2008)は、小中高校生に広がる携帯電話の問題をとりあげて、小集団の中での価値観に違いがないことを確認し、物理的に離れていても同調し続けるために「ケータイ」が使われていることを指摘している。したがって、この年齢段階で多発している陰湿ないじめは、こうした同調性とギャング・グループを十分に体験しないままにチャム・グループを形成していく中で、自分たちにとって栄養素のように必要な集団を維持していくためにおきていると保坂は指摘する。さらに、そこでは自分たちだけでは集団のまとまり(=凝集性)を維持できないため、「スケープゴート(いけにえ)」としてのいじめの対象が必要になってくる。すなわち、一緒にいじめるという行為によって、かろうじて集団が維持されていると分析している。

3つ目は、ピア・グループの遷延である。つまり、チャム・グループの段階が長引き、ピア・グループへの移行が先延ばしになっていることである。本来、ピア・グループにおいては、仲間に対して意見の相違や否定的な感情も伝えられるような信頼関係が必要である。真の親友という、より深い親密な関係を作り上げていく上では避けて通れないプロセスと言えよう。ところが、現代の子どもたちは、他者との違いをはっきりと表現することができなくなっていると保坂は指摘している。そうした彼らにとっては、他者との違いを言うこと、あるいは「ノー」と言うことは、逸脱した行為となってしまう。当然、ピア・グループの達成課題が難しいものになりつつあり、先に述べたように高校生段階ですらピア・グループが見られず、薄められたチャム・グループが目立つことになる。大学カウンセラーの齋藤(2008)は、学生グループの話し合いが日常慣れ親しんだ交流モードである同質性の相互確認に安住しがちであることを指摘している。大学生においてもなお、チャム・グループのような関係性にとどまっていることが示唆され、まさにピア・グループの形成が遷延化してきていることがわかる。

以上のように、従来の青年期の友人関係における研究では、友人との関わりが自己の安定化や社会的スキルの獲得、自己理解を促すものとしての役割を担っていること、発達段階によってギャング・グループ、チャム・グループ、ピア・グループのように、それぞれの時期に特有の仲間関係が見られ、関係性の質は、「同じ」であることを重視する付き合い方から、互いの異質性・個別性を認め合い理解しあおうとする付き合い方に変化していくことが指摘されてきた。一方で、現代の青年の友人関係には違いが見られ、ギャング・グループを経験せずにチャム・グループを形成するとその期間は長く、ピア・グループへの変容が見られないまま大学生になる場合があることが指摘されている。そして、その関係性の変容の要因として、遊び場の現象や個人志向の高まりなどにより、従来小学校時代に経験すべき仲間との交流が減少し、友達との関わり方を練習する場がなくなってしまったことが考えられている。

第4節 中学生・高校生の友人‘グループ’

本研究で取り上げる‘グループ’は、中学生や高校生の学校生活によく見られる集団的友人関係である。従来、青年期の友人関係に関する研究では、友達との1対1の関係性について述べられることが中心であったが、1900年代後半から‘グループ’の存在が報告されるようになり(永沢,1969)、現在、青年期の友人関係を語る上で‘グループ’は欠かせない存在となっている(香川,2004)。第2節で述べた保坂(1986)によるギャング・グループ、チャム・グループ、ピア・グループは、集団と言う意味合いで「グループ」という言葉が用いられ、対人関係の集積である仲良し集団と言う意味を持っているが、中学生・高校生の作る‘グループ’は、単なる対人関係の集積ではない。佐藤(1995)によると、4月当初の友達関係がまだできていない段階で、自分はどこの‘グループ’に入れそうかということが女子の専らの関心ごとになっていることを指摘し、何人かの気の合う子どもが集まって仲良し‘グループ’が出来上がるというよりも、初めから‘グループ’ありきで関係性が作られていくことを示唆している。この‘グループ’という存在は、学校生活の中心であり、‘グループ’の中での友人との関わりによって仲間から支えが得られたり、かけがえない友情が育まれる場合も多く(須藤,2012)、『グループ’の中で親友との関係を経験することも考えられ、青年期の友人関係が果たす役割に似た重要な役割を担っていると考えられる。また、‘グループ’が女子に特徴的であることや、‘グループ’においてみんなと違う行動をすることは、できる限り避けるべきこととして捉えられている(三好,1999)といった指摘からは、‘グループ’の友だちと同じであることを重要視するチャム・グループの性質を持っていることがうかがえる。一方で、中学生・高校生の作る‘グループ’は、自己防衛的に‘グループ’に所属するという理由が見られ(佐藤,1995)、また、その‘グループ’関係を維持していく上で並々ならぬ努力をしている(保坂,1993)など、過剰な気遣いや気苦労をしていることが指摘されており、従来の青年期の友人関係の理論だけでは説明できない部分も多くあると考えられる。‘グループ’ありきで友人関係が作られていく状況において、‘グループ’に所属してうまく関係性を築いていくためには、単なる1対1の友人関係のみならず、自分と‘グループ’という1対他の関係性も重要になってくると考えられる。中学生・高校生の作る‘グループ’とは、従来の仲間集団の性質の中ではチャム・グループに近い性質を持っているが、閉鎖的で排他的な性質を持っていたり、成員が自己防衛的な理由で所属していること、‘グループ’自体が成員にとって必ずしも歓迎されていないなど、チャム・グループの性質にはない新たな性質を持った現代の青年に特有の仲間関係で

あると考えられる。幸本（2011）が中学生・高校生を対象に同性の友人‘グループ’に所属する生徒の割合を調査した結果からは、中学生、高校生の男女ともに全体の90%以上が同性の友人‘グループ’に所属していると回答していることから、青年期の友人関係を述べる上で、‘グループ’は避けて通れない概念であると言えよう。

4-1. 現代の中学生・高校生の‘グループ’の特徴

‘グループ’の存在を最初に指摘したのは大学生女子の‘グループ’について研究を行った永沢(1969)であり、‘グループ’という存在自体は1960年代からあったことが分かる。また、高校生女子の‘グループ’は閉鎖的であるという保坂(1975)の報告や高校生女子の‘グループ’の成員は必ずしも‘グループ’の存在を歓迎してはいないという天野(1975)の報告から、これらの特徴を持った‘グループ’は1970年代には存在していたと考えられる。その後、1995年以降には特に臨床的な観点から‘グループ’についての様々な指摘がされるようになってきた。今日の青年期の子どもたちの作る‘グループ’には、以下の5つの特徴が指摘されている。

‘グループ’の第1の特徴は、固定的で決まったメンバーによる仲間関係だということである。中学生・高校生の子どもたちがクラス内に作る‘グループ’は、自然発生的にできるインフォーマル・グループである。ただし、前述のようにたまたま仲良くなった者同士が自然と集まり、‘グループ’になっていたというよりは、先に“どこかの‘グループ’に入らなければ”という気持ちから、自分が入れそうな‘グループ’を模索するような様子が見られる。そのため、‘グループ’は、もともとの知り合いがくっついて始まることもあれば、最初に話しかけられた相手や座席の近い人など、物理的に近くにいた者同士で作られることが少なくない(佐藤,2010)。年度当初、クラスの人とまだあまり親しくない段階で、お互いを見知っていて、自分が声をかけても良い相手がいると安心できる。その結果、友人‘グループ’というある程度固定的な仲間集団が形成される。誰がどこの‘グループ’に入っているかはたいていの者によって把握されている(三好, 1998)といった指摘からも、‘グループ’が固定的なメンバーで形成され、多くの者によって‘グループ’成員が把握されていることがうかがえる。

第2の特徴は、‘グループ’の閉鎖性とそれに基づく他の‘グループ’との排他的な関係である。‘グループ’に所属する際、2つの‘グループ’にかけもちで入っていることは少ない。なぜなら、‘グループ’は、‘グループ’の内と外をはっきり区別するという、独特

の排他性を持っているからである。「女子の‘グループ’は排他的であり、お互いに誰ほどの‘グループ’であるというようにひとつの型を決めてしまいがちである」(天野, 1975)という指摘もあるように、以前から‘グループ’にはこのような特徴があったことが考えられる。これは、自分たちの‘グループ’だけでいつも固まっていたい、違う‘グループ’の人にはうちの‘グループ’の子と親しげにして欲しくない、といった気持ちである。外集団に対して不正確で否定的な認識を持つことは、友人‘グループ’に限らず集団によく見られる特性であると言われている(釘原,2011)。他の‘グループ’との境界を高くして‘グループ’間の交流を少なくすることで、自分たちの‘グループ’内の結束を維持しようとする様子うかがえる。加えて、よその‘グループ’と交流しないことで、構成メンバーの移動の可能性を最初から摘んでしまうという思惑もある(佐藤,2011)。また、‘グループ’内のバランスと安定を重視するので、新しいメンバーを入れることには慎重になる(佐藤,2011)。そのため、この固定的な友人関係に亀裂が生じた時には、当事者にとっては深刻な問題であり、大人の介入が必要なこともある。なぜなら、他の‘グループ’への転出は困難だからである。突然クラスの中で孤立してしまうことになり、時には不登校の一因ともなる(住本, 1998)。そして、不登校などから生徒を学校に復帰させようとする場合にはどこかの‘グループ’に入れるように配慮することが必要な場合もある(菅, 1998)。

‘グループ’の第3の特徴は、‘グループ’はそれ自体が成員のパーソナリティーの一部として捉えられることである。三好(1998)は、「～ちゃんといって分からなくても、～の‘グループ’の子といえばだいたいどんな子が分かる」や「クラスの‘グループ’はだいたい3層に分かれていて、イケてる派と普通の派とダサイ系の派」といった中高生の声を紹介し、どういう‘グループ’に入っているのか、ということが、自分はどういう人間として見られているか、ひいては、自分はどういう人間か、ということに直結する傾向があると述べている。それだけに、どういった‘グループ’に自分は入ることができるのかということは、非常に重要な関心事となり得るわけである。さらに三好は、こういう人間とは思われたくない、すなわち自分はこういう人間ではないといったような心の働きは、個人を排斥する‘グループ’のメカニズムと密接な関係を持っていると述べている。

‘グループ’の第4の特徴は、成員にとって、‘グループ’の存在が必ずしも歓迎されているわけではないということである。天野(1975)は、高校生女子518名に対して、「女性のつくる‘グループ’をどう思いますか?」という質問を行っている。そして、高校生女子が、‘グループ’に対して“あまりいいものではないがやむを得ない”と思っていることを報

告しており、以前から‘グループ’の存在は‘グループ’に入っている当人たちには歓迎されていない傾向があることが分かる。多和(2012)は、高校生女子にインタビュー調査を行い、閉鎖的・排他的な‘グループ’について多くの高校生が否定的であったと述べており、現代の‘グループ’にも同様の傾向があるといえる。

‘グループ’の第5の特徴は、‘グループ’間に力関係があることである。鈴木(2010)は、教室にはクラス内の友人‘グループ’間における非公式なステイタスの序列があるとし、これを“教室内(スクール)カースト”と呼び、これについて実証的に調べた。“スクールカースト”という言葉自体を誰が名付けたのかは明確でないが、森口(2008)が、いじめが起こる原因と過程を説明する際に、教室内の力関係を示す言葉として“スクールカースト”という言葉を用いている。その後、若者向けの小説などでも使われるようになった(朝井, 2010)。“スクールカースト”とは、教室内の生徒の人気の高低を要因として生徒の人間関係に序列構造を生み出し、それが教室内の生徒間で共有されることによって、明確な「身分の差」となって現れる現象を指すという。鈴木(2010)によると、中学校以降では、個々の生徒が何らかの‘グループ’に所属し、それぞれの‘グループ’に名前を付けて、‘グループ’間で地位の差を把握しているという。そして、この序列の下位に置かれた生徒は、学校生活への適応に影響を及ぼすと指摘している。

4-2. ‘グループ’の果たす役割

現代の中学生・高校生の作る‘グループ’は、保坂・岡村(1986)による仲間関係の発達段階の中では、チャム・グループに似た性質を持っていること、一方で、チャム・グループにはなかった新たな特徴も持っており、従来の友人関係理論では説明できない現代特有の集団的友人関係であると考えられる。また、当の本人たちにとっては「あまりいいものではない」と感じられているにもかかわらず、‘グループ’はなぜ子どもたちの友人関係の中心的要因として存在し続けるのであろうか。保坂(1993)は、女子高でのカウンセラーとしての経験から、“生徒は自分の属している‘グループ’からはみ出さないように並々ならぬ努力をしている”と述べており、大人から見ると異様なほどの気疲れをしながら、それでも‘グループ’にしがみつこうとしているように思われる。中学生・高校生にとって、‘グループ’とはどのようなものなだろうか。

友人‘グループ’が問題として取り上げられるのは、小学校高学年の女子が始まりである(佐藤,2011)。小学校高学年の時期は、女子にとってはまさに児童期から青年期に入りかける移行の時期である。二次性徴が生じ、心身ともに動揺して不安定な時期であるが、先に大人へと近づいた自分たちに強気になり、大人に反発して大人から離れようとする。そうして大人という安全基地から離脱することで重心は友人関係にシフトし、友人関係を心の支えにするようになる(佐藤,2011)。保坂・岡村(1986)が従来の仲間関係の機能として挙げた、自立に伴う喪失感の補償としての機能が‘グループ’にもあることがうかがえる。佐藤(1995)は、高校生女子が学校生活で一緒に行動する‘グループ’に所属する理由を分析し、その結果、ひとりであることを拒絶しようとする気持ちから‘グループ’に所属していることを明らかにし、‘グループ’は「お互いに自分の安全を高めようとするどちらかというと防衛的な目的のために維持されている」と考察している。大嶽(2007)は、集団で行動する際に、他者と群れることが集団内で適切な行動と見なされ、ひとりであることが逸脱行動として見なされるために、その場合、「誰かと一緒にいなくてはならない」「ひとりぼっちではいけない」と考える規範意識が存在することを指摘し、これを“ひとりぼっち回避規範”とした。青年期の女子は、教室の中で一人になることを非常に恐れており、何人かで‘グループ’を作るときに一人残されること、二人組みになっていくときに最後の一人になって余ってしまうことは、目立ってしまってとても恥ずかしいことと捉えられる(佐藤,2011)。ひとりである人および‘グループ’に入っていない人は、変わった人、まわりから浮いている人、つまらない人と、まわりからはそのように見られていると女子は考えて

いる。そのため、一人になることは恐れられ忌避される。さらに、阿部(1990)は、彼女たちが気にしているのは、みんなが‘グループ’ごとに固まって楽しそうにしている中で、自分たちが一人であるというコントラストであると指摘している。一人でいる自分をまわりがどう見ているか、どう評価しているのかが気になり、いたたまれなくなる。つまり、「一人になるのが嫌」というより他人の目を気にして「一人でいることを周囲から見とがめられるのが嫌」ということである。

この“一人でいると周りの友達から変に思われるのではないか”と心配する気持ちが強いほど、閉鎖的で排他的な‘グループ’を求める気持ちは強くなる。大嶽(2007)は前述のひとりぼっち回避規範の高い者は、他者を‘グループ’から排除しようとする傾向があり、ひとりぼっち回避規範の低い者ではトラブルの渦中に身を置くことが自身の対人関係のあり方の振り返りの契機になるという結果が見られたことから、他者を排除しようとするものは自身が異質者で見られたくないという傾向にあり、自分が他者から排除されないために、他者を排除しようとしてしまう傾向があることを示唆している。女子の‘グループ’で問題となる閉鎖的排他的な‘グループ’ができてしまう理由は、お互い自分が一人にならずに済むように、‘グループ’の子たちに縛りをかけた結果であるといえる。これは、自分たちの安全性を高めようとするあまり、もっと多くの人たちと交流する機会を自ら手放しているということにもなる。

宮本(2005)は、子どもの集団生活には集団同一性の形成という意義があることを指摘し、青年期の子どもたちに友人‘グループ’が必要とされるのは、彼・彼女らの自己を支えるものとして友人関係が重要だからであることを示唆している。宮本のいう集団同一性とは自分と同年代の集団の中に自分はある、そこからはずれていないという思いである。このみんなと同じであるという思いが思春期の子どもたちに安心感を与え、不安定な心を支えてくれるものとなる。児童期には、親から愛されることが子どもの自己を支える。思春期の子どもたちは、友達がいること、友達が自分を受け入れてくれることが自分の支えになる。自分とは何者であるかが明確でなく、社会から自分の存在を認められる機会ももたない彼・彼女らにとっては、友人の存在は自己を支えるものとしての大きな意義がある。‘グループ’は、子どもたちの自己を支えるために形成されていると考えることもできる。

以上より、‘グループ’は、親からの自立に伴う新たな拠り所としての役割、ひとりにならないための保障としての役割、未分化で不安定な自己を支えてくれるものとしての役割を持つと考えられる。新たな拠り所としての機能や自己を支える機能といった側面は、従

来の青年期の友人関係の意義とも重なる部分であるが、今日の‘グループ’に特徴的な役割として、互いに縛りをかけ合いひとりにならないように保障しあうといった保身的な意味合いが強いことが特徴であるといえる。

幸本(2013)は、62名の大学生の女子を対象に高校生のように所属していた‘グループ’について、‘グループ’の良い点、悪い点について、自由記述で回答を求めた。

Table 1 ‘グループ’の良かった点

カテゴリー(データ数)	下位カテゴリー
学校生活の充実(53)	学校生活が楽しくなった 思い出がたくさんできた
ひとりにならず済んだ(42)	イベント時に班に分かれやすい 居場所がある
気楽に過ごせた(40)	気を遣わず楽だった 何でも話せる 素直にぶつかった
親しい友達ができた(28)	深い仲になれた 価値観の似た友達ができた
便利なおことがある(28)	欠席や忘れ物をしたときに便利 情報が得られる 班分けのときに楽 お菓子がもらえた クラスの中で注目を浴び、モテた 試験前にノートを貸してもらえた
内面的なつながり(23)	支えてくれた 精神的な助け合いができた 仲間がそばにいて安心できた 情緒を共有できた
視野が広がった(22)	友だちの意見を聞き、考えが広がった 様々な物事に触れることができた
助け合えること(21)	困った時に助け合える 力を合わせられる
悩みを相談できる(18)	相談に乗ってもらえた 悩みに対し色々な意見をもらえた
良い影響を受けた(6)	明るくなれた 刺激を受けた 自己成長

Table 2 ‘グループ’の悪かった点

カテゴリー(データ数)	下位カテゴリー
過剰な気遣い(55)	自分の意見が言えない 行動を合わせなければならない 顔をうかがって行動しなければならない グループのルールが窮屈
トラブル時の大変さ(30)	けんかやめごとの修復が困難 メンバーの仲違いで雰囲気が悪くなる
けじめがつけられない(22)	悪乗りしてしまう 遊び過ぎてしまう
考え方が合わない(21)	意見がまとまらない 話が合わない
常に一緒にいる負担(19)	一人になりたくてもなれない いつも一緒にいなきゃいけない空気
人間関係・考え方が狭まる(19)	グループ以外の人との交流が減る 考え方・視野が狭くなる
閉鎖的なグループ関係(17)	いつもグループだけで固まっていた 外からの意見を聞き入れない
グループに依存的になる(16)	一人でいることが不安になる 頼りすぎてしまう
仲間はずれが起きる(14)	気に入らない子をはずそうとしていた 仲間はずれにされる グループ外のこと仲良くして裏切り者扱いされた
メンバーの関係性の難しさ(13)	メンバー全員が仲良くなかった 付き合い方が分からなかった めめごとが起きる
流されてしまう(11)	悪い行いでもまわりに流されてしまう
グループに依存的になる(16)	一人でいることが不安になる 頼りすぎてしまう
親密度の差・あぶれる(5)	仲の良さ・差が出る 誰かがあぶれてしまうことがある
グループとして見られる(4)	個人の事でも一括りにされる
人数が奇数(3)	班に分かれるときに誰かが余る可能性がある 2人1組のときに困った
連帯責任(1)	誰かひとりが悪いことをすると道連れになった

KJ法によって結果を分類・整理した結果、‘グループ’の良い点で最も多かったカテゴリーは、「何でも話せる」、「素直にぶつかった」などの下位カテゴリーからなる“気を遣わず素でいられた”カテゴリーであった。次いで、“親しい友達ができた”“学校生活が楽しくなった”といったカテゴリーが多かったが、それらと同程度に“ひとりにならず済んだ”というカテゴリーの回答が見られた。この結果からも、佐藤(1995)や大嶽(2007)が指摘するように、‘グループ’には一人になりたくないからという防衛的な理由で所属していることが分かる。また、少数ではあるものの、「クラスの中で注目を浴び、モテた」や「試験前にノートを貸してもらえた」のように、“得をした”というカテゴリーに該当する回答をした者がいた。三好(1998)が指摘するように、‘グループ’はそれ自体が成員のパーソナリティの一部のように捉えられるため、ある‘グループ’に入ることがその人のステイ

タスを表しているように捉えられる面がある。その‘グループ’にいたがゆえに本来個人では不可能であったことが可能になるなどの機能や、「試験前にノートを貸してもらえた」のような、いわば道具的な機能という側面があるといえる。

‘グループ’の悪かった点については、「悪乗りしてしまう」「遊びすぎてしまう」といった下位カテゴリーからなる“けじめがつけられない”というカテゴリーや、「合わせ過ぎてしまう」などの下位カテゴリーからなる“過剰な気遣い”というカテゴリー，“考え方が合わない”，“人間関係・考え方が狭まる”といったカテゴリーが同程度に多かった。‘グループ’の友達や‘グループ’の雰囲気に合わせてるあまり度を越してしまったり，他者の顔色を窺うあまり言いたいことが言えない，‘グループ’以外の人との交流が減るなど，‘グループ’に合わせ過ぎてしまう苦しさや，友人関係が‘グループ’のみで終始してしまうことに対する不満と捉えることができ，天野(1975)の指摘するとおり，‘グループ’に所属する当の本人たちも，‘グループ’に対して肯定的な気持ちのみではないことが分かる。

第5節 ‘グループ’において必要な対処スキル

5-1. 友人関係と対人スキル

青年期の子どもたちは、以上のように様々な心理的要因から‘グループ’を必要とし、‘グループ’からはずされないように友達に気を遣いながら日々を過ごしている。しかし、中学生や高校生がそのような気持ちを持ち、嫌われないようにと努力することで‘グループ’からはずされなければそれで問題ないと言えるだろうか。青年期には他者と親しい関係を維持したいという気持ちと自分らしさを出したいという気持ちに葛藤が存在し、その葛藤が成長とともに克服されていくと言われている(大嶽,2010)。そして、その変化の背景にあるものとしてアイデンティティの未確立にともなう拒否不安(杉浦,2000)や異質視不安(高坂,2010)が低下すること、ひとりぼっち回避規範(大嶽,2010)が低下することなど、心理的要因が数多く挙げられているが、宮本(2005)が青年期の友人関係の役割の1つとして「対人スキルの獲得」を挙げているように、‘グループ’にも「対‘グループ’スキル」のようなものがあるのではないだろうか。大嶽(2010)も‘グループ’についてのインタビュー調査の質的な分析から、「次第にどのような距離で関われば円滑であり、高ストレス状況に陥らないのか、ということを知得していく」と述べているが、具体的に青年期の子どもたちが‘グループ’で日々を過ごす中でどのようなスキルを見出したのかについて調査した研究はほとんどない。

藤本・大坊(2007)は、現代社会においては、パソコンや携帯電話、スマートフォンなどの間接的媒体の普及が著しく、人と人との対人コミュニケーションが少なくなっているが、学校や会社では人と人との直接的な対人コミュニケーションが不可欠であり、集団の中で、円滑な人間関係を築くためのコミュニケーションスキルは、ますます重要になってきていると述べ、水野(2003)も、良好な対人関係を築く上で重要な要因には、外向性や協調性といったパーソナリティ要因も大切であるが、対人関係を円滑に処理するスキルも重要な要因であると指摘している。青年期の人間関係の悩みについての研究を行った高井(2008)は、悩みの内容を質的に分析し、1番目に多い悩みは「人見知りをしてしまう」のような“性格領域”に分類される回答であったが、2番目に多く挙げられた悩みは「人にどのように接したら良いのか分からない」「集団の中でどう自分を位置づけるのか、どのように振る舞えばよいか分からない」といった“対人スキル不足”に分類される回答であったと報告している。また、“合わない相手・嫌いな相手との付き合い方”に分類される回答も4番目に多く、女子については男子には見られなかった“人との距離の取り方”に悩むものが一定数いるこ

とも示している。一方で、悩みはないと回答した者の記述についても詳細に分析し、自分自身の受け止め方を変えることや、コミュニケーションスキルに工夫を凝らすことで悩みをあまり感じなくて済むようになっている様子や適度な距離感を保つことでスムーズな人間関係を築くことができるようになってきていることを報告し、対人関係を維持するためにコミュニケーションスキルを持つことが有効であることを示唆している。大坊(2006)も、円滑な対人関係を進めていくためには、総合的なソーシャルスキルが重要であり、それらのソーシャルスキルを臨機応変に使える必要があると述べている。様々なソーシャルメディアの普及によって直接的なコミュニケーションが少なくなり、また、環境の変化によりギャング・グループで経験すべき友達との関係性を経験できなくなっている現代の青年期の子どもたちが、友人‘グループ’に入って、暗黙の集団規範に拘束されると同時に集団の同調圧力の影響も受けながら、その絶妙なバランスの上に立って関係を維持しようとする場合、単なる社交性や親和性のようなパーソナリティだけでなく、上述のような対人スキルを身に付けることが有効であると考えられる。

5-2. 良好な関係性の維持に有効なスキル

水野(2003)は、青年の良好な対人関係の維持に必要なスキルがどのようなスキルであるかを調べた。水野によれば、初対面の者同士が知り合い、関係性が開始されようとするときには自己主張のような表現性のスキルが有効であり、スムーズに関係性を開始させることができるが、比較的早い段階でこのスキルは役割を終え、その代わりに制御のスキルが関係の形成・維持に重要な役割を果たすことを示し、対人関係の生成には、主張スキルや関係開始スキルよりも関係を維持するための制御スキルが重要であり、このスキルが不足していると良好な関係を維持できないと指摘している。社会的場面で、現状と個人との基準を比較してズレがあった時に、いかに自己を制御できるかといった全般的な自己制御能力に関する研究は、欧米では主に自己抑制的側面に焦点が当てられてきた(Kopp,1982; Thoresen & Mahoney,1974)。自己主張ができて当然の文化では、自己主張することよりも抑制することに重点があったためと考えられる。これに対し、自己抑制を美德とし、自己主張を苦手とする日本では、柏木(1988)が自己制御を“自分の欲求や意思を明確に持ち、これを他人や集団の中で表現、主張し、また行動として実現する自己主張的側面と他者や集団との関係で、自分の欲求や行動を抑制、制止する自己抑制的側面の2側面がある”と定義して以来、自己制御は自己主張と自己抑制の2側面からなるものとして扱われてきた。

いくつかの研究(伊藤,1999 など)では、自己主張と自己抑制は個人の中で両立しながら発達すること、かつ社会的場面において適応的な行動をとるためには社会化の過程でこの2側面がバランスよく発達することの重要性が示されている。原田・古澤・吉田(2008)は、幼児期は主に養育者からの要請に応えることで自己を制御する他律的な段階にあるといえるが、青年期になると社会が要請する規範が内在化された上で自己制御をするようになるため、自律的な自己制御段階とみなすことができると述べ、自己制御の確立は主に青年期以降であり、幼児期における自己制御とは質的に異なると指摘している。その上で、社会的場面で、個人の欲求や意思と現状認知との間でズレが生じた際に内的基準・外的基準の必要性に応じて自己を主張するもしくは抑制する能力を社会的自己制御と定義した。‘グループ’においても、自分の意見や考えを表出して良い場面と抑えるべき場面の双方があり、自発的に自己の行動を制御することが重要であると考えられる。青年期の社会的場面での自己制御に類似する概念としては、社会的スキルがあげられる。社会的スキルの構成概念は多様で、既に多くの研究蓄積がある。社会的スキル概念では、コミュニケーションの巧拙がそれに必要なスキルの有無に左右されると捉える。これまでの研究知見に従えば、社会的スキルを高く有している者は様々な社会的適応性を備えており、精神的健康(五十嵐,2002)、学業成績(Hall&Gaeddert,1960)など人生の様々な面での適応的な結果と社会的スキルとの関連が示されている。反対に社会的スキルの不足は、抑うつや孤独感(和田,1991)など様々な不適応状態と関連すると報告されている。また、実践介入の場でも後天的に獲得可能という社会的スキル概念を基にしたソーシャルスキルトレーニングが積極的に利用されている。社会的スキルは、良好な対人関係行動それ自体を支えるのみならず、その後の社会的適応にもつながる、重要な技量だといえる。しかし、石井(2006)は、社会的スキル研究の現況を概観し、従来研究が、特に測定において社会的スキルとして取り上げているのは親和や主張などといった所謂「望ましい」表出形態のコミュニケーションに限定されている点と、測定とSST時においてはスキル行使時の状況要因について考慮が不足している点を指摘した。そして、現実場面に効果を持つ社会的スキル行使を検討するために、スキルレパートリーの多様性や状況の認知及びそれらに基づいたスキルの巧みな調節を重視した「メタ・ソーシャルスキル」を提案した。石井(2007)が「メタ・ソーシャルスキル」モデルの提案の中で特に重視したのは、社会的スキルの中に回避や欺瞞など、従来望ましくないとされてきたネガティブ・コミュニケーションを含める必要性である。現実的にはきれいごとで済まされないことが多々あり、ネガティブなスタイルのコミュニケーションをポジティ

ブなコミュニケーションと併せて使用することで関係性をうまく保っていることは容易に推測できる。そこで、石井(2007)は、大学生らを対象としたインタビュー調査を通してネガティブコミュニケーションの実態把握を行い、それらの適切性や使用可能性についての評定結果をもとに、従来の社会的スキルと重複する、主張や関係維持行動からなる「対人的接近化スキル」と回避や欺瞞など内面の気持ちを正直に表明しない、関係を収束させるコミュニケーション行動からなる「対人的距離化スキル」との2因子構造の尺度を作成した。この「対人的距離化スキル」は、三好(1998)が‘グループ’における友人との関わりは、内面的にどうであれとりあえず調子を合わせて相手を安心させておく関わりがよく見られると述べているように、‘グループ’での友人との関わりにおいても重要なスキルであると考えられる。

また、自己制御の2側面のうち自己主張的側面については、関係性の維持には関連がないことが示されている(水野,2001)が、一方で、現代の青年期の友人関係の変容について、國枝・古橋(2006)は、ギャング・グループでの活動を通して習得すべき適切な自己主張の方法が身に付いていないためであると指摘している。近年、主張をするかしないかといった2分法的な捉え方をするのでなく、どのように自己主張をするのかといった適切な自己主張の仕方を考えるコミュニケーションスキルの育成が注目されており、その1つとしてアサーション(assertion)が挙げられる。アサーションとは、「自分の意見・考え・気持ち・相手への希望等を相手に伝えたいときは、なるべく率直に正直に、しかも適切な方法で伝えようとする自己表現」(平木,1993)である。「適切な方法」とは、「自分を大切にすると同時に、相手のこともまた大切にしようという相互尊重の精神にもとづいた」という意味である(吉田・園田 2013)。アサーションは、1950年にアメリカで誕生し、様々な理論の影響を受けて発展してきた。当初は、行動療法の一技法として主張訓練法が開発され、主に対人関係上の問題を抱えた個人を対象に、対人不安の除去や適切な社会技能の形成をはかる治療法として用いられてきた(古市・乗金・原田,1991)。1960年代に入り、公民権運動の高まりとともに人間が生まれながらに持つ権利としてのアサーション権というものが叫ばれるようになり、注目を浴びるようになった。1970年代にはアサーションはさらに多くの人に知られるようになり、より効果的・積極的な人間関係の促進に活用されるようになった(平木,1993)。日本では、1980年代に平木典子により導入され、アサーションという言葉が広く知られるようになってきた。現在、アサーションは教育現場、看護の分野、企業研修など多岐にわたる分野において用いられている。吉田・園田(2013)は、自分の言いた

いことが言えない状況がストレスや心身の不調につながる可能性を指摘している。そして、アサーションスキルの育成による、自分の言いたいことや気持ちを丁寧に確かめそれを否定しないで良いという実感が、よりアサーティブな表現に向かうこと、自分の気持ちや意見は自分のものであるといった自己感覚の育成や強化につながることを述べている。このようなアサーション研究における指摘から、アサーションは、自尊感情等、自己に対する捉え方、それを通して見る他者の認識や関わり方に影響を与えることが考えられる。

第2章 本論文の目的と構成

第1節 先行研究の課題と問題点

第1章では青年期の友人関係や‘グループ’についての研究動向を概観したが、以下のような問題点が挙げられる。

1. 青年期の友人関係は、この時期に親友が登場することが大きなテーマであり、1対1の関係性について調査した研究が多かった。しかし、現代の中学生・高校生の多くが‘グループ’に入っていることから、‘グループ’に焦点を当てる必要があると考えられるが、‘グループ’についての知見は、現場で子どもたちに関わる臨床家が経験的に感じたことから述べられた記述が多く、実証的に調べた研究は少ないのが現状である。
2. 青年期の友人関係の発達には、中学生から高校生にかけて変化することが明らかになっており、同質性を重視した関係性から個別性を重視した関係へと変化すると言われてきた。しかしながら、インターネットやソーシャルメディアの発展により青年を取り巻く環境が大きく変化し、友人関係も大きく変わっていることが予測される。保坂(1986)の述べた仲間関係の3つの段階は、ギャング、チャム、ピアとそれぞれの段階を踏んで次に進むとされているが、現代の子どもたちは、小学校時代にギャング・グループでの活動によって学ぶべきことを学ばないままに中学生になり、チャム・グループから関係性がスタートすること(保坂,2010)、対人経験の少なさから相手が自分を受容してくれるだろうという信頼が持ちにくく、それにより自己開示ができなくなっている(福重,2006)と指摘され、そのために大学生になっても波風の立たないコミュニケーションに終始している(齋藤,2008)と考えられる。従来、高校生のときに達成されると言われてきたピア・グループの課題は自分と他者との異質性を認め合い、違いを乗り越えることである(保坂,1986)が、このような環境にある現代の青年たちがこれまでの理論通りに高校生の段階でピア・グループの関係性に到達するとは考えにくく、青年期を通して関係性の変化が見られない可能性も考えられる。青年期の友人関係の関係性の変化については、落合・佐藤(1998)が友人関係の発達の变化を調べて以降、実証的に調べた研究はなく、‘グループ’における関係性やグループに対する認識についての变化も検討されていない。

3. ‘グループ’は、これまでの知見から中学生から高校生にかけての‘グループ’に対する認識が少しずつ変化することが大嶽(2010)のインタビュー調査から示唆されている。具体的には、中学生では無理して一緒にいる関係性が多く、ネガティブな認識が強いが、高校や大学と年齢を重ねるごとに、「無理して一緒にいなくてもいい」という気持ちを持てるようになり、ポジティブな認識へと変化すると述べられている。そして、そのような変化の背景には個人の心理的な発達と対人スキルの獲得があるのではないかと指摘している。個人の心理要因については、「拒否不安」「異質視不安」「ひとりぼっち回避」などいくつかの要因が調査によって示されている。一方で、対人スキルに焦点を当て、調査した研究は少ない。しかし、青年期の友人関係を円滑に保つために必要なのは、社交性や親和性といったパーソナリティ領域ばかりでなく、対人スキルの獲得が有効であることも指摘されている。

第2節 本論文の目的

第1節で述べた3点の問題点を踏まえ、本研究では‘グループ’に焦点を当て、‘グループ’における青年期の友人関係の発達的变化と‘グループ’において円滑な関係性を維持するのに有効な対処スキルについて研究を行う。本研究の目的は大きく分けて以下の2点である。

1. 現代の中学生や高校生の‘グループ’における友人関係の発達的变化について、これまで述べられてきた落合・佐藤(1998)や保坂(1986)の述べる関係性の発達と同様の変化が見られるのか、あるいは土井(2009)や齋藤(2008)の述べるように青年を取り巻く環境の変化から、関係性の発達にこれまでと違った変容が見られるのかについて、実証的に検討することを第1の目的とする。
2. 中学生や高校生が毎日を‘グループ’で過ごす中でどのようなスキルを見出し、行使しているのかについて、第1章で述べた「社会的自己制御」「対人接近化・距離化スキル」「アサーションスキル」の3つの概念を用いて、円滑な関係性を維持するために有効な対処スキルはどのようなスキルであるかを明らかにすることを目的とする。

第3節 本論文の構成

<研究1>

中学3年生から高校2年生までの継続的な質問紙調査により、‘グループ’の関係性や認識、および友達との付き合い方に学年による変化があるかどうかを検討する。また、友達との付き合い方をいくつかのパターンに分け、付き合い方のタイプ別に‘グループ’の認識を調べることで、どのような付き合い方が良好な‘グループ’認識と関連があるかについて検討する。

<研究2>

中学2年生と高校2年生・3年生への調査を通し、学年差による‘グループ’への認識に変化について再度検討する。また、自己の安定性と自己の調整の仕方に注目し、‘グループ’への認識との関連を調べる。また、‘グループ’からはずされた経験、‘グループ’から友人をはずした経験の有無による自己制御の違いについて検討する。

<研究3>

大学生を対象とした調査により、中学生や高校生ときの‘グループ’においてどのようなことを学び、どのようなスキルを獲得したかを探索的に検討する。

<研究4>

中学生・高校生・大学生への調査を通し、対処スキルとして対人距離化スキルおよびアサーションスキルを用いて、双方のスキル能力が学年により違いがあるかどうか、また、獲得により‘グループ’への認識にどのような変化があるかについて検討する。

<研究5>

学年以外の発達差の指標として関係性ステイタスを作成し、中学生・高校生・大学生がどの段階に多いかを調べることで、現代青年の関係性の特徴を実証的に調べる。また、関係性ステイタスの差とメタ・ソーシャルスキルおよびアサーションスキルの関連を検討し、関係性ステイタスが高い者と低い者の特徴を調べる。

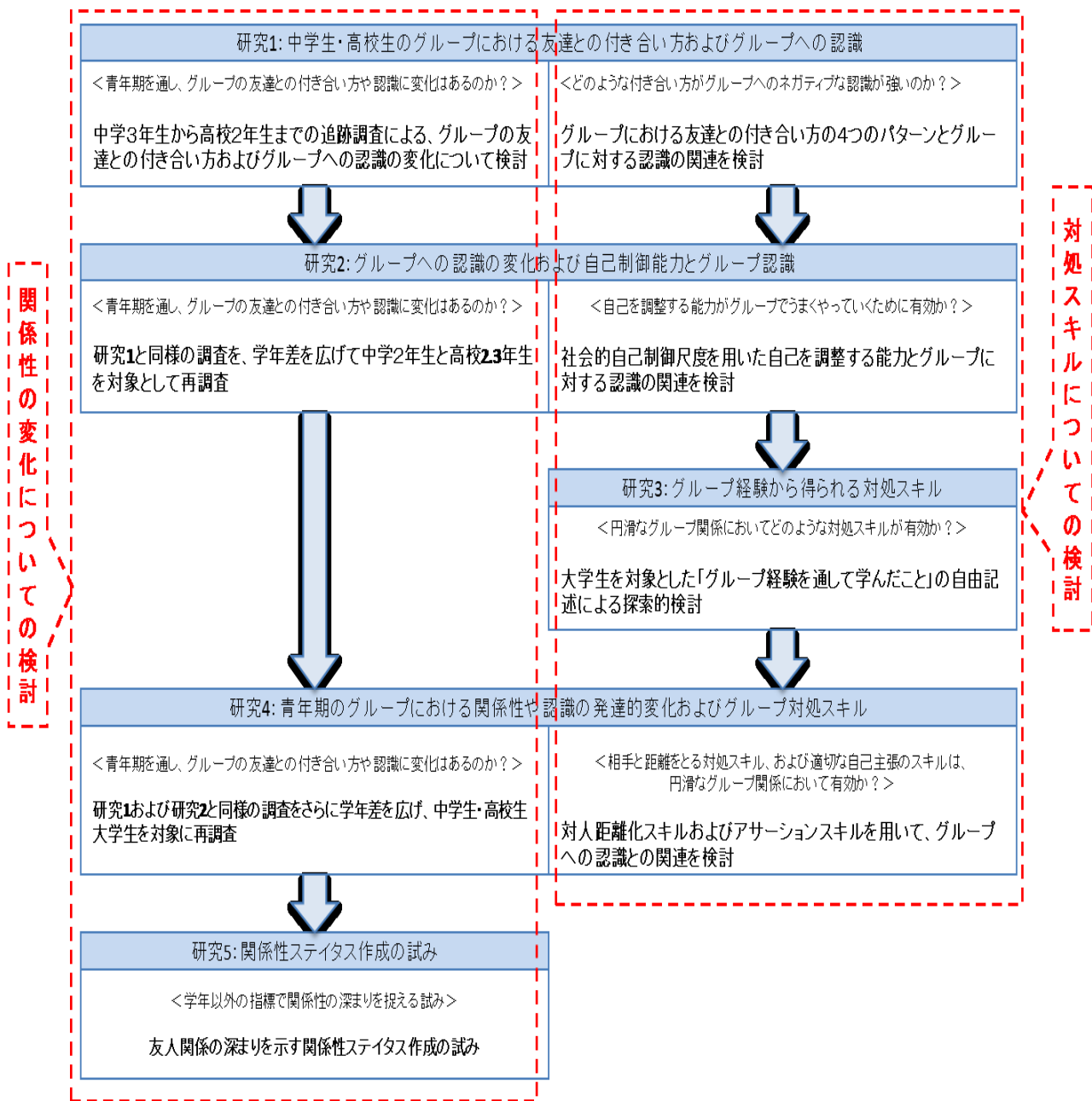


Figure 1. 本論文の研究構成

第3章 研究1 中学生・高校生の‘グループ’に対する認識

—3 学年の比較と友達との付き合いによる‘グループ’に対する認識の違い—

第1節 目的

第1章で述べたように、これまでの‘グループ’に関する知見から、中学生では誰かと一緒にいなくてはならない気持ちが強く、友人と同質であることを望むため自分をあまり出さない「互いを束縛しあう窮屈な関係」が多いが、高校生になると同質性を重視した関係性から異質性を重視した「程よい関係性」へ移行し、自分を出しつつ親しい関係性を維持することが可能になることが示唆された。本研究では、これらの知見に基づき、‘グループ’に所属している中学生・高校生を対象に、‘グループ’の友達との関わり方および‘グループ’に対する認識に学年による変化があるかどうかを検討することを第1の目的とする。また、「窮屈である」「負担に感じる」といった‘グループ’へのネガティブな認識や「楽しい」「気楽である」といった‘グループ’へのポジティブな認識と‘グループ’の友達との付き合い方の関連を調べることで、どのような付き合い方ができれば‘グループ’に対してネガティブな感情を抱かずに‘グループ’関係を維持できるのかを明らかにすることを第2の目的とする。

第2節 方法

2-1 調査対象者および調査時期

宮崎県内の中高一貫校に通う男女に対し、中学3年生から高校2年生までの3年間にわたって毎年質問紙調査を実施した。学年ごとの人数と調査時期は以下のとおりである。

Table 3 研究1の調査対象と調査時期

学年	男子	女子	平均年齢(SD)	調査時期
中学3年生	76名	71名	14.71(.46)	2007年11月
高校1年生	84名	67名	15.35(.48)	2008年7月
高校2年生	79名	66名	16.74(.51)	2009年12月

2-2 調査内容

a. フェイスシート

性別・学年についてたずねた。

b. 友達との付き合い方に関する質問 14 項目

落合・長沼(1998)は、青年期に見られる友人との付き合い方を実証的にできるだけ多く析出し、そこで出された多種類の友達との付き合い方について、その底辺に共通して見られる心理的要因を解明しようと試みた。その結果、青年期の友達との付き合い方は少なくとも16種類があることが見出された。本研究では、中学生から高校生にかけて、互いを束縛しあう窮屈な関係性から自分を出しつつ親しい関係を維持することが可能になる(杉浦,2000)ことから、「嫌われないように気を遣う付き合い方」および「自己を開示して関わろうとする付き合い方」の2つの項目を使用した。

c. 友人‘グループ’に関する質問項目

①友人‘グループ’に所属しているかどうかについての質問

「あなたは現在、休み時間やお昼ごはんの時に一緒に過ごすような同性の友人‘グループ’

に所属していますか？」という質問に対し、「はい」または「いいえ」の2件法で回答を求めた。

②友人‘グループ’に関する質問 27 項目

三好(1998)は、青年期女子の友人関係において頻繁に見られる友人‘グループ’について女の子が‘グループ’をどのようなものだと考え、どのように関わっているのかについて注目し、自由記述に手がかりを求めながら項目を作成した。本研究では、この‘グループ’認識質問紙の中から 27 項目を使用し、①で‘グループ’に所属している」と答えた人のみ回答を求めた。

第3節 結果

3-1 友達との付き合い方および‘グループ’認識に関する質問項目の因子分析結果

友達との付き合い方および‘グループ’への認識に関する質問項目について、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量が.35に満たない項目および複数の因子に高い負荷量を示す項目を除外し、固有値の低下パターンと因子の解釈可能性からそれぞれの因子数を決定した。因子分析結果は、Table4, Table5のとおりである。

Table 4 友達との付き合い方項目の因子分析結果

	因子		平均	SD
	I	II		
第1因子：嫌われないように気を遣う付き合い方 ($\alpha = .808$)				
友達にいやな思いをさせないように気を使っている	.76	-.04	1.73	.79
友達にきらわれないように行動している	.73	.02	3.38	.77
周りの友達みんなに合わせようと気をくばっている	.72	-.12	2.21	.98
友達を傷付けてはいないかと心配になる	.68	-.01	2.73	1.04
みんなに好かれていたい	.46	.28	1.73	.81
第2因子：自己を開示して関わろうとする付き合い方 ($\alpha = .714$)				
友達とは何でも本音で話し合うようにしている	-.08	.81	2.69	1.00
友達には心を開いて付き合っている	.04	.71	2.45	1.03
友達とは深くかかわらないようにしている	.11	-.52	2.05	.85
いったん友達になったら、できるだけ長く付き合いたい	.18	.45	1.85	.93
因子間相関				
	I	II		
	I	.40		
	II			

友達との付き合い方項目では、2因子に分類された。第1因子は、「友達に嫌な思いをさせないように気を遣っている」「友達に嫌われないように行動している」などの5項目からなる因子であった。これは、自分の意見や考えを積極的に表明するよりも、周りの友達の様子を見て自分の振る舞いを決めるような気を遣った付き合い方であると解釈できる。よって、第1因子は「嫌われないように気を遣う付き合い方($\alpha = .808$)」と名付けた。第2因子は、「友達とは何でも本音で話し合うようにしている」「友達には心を開いて付き合っている」などの4項目からなる因子である。これは、友達に対して自分の意見を素直に表明し、本音を出し合って関わろうとする付き合い方であると解釈できる。よって、第2因子は「自己を開示して関わろうとする付き合い方($\alpha = .714$)」と名付けた。

Table 5 ‘グループ’ 認識に関する質問項目の因子分析結果

	因子				平均	SD
	I	II	III	IV		
第1因子：グループへの依存 ($\alpha=.805$)						
グループの人たちと離れて一人で行動するのはさみしい	.747	-.050	-.162	.000	2.73	1.037
グループの人が一緒にいてくれないと一人では行動できない	.665	-.132	-.062	.166	1.97	.891
グループからはずされるのではないかと不安を感じることもある	.592	-.284	.197	.060	2.06	1.040
一人でいるよりはグループの人と一緒にいたほうがいい	.566	.125	-.260	-.095	3.23	.824
学校内で一人で行動することはほとんどない	.549	.118	.060	-.165	2.74	1.044
グループの人がいるから学校が楽しい	.530	.346	-.169	.031	3.38	.773
グループの人とつねに連絡を取っていないと不安だ	.482	-.048	.195	.194	1.73	.810
グループの人の行動に合わせるがよくある	.472	.116	.132	-.063	2.76	.855
グループにいますと、居場所がない不安感を感じなくてすむ	.387	.242	.061	.066	2.76	1.038
グループの人からのメールは必ず返信する	.384	.255	.117	-.174	3.02	1.029
第2因子：グループの気楽さ ($\alpha=.757$)						
グループの人に対して、気を使わず気楽にしていられる	.056	.712	-.006	.184	3.16	.869
グループの中でも自分の意見はちゃんとと言える	-.093	.633	.213	-.186	3.26	.847
今のグループ関係に満足している	.024	.616	-.208	.160	3.42	.741
グループの人全員が仲良しである	.222	.562	-.026	.032	3.36	.798
グループの人となやみ事を相談しあうことができる	.405	.521	.103	-.065	3.02	.936
第3因子：グループの負担感 ($\alpha=.720$)						
グループ行動をめんどうだと感じることもある	-.123	.188	.892	.014	2.21	.984
グループの人といつも一緒にいるとつかれる	-.031	.020	.622	-.026	2.05	.850
グループの人と一緒にいると、自分らしさがうしなわれる気がする	.221	-.123	.503	.142	1.73	.788
他のグループをうらやましく思うことがある	.371	-.186	.435	-.038	1.85	.930
第4因子：グループの束縛感 ($\alpha=.710$)						
他のグループの人たちと仲良くできない	-.056	.006	-.056	.869	1.69	.810
グループで固まっていて、他のグループの人と話す機会がない	.065	.075	.040	.699	1.69	.817
グループの人とは距離を置いて行動している	-.236	.100	.319	.446	1.69	.781
因子間相関						
I		0.409	0.116	0.134		
II			-0.311	-0.084		
III				0.408		
IV						

‘グループ’ への認識に関する質問項目では、4 因子が抽出された。第 1 因子は、「‘グループ’ の人たちと離れてひとりで行動するのはさみしい」「‘グループ’ の人が一緒にいてくれないとひとりで行動できない」などの 10 項目からなる因子で、何をするにも ‘グループ’ の人と一緒であることを望み、ひとりになるのを避けるような心理状態であると解釈できる。よって、第 1 因子は「‘グループ’ への依存($\alpha=.805$)」と名付けた。第 2 因子は、「‘グループ’ の人に気を遣わず楽にしていられる」「‘グループ’ の中でも自分の意見はきちんとと言える」などの 5 項目からなる因子で、‘グループ’ の中で他のメンバーに気を遣いすぎずに気楽に過ごしている状態であると解釈できる。よって、第 2 因子を「‘グループ’ への気楽さ($\alpha=.757$)」と名付けた。第 3 因子は、「‘グループ’ 行動をめんどうだと感じる」「‘グループ’ の人と一緒にいると疲れる」など、‘グループ’ にいることによる負担感を表していると解釈できる。よって、第 3 因子を「‘グループ’ の負担感($\alpha=.720$)」と名付けた。第 4 因子は、「他の ‘グループ’ の人たちと仲良くできない」「‘グループ’ で固まって

いて他の‘グループ’の人と話す機会がない」などの3項目からなる因子で、自分の所属する‘グループ’に縛られ、他の‘グループ’との交流が極端に少なくなっている状態であると解釈できる。よって、第4因子を「‘グループ’の束縛感($\alpha = .710$)」と名付けた。

1-1. 友達との関わり方, ‘グループ’ 認識の学年による変化

1-1-1. 友達との関わり方の学年差

友達との関わり方に関する質問項目の2因子について、学年を独立変数として男女別に分散分析を行った。その結果、いずれの因子においても男女ともに有意な差は見られなかった。中学校3年生からから高校2年生にかけては、気を遣って友達に合わせようとする付き合い方や積極的に自己を開示しようとする付き合い方には大きな変化がなく、中学3年生時の友人関係のスタイルが高校2年生の時にも継続している結果となった。

1-1-2. ‘グループ’ 認識の学年による変化

‘グループ’ 認識に関する質問項目の4因子について、学年を独立変数として男女別に分散分析を行った。その結果、いずれの因子においても男女ともに有意な差は見られなかった。友達との関わり方と同様に、‘グループ’ への認識についても中学3年生から高校2年生にかけて大きな変化はないことが分かった。

1-2. 友達との関わり方による ‘グループ’ 認識の違い

1-2-1. 友達との付き合い方の分類

友達との関わり方に関する質問項目の「嫌われないように気を遣う付き合い方」因子および「自己を開示して関わろうとする付き合い方」因子の2因子について、それぞれ平均点を境に高低群に分け、2つの得点の組み合わせから4つの群に分類した(Figure.2)。

1つめは、嫌われないように気を遣う付き合い方、自己を開示して関わろうとする付き合い方のいずれも高い群である。積極的に自己を開示して本音で関わろうとする一方で、友達に嫌われないように気を遣うこともしており、友達への親和性が高い群であると解釈できる。そのため、「親和群」と名付けた。

2つめは、「自己を開示して関わろうとする付き合い方」は高いが「嫌われないように気を遣う付き合い方」は低い群である。積極的に自己を開示して付き合いおうとするが、嫌われないように気を遣ったり取り繕うことは少なく、常に本音を出して関わっている群であ

ると解釈できる。そのため、この群を「本音群」と名付けた。

3つめは、「嫌われないように気を遣う付き合い方」は高いが、「自己を開示して関わろうとする付き合い方」は低い群である。自分の気持ちや意見を表明することを控えて、常に嫌われないように周りに気を配って関わっている様子が窺え、自己防衛的な関わり方であると解釈できる。そのため、この群を「防衛群」と名付けた。

4つめは、「嫌われないように気を遣う付き合い方」も「自己を開示して関わろうとする付き合い方」のいずれも低い群である。本音を出して関わろうとする傾向も低く、友達に気を配ったり嫌われないように気を付けようとする傾向も低く、友達とあまり深く関わろうとしない群であると解釈できる。そのため、この群を「消極群」と名付けた。

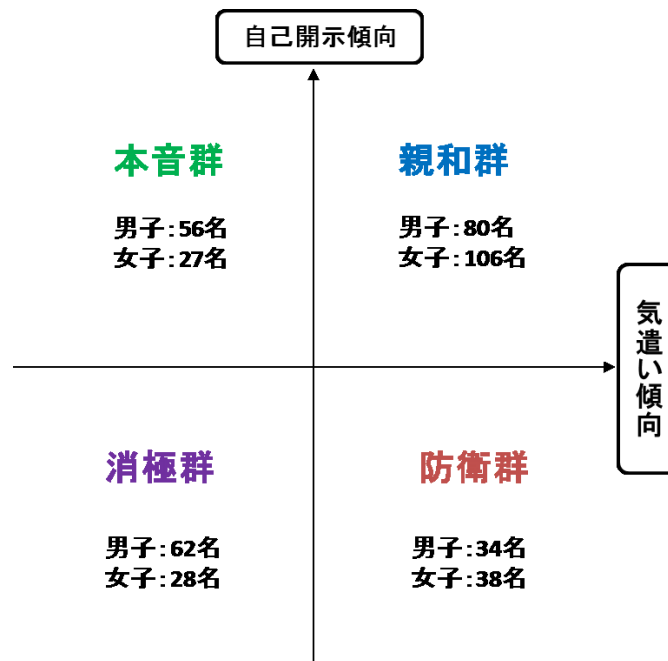


Figure 2 友達との付き合い方の4群の分類

1-2-2.友達との付き合い方による‘グループ’認識の違い

友達との付き合い方の4つの群について、付き合い方の違いによって‘グループ’への認識がどのように変わるかを調べるために、4つの群を独立変数として男女別に分散分析を行った。結果は、以下の通りである(Table6, Table7)。

Table 6 友達との付き合い方による‘グループ’への認識(男子)

友達との付き合い方4群とグループ認識(男子)				
因子名	付き合い方	平均値(標準偏差)	F値(自由度)	多重比較
気楽さ	親和群	3.30(.477)	22.403(3,118)***	消極<親和本音,防衛
	本音群	3.29(.459)		
	防衛群	3.04(.465)		
	消極群	2.57(.645)		
負担感	親和群	1.94(.697)	2.675(3,185)*	本音<防衛
	本音群	1.80(.591)		
	防衛群	2.20(.593)		
	消極群	2.05(.556)		
依存性	親和群	2.78(.476)	15.684(3,185)***	消極<親和,防衛 本音<親和
	本音群	2.38(.432)		
	防衛群	2.53(.556)		
	消極群	2.17(.525)		
束縛感	親和群	1.75(.684)	3.431(3,187)*	本音<消極
	本音群	1.59(.527)		
	防衛群	1.74(.562)		
	消極群	1.99(.605)		

*** $p < .001$, * $p < .05$

Table 7 友達との付き合い方による‘グループ’への認識(女子)

友達との付き合い方4群とグループ認識(女子)				
因子名	付き合い方	平均値(標準偏差)	F値(自由度)	多重比較
気楽さ	親和群	3.53(.476)	14.19(3,186)***	消極,防衛<親和,本音
	本音群	3.63(.425)		
	防衛群	3.13(.522)		
	消極群	2.96(.663)		
負担感	親和群	1.89(.665)	5.93(3,189)***	親和,本音<防衛
	本音群	1.63(.594)		
	防衛群	2.30(.654)		
	消極群	2.00(.635)		
依存性	親和群	3.04(.399)	33.74(3,183)**	消極<本音,防衛<親和
	本音群	2.50(.472)		
	防衛群	2.74(.510)		
	消極群	2.14(.500)		
束縛感	親和群	1.61(.660)	2.44(3,188)*	本音<防衛
	本音群	1.32(.418)		
	防衛群	1.73(.642)		
	消極群	1.60(.516)		

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

男子では、「気楽さ」において消極群が他の 3 群に比べて 0.1%水準で有意に低かった。「グループ」の友達と本音で関わろうとしたり積極的に自己開示しようとする人が少なく、友達に嫌われないように気を遣う姿勢も少ない消極な付き合い方をしている人たちは、他の付き合い方の人たちに比べて「グループ」で気楽に過ごせているという認識が低く、居心地の良さをあまり感じられていないことが示された。

「負担感」では、防衛群が、本音群に比べて 5%水準で有意に高かった。嫌われないように気を遣ったり周りに気を配ることが多くあまり自分の本音を出さないような付き合い方は、積極的に自己開示をし、嫌われないための気遣いはあまりしない本音群に比べて「グループ」にいることによる心理的な負担が大きいことが分かった。

「依存性」では、0.1%水準で親和群および防衛群が消極群に比べて有意に高く、親和群は本音群とも有意な差が見られた。周りの友達への気遣いの傾向が高い親和群および防衛群は、気遣いをあまりしない消極群および本音群に比べて、常に「グループ」の人と一緒にいなければ不安であるような依存的な傾向が高いことが分かった。

「束縛感」では、消極群が本音群に比べて 5%水準で有意に高く、積極的に自己開示をし、周りへの気配りが少なめの本音群に比べて、自己開示をしようとする関わり方も周りへの気遣いも低い傾向のある消極群は、所属する「グループ」に縛られて「グループ」外の人との関わりを制限されているような束縛感をより感じている結果となった。

女子では、「気楽さ」において、親和群および本音群が防衛群および消極群に比べて 0.1%水準で有意に高かった。親和群と本音群は自己を開示して関わろうとする付き合い方が共通している一方で、防衛群および消極群は自己開示をしないことが共通する群であることから、自己を開示して付き合いしている群の方が、「グループ」で気楽に過ごせており、居心地の良さをより認識していることが分かった。

「負担感」では、防衛群が親和群および本音群に比べて 0.1%水準で有意に高かった。防衛群は嫌われないように周りの友達に気を遣って自己開示はしない群であり、一方の親和群および本音群は積極的に自己開示をしようとする群であることから、自己開示をせずに周りへの気遣いが多い付き合い方は、「グループ」での負担感がより強く認識されることが分かった。

「依存性」では、親和群が最も高く、1%水準で他の 3 群と有意な差が見られた。また、本音群および防衛群についても消極群と有意な差が見られた。積極的に自己開示をし、周りへの気配りもしながら友達と関わろうとする付き合い方をしている親和群が最も依存性

が高く、自己開示をあまりしようとせず、かつ嫌われないように気を使うことも少ない消極群が最も依存性が低い結果となった。

「束縛感」では、防衛群が本音群にくらべて5%水準で有意に高かった。積極的に自己を開示して関わろうとし、周りへの気遣いの少ない本音群にくらべて、周りへの気遣いが多く自己を開示することの少ない防衛群は所属する‘グループ’に縛られて他の‘グループ’との関わりを制限されるような窮屈さを感じていることが分かった。

第4節 考察

1-1. ‘グループ’での友達との付き合い方および‘グループ’への認識の学年差

‘グループ’での友達との付き合い方および‘グループ’への認識については、いずれも学年による有意差は見られず、中学3年生から高校2年生にかけての数年間では、友達との付き合い方や‘グループ’への認識に変化がないことが示された。落合・佐藤(1996)は青年期の友達との付き合い方について、中学生では「みんなと同じようにする付き合い方」が中心であるが、これが徐々に減少し、「自己を開示して積極的に理解しようとする付き合い方」が増えると述べている。また、榎本(1999)も、中学生から高校生にかけて、中学生では友人と遊んだり友人との行動や趣味の類似性を重視した付き合い方から、互いの相違点を認め合い、互いに尊重した関係性へ変化することを指摘している。これらを踏まえると、本研究の友達との付き合い方の項目である「嫌われないように気を遣って関わろうとする付き合い方」は徐々に減少し、「自己を開示して関わろうとする付き合い方」の傾向は学年が上がるにつれて高くなることが予測されたが、変化がなかった。保坂(2010)は、互いの異質性を認め合い、自立したひとりの個人として互いを尊重しあった関係性と定義されるピア・グループは、従来は高校生の多くに見られたが、近年、ピア・グループへの以降が先延ばしになっていることを示唆している。また、インターネットやソーシャルメディアなどの急速な発展により、青年期の子どもたちの対人関係や仲間関係に変化が見られることが多く報告されており(土井,2009;福重 2006;浅野,2006 など)、以前の青年期の子どもたちの関係性の変化と現代の青年期の子どもたちの関係性の変化には少し違いがある可能性が考えられる。一方で、本研究の調査間隔の短さが関係していることも考えられる。本調査では、中学3年生から学年が上がるごとに1回ずつ質問紙調査を毎年行ったが、1回目と2回目の調査間隔が約7ヶ月など、十分な間隔が空いていなかった。今後は上記2点を踏まえ、検討していく必要がある。

‘グループ’に対する認識については、実証的に調べた研究はほとんどないが、これまでの知見から、中学生では誰がどの‘グループ’ということへの囚われや‘グループ’成員からの束縛が最も高く(大嶽,2010)、互いを束縛しあう窮屈な関係性であるのに対し、高校生では自分を出しつつ親しい関係性を維持することが可能になり(杉浦,2000)、程よい関係性へと変化していくことが述べられ、「無理して一緒にいなくてもいい」という認識に変化する(大嶽,2010)ことで束縛感や負担感が減少することが述べられる一方で、大学生になっても表面的な関係性に終始する‘グループ’が見られるといった指

摘もある。付き合い方が変化しなければ‘グループ’での居心地や負担感なども変化しないと考えられるため、友達との付き合い方同様、調査間隔の幅や現代の中学生・高校生の‘グループ’における関係性や認識の変化が以前とは変わってきている可能性も踏まえて再検討する必要がある。

1-2. 友達との付き合い方の違いによる‘グループ’への認識

友達との付き合い方については、落合・佐藤(1998)の作成した青年期の友達との付き合い方についての項目から「積極的に自己開示をする傾向」と「嫌われないように気を使って関わる傾向」を用いて4つのパターンに分類した。本研究では、‘グループ’に居心地の良さや気楽さを感じ、束縛感や負担感などのネガティブな認識が少ないのはどのような付き合い方をしている人か、逆にネガティブな認識が強いのはどのような付き合い方をしている人かを調べるのが目的であった。中学生や高校生が‘グループ’での関係性を維持するために異様なほどに周りに気を遣い(保坂,1993)、その結果不登校や不適応などの問題が生じることはこれまでも臨床現場などで報告されてきたが、そのような周りの気遣いばかりして自分を出せないような付き合い方は、本研究の分類の中では、気遣い傾向が高いが自己開示傾向の低い自己防衛的な付き合い方が特徴の防衛群に当たると考えられる。

防衛群の‘グループ’への認識を男女別に見ていくと、男子では、「負担感」については本音群と有意差が見られ、気遣いが多い方が‘グループ’での負担感がより強いことがうかがえるが、それ以外の項目ではさほど大きな差は見られなかった。自分の本音を言わずに周りへの気配りを多くする付き合い方は、‘グループ’での負担感をより強くしていると考えられ、ある程度自分の思いを表明しながら関わることの方が精神的な負担は少ないことが考えられる。女子の防衛群では「気楽さ」が親和群および本音群より低く、「負担感」が親和群および本音群より高く、「束縛感」は本音群より高いなど、総じて‘グループ’へのポジティブな認識は低く、ネガティブな認識が高い様子が男子よりも明確に表れる結果となった。女子においては、自己を開示せずに嫌われないように周りに気を遣った自己防衛的な付き合い方は、‘グループ’での居心地の良さをあまり感じられず、負担感や束縛感などが強く感じられるなど、精神的な負担の最も多い付き合い方であると考えられる。

防衛群と対極の付き合い方である本音群は積極的に自己を開示して関わろうとし、嫌われないように気を使うことはあまりしない付き合い方であった。男子では、「気楽さ」は消極群にくらべて高く、「負担感」は防衛群にくらべて低く、「依存性」は親和群にくらべて

低く、「束縛感」は消極群より低くなっていた。女子においても同様の傾向が見られ、「気楽さ」が消極群および防衛群より高く、負担感、束縛感、防衛群より低いなど、男女ともにポジティブな認識が高くネガティブな認識が低い傾向が見られた。本音群は自分の言いたいことや考えを素直に表明し、嫌われないように周りへ気遣いをする事は少ないなど、自分の思うとおりに自由に振る舞えていると考えられる。そのため、「グループ」での負担感や束縛感をあまり感じず、気楽に過ごしているという認識が高いと考えられ、精神的な負担は少ないといえる。

本音群の特徴に嫌われないように気を遣う要素が加わった親和群については、男子では、「気楽さ」が消極群にくらべて高く、依存性が消極群および本音群にくらべて高くなっていた。親和群と消極群および本音群の違いは、嫌われないように気を遣おうとする姿勢が高いか低いかの違いである。周りの顔色を見て気を遣おうとするのは、友達に嫌われたり「グループ」での立場が危うくなることを防ごうとする気持ちがあると考えられ、親和群はひとりになりたくない、「グループ」の人たちと一緒にいたいという「グループ」に依存的な気持ちがあるために本音群にくらべて気遣い傾向が高くなっていると考えられる。しかしながら、負担感や束縛感などのネガティブな認識には差がないことから、親和群の付き合い方における精神的な負担はさほど高いものではないと考えられる。女子では、男子の傾向に加えて、「負担感」が防衛群よりも低くなっていた。親和群と防衛群は嫌われないように気を遣う点は同じだが、積極的に自己開示をしようとしているかどうか異なる群である。つまり、女子については積極的に自己を開示しようという姿勢や自分の気持ちを素直に表現できる方が「グループ」における負担感、束縛感、防衛群を減らせるのではないかと考えられる。

消極群は、男女ともに「気楽さ」が親和群および本音群にくらべて低く、「依存性」が親和群および「防衛群」より低かった。さらに、男子では「束縛感」が本音群より高くなっており、総じて「グループ」に対するポジティブな認識が低くネガティブな認識が高い結果となった。消極群は、積極的な自己開示も周りへの気遣いも少なく、自分から進んで他者と関わろうとしたり深い関係を築こうという意欲があまりないようにも解釈できる。(落合・長沼)は、常に決まった仲間と行動しようとする付き合い方を望む傾向は女子に高く、男子の方がそのような付き合いを好まない割合が多いことを示唆しており、集団行動があまり好きでない消極群にあって「グループ」はあまり居心地の良いものではなく、特に男子で束縛感をより認識していることが考えられる。男女ともに、居心地は良くないもの

の防衛群と比べると心理的な負担の少ない付き合い方であると思われる。

以上の4つの群による比較から、‘グループ’において精神的な負担が大きく‘グループ’に対してネガティブな認識の強い群は防衛群の付き合い方であると考えられ、自分の気持ちを表明せずに周りに気を遣っている付き合い方は、その場では‘グループ’関係が円滑に維持できたとしても、当人たちの精神的な負担は大きいことが示された。一方で、周りに嫌われることなどをあまり気にせずに自分の気持ちを素直に表明する付き合い方をする本音群が、4群の中で最もポジティブな認識が高くネガティブな認識が低い結果となり、精神的な負担は低いと考えられた。しかし、本音群のような周りへの気遣いをせずに自分の思うように振る舞う付き合い方が‘グループ’において推奨される付き合い方といえるだろうか。佐藤(2011)は、思春期の子どもたちの‘グループ’について、「誰かを『ハブ(仲間はずれ)』にすることが頻繁に見られ、これが‘グループ’の問題点である」と述べ、そのような仲間はずれのターゲットになりやすい人物として、「予定調和を乱すような水を差す発言をした者」と指摘している。防衛的な付き合い方をしている人たちが自分の意見や思いを表明できないのは、余計な発言をすとはずされてしまうような風潮があるからであり、気遣いをせざるを得ない現状があるからであると考えられる。そうであるならば、本音群のような付き合い方もまた、長い目を見た時に円滑に関係性を維持できるものとは言えないだろう。本音群の次に精神的な負担が少ないと思われた親和群は、男女ともに最も割合の多い群であった。親和群は、自己を開示して関わろうとする付き合い方と嫌われないように気を遣おうとする関わり方の双方を持ち合わせており、精神的な負担も比較的少なかったことから、‘グループ’においてストレスをためずに関係性を維持するためには、自分の気持ちを表明することと周りの様子を見て時には表明しないといった自己の調節をすることの両方が重要であると考えられる。そうであるならば、このような自己の表出を調節するようなスキルは、‘グループ’経験を通して身に付くことが考えられる。研究2以降では、この点についてさらに研究を進める。

研究1のまとめと課題

本研究では、‘グループ’に対する認識の学年による変化と‘グループ’の友達との付き合い方から見た‘グループ’に対する認識の違いについて検討を行った。

‘グループ’認識の学年による変化については、いずれの学年についても差が見られず、これまでの知見から想定された結果とは違った結果となった。これについては、近年指摘されているような青年期の友人関係の発達的变化や集団の性質の年齢による変化の様相が以前と比べて変わってきているという可能性に加えて、本研究の調査間隔の短さが関係している可能性が考えられた。そのため、研究2では、調査間隔をより広げて比較をすることで、学年による発達的な変化が見られるかどうかを調べた。

友達との付き合い方による‘グループ’認識の違いについては、自分の言いたいことをあまり言わずに周りへの気遣いを多くする付き合い方が精神的な負担が最も大きいことが示された。一方で、最も精神的な負担が低かった自分の気持ちを積極的に表明し、周りへの気遣いはあまりしない付き合い方も、長い目で見ると‘グループ’において円滑に関係性を維持できないと思われ、ある程度自分の思いを表明しつつも場合によっては周りに気を遣って遠慮するような双方の姿勢が必要であることが示唆された。研究2では、この自分の思いを表明したり場合によっては遠慮したりするようないわば「自己調整」のようなスキルと‘グループ’認識との関連を調べることによって、‘グループ’においてどのようなスキルを持って付き合うことが精神的な負担の少ない円滑な‘グループ’関係の維持につながるかを検討した。

第4章 研究2 ‘グループ’関係の発達的变化と‘グループ’の対処スキル

—中学生・高校生の比較と自己制御スキルの検討—

第1節 目的

本研究では、研究1において差が見られなかった‘グループ’に対する認識の学年による発達的变化について、研究1よりも学年の幅を広げることで再検討し、過去の知見で述べられているような中学生から高校生にかけての発達的变化が見られるかどうかを明らかにすることを第1の目的とする。また、研究1から、‘グループ’において友達と付き合いしていく中で、ストレスフルにならずに‘グループ’関係を維持していくためには、自分の意見や考えを表明することと場合によっては周りの様子を見て表明をすることを控えることの双方が必要であり、臨機応変に自己をコントロールするようなスキルが重要であることが示唆された。原田ら(2008)は、青年期における諸問題には自らの行動を調整する能力である自己制御が深く関与していると述べ、社会的場面における自己制御能力として社会的自己制御という概念を提唱した。社会的自己制御には、「たとえ言いにくくても間違っていることは指摘する」、「嫌なことを頼まれたとき、嫌だという気持ちを伝えることができる」といった主張的側面と「相手から露骨なことを言われても自分の感情を露骨に表したりはしない」、「自分の考えを聞いてもらうだけでなく、相手の考えを聞いてもらおうとする」などの感情・欲求抑制的側面、「困難なことでも集中して取り組む」「やるべきことがある時には、どんな誘惑があっても最後までやり通す」などの持続的対処の3側面からなっている。本研究では、研究1の結果をもとに、自己を調整するスキルとして社会的自己制御尺度(原田・古澤・吉田,2008)の「主張」と「感情欲求抑制」を用いて、自己を調整するスキルと‘グループ’認識の関連について調べることを第2の目的とする。

第2節 方法

2-1. 調査対象者

東京都内の公立中学校に通う中学2年生195名(男子97名,女子98名),東京都内の高校に通う高校2年生, 高校3年生96名(男子45名,女子51名)。

2-2. 調査時期

2010年11月～2011年1月

2-3. 調査の手続き

中学生・高校生に対し質問紙調査を実施した。中学生については授業担当者のもと一斉調査として実施し, 高校生については質問紙に返送用封筒を付けて配布し, 回答を得た。回収率は53%であった。

2-4. 調査内容

a. フェイスシート

性別・学年についてたずねた。

b. 自己に関する質問項目 10 項目

下山(1992)のアイデンティティ尺度のうち, 中高生にも使用可能な「アイデンティティの基礎」尺度を用いた。得点が低いほどアイデンティティ形成の基礎となる自己の安定が得られず, 不安や孤独におそわれる気持ちを反映している。

c. 自己制御に関する質問項目 23 項目

原田ら(2008)の社会的自己制御尺度を参考に作成した。他者や集団との相互作用が必要な社会的場面において自己をコントロールする能力を表す。3つの側面からなる質問項目の中で, 本研究では「主張」と「感情欲求抑制」の2つの項目を使用した。

d.友人‘グループ’への認識に関する質問項目

①友人‘グループ’に入っているかどうかについての質問

「あなたは現在、休み時間やお昼ご飯の時に一緒に過ごすような同性の友人‘グループ’に所属していますか？」という質問に対し、「はい」または「いいえ」の2件法で回答を求めた。

②‘グループ’からはずされた経験についての質問

「現在の‘グループ’や過去の‘グループ’において、‘グループ’からはずされたことがありますか？」という質問に対し、「はい」または「いいえ」の2件法で回答を求めた。

③‘グループ’から友達を仲間はずれにした経験についての質問

「現在の‘グループ’や過去の‘グループ’において、‘グループ’から誰かをはずしたことがありますか？」という質問に対し、「はい」または「いいえ」の2件法で回答を求めた。

③友人‘グループ’への認識に関する質問項目 30 項目

研究1と同様の三好(1998)の対‘グループ’態度評価尺度のうち、「‘グループ’認識質問」を参考に作成した。‘グループ’に入っている人にものみ回答を求めた。

第3節 結果

3-1 ‘グループ’に対する認識の学年差

‘グループ’認識に関する質問項目の因子分析結果

‘グループ’認識に関する質問項目について、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量が.35に満たない項目および複数の因子に高い負荷量を示す項目を除外し、固有値の低下パターンと因子の解釈可能性から最終的に4因子構造であると判断した。因子分析結果はTable8の通りである。

Table 8 ‘グループ’認識に関する質問項目の因子分析結果

	因子			
	I	II	III	IV
第1因子：グループ有用感 ($\alpha = .827$)				
グループの人と悩み事を親身になって相談しあうことができる。	.734	-.102	-.128	-.073
自分の所属しているグループを誇りに思っている。	.719	-.089	.072	-.025
グループは学校生活において、とても重要なものだと思う。	.699	.042	.085	-.015
グループは、うまく人付き合いをするための勉強になる。	.660	.131	-.099	-.052
グループではお互いに安心して何でも話すことができる。	.612	-.221	.005	.167
今のグループにいてことで、得をしていると感じる。	.446	.097	-.107	.364
グループにいて、学校で役に立つ情報を教えてもらえる。	.376	.126	-.148	.259
第2因子：グループ不自由感 ($\alpha = .820$)				
無理して一緒にいる感じがすることがある。	.017	.714	.073	-.254
グループ内での行動は、誰かに合わせていることが多い。	-.082	.701	-.039	.255
グループにいて、自分らしさがうしなわれる気がする。	.173	.670	-.044	-.267
グループ内では、個人の考え方や意見を表に出してはいけない雰囲気がある。	.034	.637	.085	-.005
あまり自分をさらけ出さないようにしている。	-.132	.565	-.225	.130
日頃から、グループからはずされないように気をつけている。	-.021	.552	.028	.105
内心どう思っているかが、とりあえずうまく調子を合わせていることがある。	.226	.537	.178	.095
必ずしも気が合うわけではないので、疲れを感じる時がある。	-.063	.529	-.146	-.042
グループの中に上下関係があるように感じる。	-.069	.428	.036	.048
第3因子：グループ依存心 ($\alpha = .655$)				
グループに所属せず、ひとりでも問題なくやっていける。	.125	.188	-.826	.002
グループの人が一緒にいてくれないと、一人では行動できない。	-.075	.188	.598	.091
グループに所属していない学校生活は考えられない。	.326	.045	.389	.136
第4因子：グループ満足感 ($\alpha = .696$)				
グループにいてことで、ひとりぼっちで心細い思いをしなくてすむ。	.011	.120	.170	.593
グループの人がいるから学校が楽しい。	.277	-.025	.119	.526
現在のグループに満足している。	.269	-.169	-.134	.479
因子間相関	I	II	III	IV
I		-.054	0.377	0.63
II			0.243	-.041
III				0.323
IV				

第1因子は、「グループの人と悩み事を親身になって相談しあうことができる」や「グループは、うまく人付き合いをするための勉強になる」など7項目からなる因子であった。これは、「グループ」が自分にとって役に立つものであるといった「グループ」の有用性についての認識であると解釈できる。そのため、第1因子を「グループ有用感」と名付けた。

第2因子は、「無理して一緒にいる感じがすることがある」「グループでは個人の考え方や意見を表に出してはいけないような雰囲気がある」など9項目からなる因子であった。これは、グループにおいて主体性を持って行動することができず、不自由であるといった認識であると解釈できる。そのため、第2因子を「グループ不自由感」と名付けた。

第3因子は、「グループの人が一緒にいてくれないとひとりでは行動できない」「グループに所属していない学校生活は考えられない」など、「グループ」がないと平穩に日常生活を送れないといった依存的な様子がうかがえる。そこで、第3因子は「グループ依存心」と名付けた。

第4因子は、「グループの人がいるから学校が楽しい」「現在のグループに満足している」など、所属する「グループ」に対する満足感を表す項目であると解釈できる。そのため、第4因子を「グループ満足感」と名付けた。

‘グループ’認識に関する質問項目の学年による分散分析結果

‘グループ’への認識に関する4因子について、学年を独立変数として男女別に t 検定を行った。その結果、男女ともにいずれの因子においても有意な差は見られず、研究1と同様の結果となった。研究1の結果を考慮し、中学2年生と高校2年生・3年生と3学年の違いが見られるようにデータを収集しているが、男女ともに差が見られなかったことから、この時期には‘グループ’に対する認識について、大きな変化はないことが示された。

3-2.自己の安定性・自己制御能力と‘グループ’認識との関連

3-2-1 自己の安定性・自己制御能力に関する質問項目の因子分析結果

自己の安定性および自己制御能力に関する質問項目について、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量が.35に満たない項目および複数の因子に高い負荷量を示す項目を除外し、固有値の低下パターンと因子の解釈可能性からそれぞれの因子数を決定した。因子分析結果はTable9、Table10のとおりである。

Table 9 自己の安定性の因子分析結果

	I	平均	SD
第1因子：自己の安定性 ($\alpha = .809$)			
自分の中には、いつもなんとなく不安がある。	-.766	2.67	.954
どうしたらよいか分からなくなると自分のからの中に閉じこもってしまう。	-.697	2.13	.957
まわりの動きについていけず、自分だけとり残されたと感じることがある。	-.633	2.54	.957
人が見ているとうまくやれない。	-.619	2.72	.941
私の心は、とても傷付きやすく、もろい。	-.544	2.40	.943
自分1人で初めてのことをするのは不安だ。	-.536	2.73	1.028
やりそこないをしていないかと心配ばかりしている。	-.484	2.52	.895
人と活発に遊べない。	-.420	1.77	.874
何かしているより空想にふけっていることが多い。	-.407	2.33	.984
異性とのつきあい方がわからない。	-.367	2.37	.945

Table 10 自己制御に関する質問項目の因子分析結果

	因子		平均	標準偏差
	I	II		
第1因子：自己主張 ($\alpha = .774$)				
たとえ言いにくくても、間違っていることは指摘（してき）できる。	.678	-.033	2.46	.867
話し合いの場で、進んで自分の意見を述べる。	.675	.033	2.46	.960
周囲の人と自分の意見が違っていても、自分の意見を主張する。	.625	.194	2.52	.781
いやなことを頼まれたとき、いやだという気持ちを伝えることができる。	.600	-.176	3.05	.878
自分が考えていることを相手にわかるようにはっきり言う。	.533	-.018	2.72	.859
順番に並んでいる時に横から入り込んでくる人たちがいたら注意をする。	.515	-.171	2.55	.942
仕事・課題や遊びなど、周囲にいちいち聞かずに、自分のアイデアで進めることができる。	.459	.094	2.61	.781
第2因子：感情・欲求抑制 ($\alpha = .631$)				
自分の思い通りに行かないと、すぐにきげんが悪くなる。	-.098	.762	2.47	.859
いやな事があっても、人やものに八つ当たりをしない。	.149	-.558	2.52	.912
自分が気に入らない人には、しつこく注意をしたり、文句を言い過ぎたりしてしまう。	.259	.403	2.21	.900
因子間相関				
	I	II		
I		.34		
II				
III				

自己の安定性項目では、1因子が抽出され、本尺度を開発した下山(1992)と同等の結果であった。すべて逆転項目で、得点が低いほど自己の安定性が得られず不安定な心理状態になっていることを表す尺度であることから、「自己の安定性」と名付けた。自己制御に関する質問項目は2因子が抽出され、原田ら(2008)と概ね同様の因子構造であった。そのため、原田ら(2008)の用いた因子名を使用し、第1因子は「自己主張」第2因子は「感情・欲求抑制」とした。

3-2-2 自己の安定性・自己制御能力と‘グループ’認識

自己の安定性および自己制御能力の違いによって‘グループ’の認識に違いがあるかどうかを調べるために、自己の安定性および自己制御能力の因子得点を平均点を境に高低群に分け、‘グループ’認識得点の平均を比較した。また、3-1において学年による有意な差が見られなかったことから、中学生と高校生を合わせて男女別に分析を行った。

<自己の安定性と‘グループ’認識>

自己の安定性の違いによる‘グループ’認識の違いはTable11, Table12のとおりである。

Table 11 自己の安定性の高低による‘グループ’認識の違い(男子)

因子名	高群/低群	平均値(標準偏差)	t値(自由度)
有用感	高群 (N=70)	2.66 (.728)	0.12 (125)
	低群 (N=57)	2.67 (.648)	
不自由感	高群 (N=72)	1.84 (.523)	4.50 (127) ***
	低群 (N=57)	2.27 (.545)	
依存心	高群 (N=72)	2.14 (.509)	0.84 (127)
	低群 (N=57)	2.21 (.448)	
満足感	高群 (N=71)	3.14 (.776)	0.08 (126)
	低群 (N=57)	3.15 (.676)	

*** $p < .001$

Table 12 自己の安定性の高低による‘グループ’認識の違い(女子)

因子名	高群/低群	平均値(標準偏差)	t値(自由度)
有用感	高群 (N=65)	3.04 (.604)	1.99 (136) *
	低群 (N=73)	2.83 (.644)	
不自由感	高群 (N=66)	1.84 (.479)	4.24 (137) ***
	低群 (N=73)	2.23 (.612)	
依存心	高群 (N=65)	2.25 (.405)	0.39 (136)
	低群 (N=73)	2.27 (.428)	
満足感	高群 (N=66)	3.40 (.597)	2.44 (136) *
	低群 (N=72)	3.11 (.791)	

** $p < .01$

男子では、自己の安定性の低い群が高い群にくらべて0.1%水準で‘グループ’の不自由感が高く、自己が不安定な人たちの方が‘グループ’において自分の思い通りに動けないような不自由感を感じていることが分かった。女子においても男子と同様に、自己の安定性の低い群が高い群にくらべて0.1%水準で‘グループ’の不自由感が高く、自己が不安定な人たちの方が‘グループ’において自分の思い通りに動けないような不自由感を感じて

おり、自己が安定している人たちの方が‘グループ’においてあまり不自由感を感じていないことが示された。加えて、有用感および満足感に5%水準の有意差が見られ、自己の安定性が高い人たちは、そうでない人にくらべて‘グループ’に対する有用感や満足感などの認識が高いことが分かった。

<自己制御能力と‘グループ’認識>

主張的側面と‘グループ’認識

自己制御能力のうち、主張的側面と‘グループ’認識の関連を調べるために、自己主張の高低によって‘グループ’認識に違いがあるかを調べた。結果はTable13のとおりである。

Table 13 自己主張の高低によると‘グループ’認識の違い(男子)

因子名	高群/低群	平均値(標準偏差)	t値(自由度)
有用感	高群 (N=66)	2.79 (.698)	2.17 (127) *
	低群 (N=63)	2.53 (.669)	
不自由感	高群 (N=66)	1.95 (.556)	1.46 (129)
	低群 (N=65)	2.10 (.580)	
依存心	高群 (N=66)	2.16 (.537)	0.33 (129)
	低群 (N=65)	2.18 (.441)	
満足感	高群 (N=66)	3.24 (.748)	1.37 (128)
	低群 (N=64)	3.06 (.705)	

* $p < .05$

男子では、「有用感」に5%水準の有意な差が見られ、自己主張の高い人の方が低い人にくらべて‘グループ’は自分にとって役に立つものであるという認識が強いことが示された。一方で、女子ではいずれの因子にも有意な差は見られず、‘グループ’の認識に主張的側面はあまり関係がないことが示された。

抑制的側面と‘グループ’認識

自己制御能力のうち、抑制的側面について抑制能力の高低によって‘グループ’認識に違いがあるかを調べた。結果は Table14, Table15 のとおりである。

Table 14 抑制能力の高低による‘グループ’認識の違い(男子)

因子名	高群/低群	平均値(標準偏差)	t値(自由度)
有用感	高群 (N=69)	2.65 (.714)	0.39 (90)
	低群 (N=61)	2.69 (.676)	
不自由感	高群 (N=71)	1.94 (.594)	0.04 (88)
	低群 (N=61)	2.11 (.538)	
依存心	高群 (N=71)	2.07 (.509)	0.11 (90) **
	低群 (N=61)	2.30 (.438)	
満足感	高群 (N=70)	3.10 (.741)	2.46 (89)
	低群 (N=61)	3.22 (.720)	

** $p < .01$

Table 15 抑制能力の高低による‘グループ’認識の違い(女子)

因子名	高群/低群	平均値(標準偏差)	t値(自由度)
有用感	高群 (N=74)	3.05 (.579)	2.40 (137) *
	低群 (N=65)	2.79 (.661)	
不自由感	高群 (N=75)	1.93 (.517)	2.63 (138) **
	低群 (N=65)	2.18 (.630)	
依存心	高群 (N=74)	2.26 (.387)	0.08 (137)
	低群 (N=65)	2.27 (.450)	
満足感	高群 (N=74)	3.45 (.600)	3.48 (120) ***
	低群 (N=65)	3.03 (.779)	

* $p < .05$, ** $p < .01$ *** $p < .001$

男子では、依存心に 1%水準で有意な差が見られ、抑制能力が低い人の方が‘グループ’に対する依存的な気持ちが強いことが分かった。女子では、有用感に 5%水準の有差が見られ、抑制能力の高い人は低い人にくらべて‘グループ’は自分にとって役に立つものであるという認識が強いことが分かった。また、満足感においても 0.1%水準で有意な差が見られ、抑制能力が高い人はそうでない人にくらべて‘グループ’に対する満足感が高いことが示された。‘グループ’に対するネガティブな認識である不自由感においても 1%水準で有意差が見られ、抑制能力が低い人の方が高い人にくらべて不自由感をより強く認識していることが分かった。

3-3. ‘グループ’ からはずされた経験およびはずした経験と自己の安定性・自己制御能力

‘グループ’ からはずされた経験や ‘グループ’ から友達をはずした経験のある人たちには、自己の安定性や自己制御能力にどのような特徴があるかを調べるために、はずした経験やはずされた経験の有無を独立変数として男女別に *t* 検定を行った。「‘グループ’ から友達をはずした(仲間はずれにした)ことがありますか？」という質問に対し、はい・いいえの2件法で回答を求め、はずした経験が「ある」と回答した人と「ない」と回答した人とで自己の安定性および自己制御の2因子の平均を比較した。

‘グループ’ からはずされた経験の有無による自己の安定性と自己制御

‘グループ’ からはずされた経験の有無による自己の安定性と自己制御能力の違いを調べた結果は Table16, Table17 のとおりである。

Table 16 ‘グループ’ からはずされた経験の有無による自己の安定性・自己制御能力の違い(男子)

因子名	はずされた経験	平均値(標準偏差)	t値(自由度)
自己の安定性	あり (N=14)	2.15 (.563)	3.32 (117) **
	なし (N=105)	2.68 (.562)	
自己主張	あり (N=14)	2.67 (.509)	0.19 (119)
	なし (N=107)	2.70 (.583)	
感情・欲求抑制	あり (N=14)	2.24 (.659)	2.28 (120) *
	なし (N=108)	2.66 (.658)	

* $p < .05$, ** $p < .01$,

Table 17 ‘グループ’ からはずされた経験の有無による自己の安定性・自己制御能力の違い(女子)

因子名	はずされた経験	平均値(標準偏差)	t値(自由度)
自己の安定性	あり (N=45)	2.33 (.516)	3.27 (128) **
	なし (N=85)	2.66 (.558)	
自己主張	あり (N=47)	2.68 (.533)	1.86 (130)
	なし (N=85)	2.50 (.568)	
感情・欲求抑制	あり (N=47)	2.33 (.606)	3.26 (129) **
	なし (N=84)	2.72 (.670)	

** $p < .01$,

男子では、自己の安定性に1%水準の有意差が見られ、抑制能力にも5%水準で有意な差が見られた。はずされた経験のある人は、ない人に比べて自己の安定性および抑制能力が低い結果が示された。女子においても男子とほぼ同様の結果が得られた。自己の不安定さおよび抑制能力に1%水準で有意な差が見られ、はずされた経験のある人はない人にくら

べて自己の安定性が低く抑制能力も低いことが分かった。

‘グループ’ からはずした経験の有無による自己の安定性と自己制御

‘グループ’ から友達をはずした経験の有無による自己の安定性と自己制御能力の違いを調べた。結果は Table18, Table19 のとおりである。

Table 18 ‘グループ’ からはずした経験の有無による自己の安定性・自己制御能力の違い(男子)

因子名	はずした経験	平均値(標準偏差)	t値(自由度)
自己の安定性	あり (N=21)	2.72 (.625)	0.90 (116)
	なし (N=97)	2.60 (.581)	
自己主張	あり (N=21)	2.69 (.527)	0.04 (118)
	なし (N=99)	2.70 (.587)	
感情・欲求抑制	あり (N=21)	2.19 (.696)	3.29 (119) **
	なし (N=100)	2.70 (.635)	

** $p < .01$

Table 19 ‘グループ’ からはずした経験の有無による自己の安定性・自己制御能力の違い(女子)

因子名	はずした経験	平均値(標準偏差)	t値(自由度)
自己の安定性	あり (N=46)	2.42 (.552)	1.93 (128)
	なし (N=84)	2.62 (.562)	
自己主張	あり (N=47)	2.60 (.568)	0.50 (130)
	なし (N=85)	2.54 (.560)	
感情・欲求抑制	あり (N=47)	2.35 (.612)	2.96 (129) **
	なし (N=84)	2.71 (.673)	

** $p < .01$

‘グループ’ からはずした経験の有無による比較では、男女ともに同様の結果が得られ、感情・欲求抑制に1%水準の有意差が見られた。この結果から、男女ともにはずした経験のある人はない人にくらべて抑制能力が低いことが分かった。

第4節 考察

4-1. ‘グループ’に対する認識の学年差

‘グループ’の友達との関わり方やそれに伴う‘グループ’への認識について、中学2年生と高校2,3年生で比較を行ったが、男女ともにいずれの因子においても有意な差は見られなかった。本研究では、研究1において差が出なかった要因として考えられた調査間隔の短さを踏まえ、3学年の間を開けて比較を行ったがやはり差が見られず、現代の青年期の子どもたちは保坂(1986)の述べた関係性の変化とは違った様相であることが示唆され、保坂(2010)がその後に述べた「いまの子どもたちは薄められたチャム・グループのような中学生によくある関係性を高校生になっても続けている」という指摘を支持する結果となった。保坂(1986)の研究は、本研究での‘グループ’を想定したものではないが、現代の中高生の‘グループ’は、保坂の関係性の発達段階の中ではチャム・グループに近く、それに新たな特徴が加わった集団であると考えられることから、保坂の述べるように本来高校生で変わるべき関係性の変化が先延ばしになっているとも理解できる。青年期の友人関係の発達的变化については、インターネットやソーシャルメディアの普及や遊ぶ場所の減少によるギャング・グループの喪失(保坂,2010)など、環境の変化により以前にくらべて変化していることが多く指摘されており、発達段階も変わってきている可能性が考えられるため、さらに年齢幅を広げての再検討が必要であろう。

本研究で扱っている‘グループ’については、実証的な研究は少なく、中学生や高校生がどのような関係性を築き、‘グループ’に対してどのような感情を抱きながら毎日を過ごしているか、そして学年が上がるにつれて関係性や‘グループ’に対する感情がどのように変化するかは不明確であるが、これまでの知見から中学生・高校生は、‘グループ’での人間関係を通して、次第にどのような距離感で関われば高ストレス状況に陥らないのか、ということ習得していく(大嶽,2010)といった指摘や、高校生になると自分を出しつつ親しい関係性を維持できるようになる(杉浦,2010)など、年齢が上がるにつれて‘グループ’の中で程よい距離感を持って関わるができるようになり、互いを縛り合う窮屈な集団から内面的なつながりを持った深い関係に変化していくことを示唆する指摘が多くある。一方で、大学カウンセラーの齋藤(2008)は、大学生の中にも同質性の相互確認に安住している者たちがいると述べ、従来は中学生に多く見られるとされてきた同質性の確認を特徴とするチャム・グループのような関係性が大学生になっても見られることを指摘している。また、友達との付き合い方の発達的变化について調べた落合・佐藤(1995)は、高校生は青年

期における友人関係の大きな転換期であると考えられる。そのためいろいろな友人関係が見られ、個人差が大きいと述べている。以上のことから、今後は大学生まで年齢幅を広げて再検討する必要があるだろう。加えて、学年差よりも個人差の方が大きい可能性を考慮し、学年以外に関係性の発達差を示す指標を用いることも必要であろう。

4-2. 自己の安定性および自己制御と‘グループ’認識

自己の安定性と‘グループ’認識

自己の安定性と‘グループ’認識では、女子において関連が多く見られ、自己が安定しているの方が有用感や満足感といったポジティブな認識が高く、不自由感のようなネガティブな認識が低いことが分かった。これまでの知見から、‘グループ’がたとえ主体性の出せない窮屈なものであってもそこに所属せざるを得ないといったネガティブな動機から‘グループ’では気楽に過ごせていて友達との内面的なつながりも経験できる有用で必要な場所だといったポジティブな所属動機に変化する場合、その変化の背景にあるものは個人の心理的な変化と対人スキルの獲得の 2 つであると想定されてきた。前者の心理的な変化については、自我同一性が未確立のためその補償目的で‘グループ’を強く求める(杉浦,2000)、自我同一性のような人格発達のな変数が中学生と大学生の女子の友人関係の質的な違いを把握する上で必要(高坂,2010)と述べられているように、不安定な自己を支え、安心できる場所として‘グループ’が求められることが指摘されている。自己が不安定であればあるほど、不安定な心を補償しようとするため、‘グループ’にしがみついて絶対にはずれないようにしようという意識が強くなるため、‘グループ’での関係性などの中身よりもグルーに所属していることの方が重要になってくる。そのため、周りの顔色を見ながら友達合わせる付き合い方になってしまい、当人は‘グループ’にいることによる有用感や満足感などを感じられず、不自由感が強く認識されるのではないかと考えられる。そうであるならば、自己が安定することが、程よい距離感をもって付き合うための 1 つの必要条件である可能性が考えられるが、本研究は因果モデルではないため、結論は留保すべきであろう。男子では、「不自由感」のみに女子と同様の有意差が見られた。これまでは、‘グループ’は女子に特有のものであると考えられ、男子について調査した研究はほとんどないが、男子についても女子と同様に不安定な自己を支えるために‘グループ’に入る傾向、自己が安定することで‘グループ’との距離感が変化し、‘グループ’への認識が変化する可能性があるかもしれない。本研究は、個人の心理的要因よりも対人スキルに注目をして

いるため、自己と‘グループ’については深く調べることはしなかったが、今後、‘グループ’の諸問題の解決策を探る上で不可欠な要因であり、さらに深く調べる必要があると考えられる。

主張的側面と‘グループ’認識

自己制御能力のうち主張的側面と‘グループ’認識については、男子において「有用感」に有意な差が見られ、男子は自分の考えや気持ちを素直に表明できる人の方がそうでない人にくらべて、‘グループ’が自分にとって役立つものだという認識が強いことが示された。集団行動においては、積極的に自己を表明できる方が自分の意見が採用される可能性も高くなり、有用感がより強く認識されるだろうと予測される。男子においては‘グループ’の中で自分の意見をしっかりと表明できることが、‘グループ’での不自由感を減少させる要因として大切であると考えられる。しかし、女子においてはいずれの因子にも有意な差は見られず、自己主張ができることと‘グループ’への認識には関係がないことが示された。本研究では、研究1において自分の考えや思いを表明する関わり方と、場合によっては表明を控えるといった抑制的な関わり方が必要であり、主張的な側面として社会的自己制御能力を用いた。しかし、自己主張の力の高低と‘グループ’認識には関連がなかった。これについては、2つの可能性が考えられる。1点目は、用いた質問項目が社会的な場面を想定したものであり、‘グループ’での1対多といった状況とは異なっている点である。例えば、社会的場面において、「並んでいる列に横入りされたときに注意できる」「話し合いの場で意見を言える」からとって、‘グループ’内で集団圧力のある状況の中で間違っていることを指摘したり自分の意見をストレートに言うことができるかどうかは必ずしも一致しない可能性がある。今後は、‘グループ’内でのありそうな場面やイメージが容易な質問項目にすることが必要であると考えられる。2点目は、‘グループ’においてストレスなく過ごすために必要なスキルは、単に自己主張ができるかできないかといった単純な違いではない可能性が考えられる。つまり、自分の気持ちを表明するといっても、ストレートに思いを表現する人もいれば、それとなく上手く伝える人などいくつかのタイプがあると考えられる。三好(1998)が、‘グループ’でうまくやっていくためには処世術が必要であると述べているように、自分の気持ちを表明するかしないかといった観点でなく、もう少し別の切り口から自己を表明するスキルについて検討する必要があると考えられる。

抑制的側面と‘グループ’認識

抑制的側面では、女子に多くの関連が見られ、抑制スキルの高い人は‘グループ’に対する有用感および満足感を抑制スキルの低い人よりも強く認識しており、不自由感についてはあまり認識していないことが分かった。逆に、抑制の低い人は高い人に比べて‘グループ’に対する有用感や満足感は感じられず、不自由感を感じているといった精神的な負担が強いことがうかがえる。これは、‘グループ’には、自分の考えや独自のアイデアを出してはいけないという雰囲気がある(三好,1998)という指摘もあるように、女子の‘グループ’には主体性を禁止するような風潮があり、あまり出すぎた真似をしてしまうと除外の対象になってしまうリスクがある。抑制スキルの高い人は、友達の様子や状況をよく見て、そのような場面をうまくかわせるのに対し、抑制スキルの低い人はうまくかわせず仲違いしてしまったり、そこまで行かずともお互いに妙な空気になってしまったりなど‘グループ’関係が円滑にいかないことが考えられる。そのような経験や自分の意見や考えが取り入れられなかったこと自体に対する不満などもあり、‘グループ’に対して不自由感が強くなったり満足感が得られない可能性が考えられる。本来であれば、互いの意見をぶつけ合って折り合いを付けていくような関わりが理想的であるが、「常に誰かの存在を締め出す危険性を持っている‘グループ’」(三好,1998)においては余計なことは言わずに波風を立てない方が得策であろう。女子の‘グループ’の中でトラブルなく自分自身がストレスを溜めることなくうまくやっていくには、抑制的なスキルが必要であると考えられる。さらに、大学生女子に対する三好(1998)の調査からは、高校時代の‘グループ’に関して、‘グループ’の中でうまくやっていくための戦略として「とりあえず親切そうにし、たまには相手を持ち上げておく」「よほどのことがない限り、本当に悩んで相談しているわけではないから、とりあえず同調して安心させておく」「バカなふりをする」など痛々しいほど欺瞞的とも言えるような同調的な関わりをあげていたと報告している。このことから、女子の‘グループ’において必要なスキルとは、単に主張したり控えたりといった自己を調整するスキルばかりではなく、心にもないことを言ったり、本当は反対であっても同調して合わせておく、気になってもあえて触れないといった欺瞞的同調や回避など、より処世術に近いスキルが重要であり、‘グループ’経験によってそのようなスキルを身に付けていることも考えられる。

4-3. ‘グループ’ からはずされた経験およびはずした経験と自己の安定性・自己制御能力

‘グループ’ からはずされた経験がある人の自己の安定性・自己制御能力

‘グループ’ からはずされた経験のある人とはずされた経験のない人の自己の安定性および自己制御能力の違いについては、男女で同様の傾向が見られた。自己の安定性と抑制スキルに有意差が見られ、‘グループ’ からはずされた経験のある人は、そうでない人にくらべて自己の安定性が低く、抑制スキルが低いことが分かった。自己が不安定な人ほど‘グループ’ から離れないようにしなければならないという意識が強いため、程よい距離感が維持できないことが考えられる。加えて、あまり自分の考えや感情を表に出してはいけない雰囲気‘グループ’ の中において抑制スキルが低いということは、自分の考えを表に出してしまう傾向があるため、周りから疎まれる要因になるのかもしれない。佐藤(2011)は、‘グループ’ からはずされやすい人物として「予定調和を乱すような水を差す発言をする者」と述べている。自分の思いばかりを主張したり、空気の読めない発言をすることはトラブルの要因にもなってしまうと思われ、その場の雰囲気や‘グループ’ のメンバーの様子を察知し、うまく自己調整できるスキルが有効であるといえる。ただし、三好(1998)によると、‘グループ’ からはずされるのは「気の合わない者」であるとも述べられている。気が合うか合わないかについては、個人差があるため、はずされた人に一貫して共通した特徴があるとは言えないだろう。

‘グループ’ からはずした経験がある人の自己の安定性・自己制御能力

‘グループ’ から友達をはずした経験がある人とない人の自己の安定性および自己制御能力の違いについては、男女ともに抑制スキルに有意差が見られ、‘グループ’ から友達をはずした経験のある人は、そうでない人にくらべて抑制スキルが低いことが分かった。三好(1998)は、‘グループ’ から他者を排斥した人たちは「私たちも彼女のことをずっと我慢していた」という被害者意識が強いことを指摘している。また、メンバーの意見が一致して誰かがはずされるというよりも、ある人がひとりの人を無視し始めると、他の人も同じように無視し始める(佐藤,2011)というように、気に入らない人に対し一人が無視などの攻撃をしかけると、それに他のメンバーが便乗するようなパターンがよくあるという。これは集団における同調圧力であるとも理解でき、便乗している他の人たちは心の中では特定の人を除外する行為を良いと思っていなくても合わせざるを得ない状況になっていると考えられ、同調圧力や次は自分がターゲットにされるかもしれない不安など、複雑な思いを

持っていると予測でき、単にはずした人の自己の問題ではないだろう。しかし、大嶽(2010)は、中高生が‘グループ’関係を通し、次第にどのような距離感で関われば円滑であり、高ストレス状況に陥らないのか、ということを知得していくと述べていることから、水を差すような発言をしたり主張ばかりする人、気の合わない人などに対し、耐えられないレベルに達するまで我慢をしたり、無視をするという形で拒否をするということは、少し距離を置いて接したり、適当に受け流すような関わりができずに被害感が大きくなっていることも考えられる。大学生になると、「同じ‘グループ’だから一緒にいなければいけない」という考えから、「無理に一緒にいなくてもいい」と考えることができ(大嶽,2008)、それによってこのような不適切な形での攻撃は減少するとも考えられ、苦手な人や気の合わない人との関わり方も‘グループ’でトラブルを減らすために重要と考えられる。それに必要なのは、自己抑制というよりも、程よく距離をとってあまり深く関わらないようにするといった回避的なスキルであるとも考えられる。

研究 2 のまとめと課題

研究 2 は、主に 3 つの目的に沿って進められた。第 1 の目的は、‘グループ’ 認識の学年差について学年幅を広げて再検討することであった。従来は中学生から高校生にかけての仲間関係には変化が見られ(保坂,1986), ‘グループ’ への認識についても窮屈で苦しいものだという認識が徐々に緩和されることが予測されたが、本研究において中学 2 年生と高校 2,3 年生とで比較をした結果、差は見られなかった。インターネットの普及や遊び場の減少(保坂,2010)などにより、関係性の発達が以前と変わってきていること、具体的には従来であれば高校生の年齢で到達するはずの関係性に、現代の高校生はまだ到達せず関係性の変化の先延ばしが見られるという。これらを考慮し、研究 4 では大学生まで年齢幅を広げて再検討し、さらに、学年差よりも個人差の方が大きい可能性も考え、研究 5 においては学年以外に関係性の発達差を示す指標を作成することを試みた。

第 2 の目的は、‘グループ’ においてストレスフルにならずに過ごすために必要な自己調整のスキルとして、本研究では自己制御スキルを用いた。また、‘グループ’ に対する認識には、個人の自己の不安定さなど心理的要因が関係しているという指摘(佐藤,2010)から、自己の安定性との関連も調べた。分析法が因果関係を示すモデルではないため、因果関係を明らかにすることはできなかったが、傾向として自己が安定していることと抑制能力が高いことが、女子においては有用感や満足感を高め、不自由感を減少させるような傾向があることが示された。ただし、主張的側面については‘グループ’ 認識との関連はないことが分かり、また別の観点からの再検討が必要である。

第 3 の目的は、‘グループ’ からはずされた経験やはずした経験のある人の自己の安定性や自己制御能力を調べることであった。はずされた経験のある人は自己の安定性が低く抑制スキルが低い傾向があり、はずした経験のある人も抑制スキルが低い結果となり、ここでも抑制スキルの重要性が示された。しかし、三好(1998)の指摘から、女子が‘グループ’ において用いているスキルは、単なる抑制だけではなく、欺瞞的同調や回避といったより処世術に近いスキルであることが考えられ、そうした処世術のような主張しないスキルを‘グループ’ 経験によって身に付けているとも考えられた。研究 3 では、このような処世術が具体的にどのようなスキルであるかを検討する。

第5章 研究3 ‘グループ’経験から得られる‘グループ’対処スキル

—自由記述による探索的検討—

第1節 目的

研究1, 研究2から, ‘グループ’において心理的なストレスを抱えずに適応的に過ごしていくためには, 状況に応じて自己を調整することが大切であるが, 女子においては主張することよりも自己を抑制するスキルがポジティブな‘グループ’認識と関連していた。一方で, 自己主張スキルの高低による‘グループ’認識は女子においては違いが見られず, 単に自己主張ができれば良いということではないことが示唆された。また, 抑制的側面については‘グループ’認識に違いが見られ, ‘グループ’で安定した関係性を維持するうえで自己抑制的なスキルが必要であることは示されたものの, 単なる抑制だけでなく欺瞞的同調や回避など‘グループ’の中で女子たちが様々な処世術を用いていることも示唆され, 自己を調整するスキルというものをより明確にしていく必要性が示された。これらの結果を踏まえ, 本研究では大学生女子を対象に高校時代に所属していた‘グループ’について, ‘グループ’経験からどのようなことを学んだかを尋ねることによって, ‘グループ’経験によって得られるスキルが具体的にどのようなスキルであるかを探索的に検討することを目的とする。

第 2 節 方法

2-1. 調査対象者および調査時期

調査対象者は東京都内の大学に通う大学生女子 116 名である。2013 年 4 月～2014 年 7 月にかけて調査を行った。

2-2. 調査内容

高校生の時に所属していた‘グループ’について、「‘グループ’経験を通してどのようなことを学んだか」についてたずねた。回答方法は自由記述式であり自由に記入してもらった。授業時間内に実施したことを考慮し、回答はひとり最大 3 つまでとした。

2-3. 分析方法

得られた回答について、KJ 法を参考に整理、分類した。尚、分類に際しては筆者と心理学専攻の大学院生 1 名とともに実施した。

第3節 結果

得られたデータは合計 248 個であった。分類の結果、12 個のカテゴリーと 32 個の下位カテゴリーに分類された。結果は Table20 のとおりである。

Table 20 ‘グループ’ 経験を通して学んだことのカテゴリー

	カテゴリー(データ数)	下位カテゴリー
友達との情緒的な交流に関すること	友達と関わることの大切さ(52)	友達と関わる楽しさ 友達と一緒にいる素晴らしさ 友達の大切さ
	親和的他者配慮(36)	助け合うことの素晴らしさ 思いやり 相手を理解することの大切さ
グループでの振る舞い方、友達との付き合い方に関すること	集団における振る舞い方(38)	空気を読むこと 集団での振る舞い方 集団のまとめ方 集団のトラブルを事前に回避する方法
	適度な距離をとること(23)	自己開示をしすぎない 適度な距離を保つこと グループ外の人とも関わるのが大切
	他者との上手な関わり方(26)	人との関わり方 気遣いの仕方 苦手な人との関わり方 人に合わせること
	周りに流されずに主体性を持つこと(26)	自分の意見を持つ 自分らしさを大切にすること 周りの意見に流されすぎない
	身を守る方法(6)	はずされることを回避する方法 はずされたときのために他のグループの人とも仲良くしておくこと
	友達を選ぶ必要性(3)	信頼できる友達を選ぶこと
視野の広がり、考え方の多様性に関すること	考え方の多様性・広がり(26)	考え方は人それぞれ違う 自分にはない考え方・価値観を知った 様々な考え方の人がいること 視野が広がること
グループの性質に関すること	グループの印象が自分の印象になる(4)	グループの特徴が自分の特徴になる
	グループ行動の大変さ(7)	問題が起こると大変なこと グループ行動は精神力が必要
	グループの便利さ(1)	グループにいと便利なことが多い

得られた回答は大きく分けて4種類に分けられた。1つは、＜友達と関わることの大切さ＞や他者への思いやり、助け合いなどの＜親和的他人配慮＞など、友達との情緒的な交流を持てたこと、その素晴らしさを‘グループ’経験から学んだとする回答である。これらの回答は約90個得られ、「友達の大切さ」や「お互いに思いやる気持ちの大切さ」を学んだなど似たような回答が多く見られた。

2つめは、＜集団における振る舞い方＞や‘グループ’の人とたちと＜適度な距離を取ること＞、＜他者との上手な関わり方＞など、‘グループ’における友達との関わり方や集団の中での振る舞い方など対人スキルに関する内容であった。対人スキルに関する回答は約120個見られ、回答全体の半分を占めており、高校時代の‘グループ’での様々な経験から他者との関わりや‘グループ’での自分の振る舞いなどを学んでいることがうかがえる。また、対人スキルに関する回答は多様性に富んでおり、「空気を読む」「気遣いの仕方」など社会的な場面でも必要なレベルでの対人スキルに関するものあれば、＜身を守る方法＞にあるような「はずされることを回避する方法」や「はずされたときのために‘グループ’外の人とも仲良くしておく」など、トラブルに備えてあらかじめ保険をかけておくような、まさに処世術ともいえるものも見られた。

3つめは、視野の広がりや考え方の多様性について言及する内容である。‘グループ’の友達との関わりを通して、他人は自分とは違う意思を持っていることに気付いたり、自分とは違った発想や考えに刺激を受けたりするような、自分にとって良い影響を与えてくれたという意味合いで回答する者が多かった。

4つめは、‘グループ’の性質に関するものである。回答数としては少ないが、‘グループ’の性質をよく表した内容であった。＜‘グループ’の印象が自分の印象になる＞では、「あそここの‘グループ’に入っているのだから、きっとこういう人なのだろう」というように、‘グループ’単位で見られてしまうことについての回答であった。また、＜‘グループ’にいと便利なことが多い＞のような‘グループ’の有用性についての回答も見られた。

第4節 考察

‘グループ’ 経験を通して学んだこととして、最も多くみられる回答は‘グループ’での振る舞いや友達との付き合い方など集団や個人に対する対処方法を学んだという回答であった。カテゴリーごとに見て行くと、＜集団での振る舞い方＞が最も多かった。下位カテゴリーには「空気を読むこと」や「トラブルを事前に回避する方法」などがあり、本研究で注目する‘グループ’関係を維持するための処世術に近い項目であった。また、次に多かった＜適度な距離を取ること＞、3番目に多かった＜他者との上手な関わり方＞も‘グループ’において波風が立たないように振る舞う方法であると捉えることができ、‘グループ’において友達と関わる中で、他者とうまくやっていくための対処法を学んでいることが改めて確認できる結果である。具体的に見ていくと、＜集団においても振る舞い方＞は抽象的な回答が多かったが、集団においてはその場の空気を読んで振る舞うことが大切であると解釈できる。＜適度な距離をとること＞では、「自己開示をしすぎない」「適度な距離を保つ」「‘グループ’外の人とも関わる大切」などが挙がり、‘グループ’にあまりコミットしすぎず、一定の距離を置くこと、また、対人関係を自分の‘グループ’だけで完結させるのではなく‘グループ’外の人とも関わる必要性を認識していると解釈できる。これらの結果から、自分の‘グループ’と一定の『距離を置く』ということが‘グループ’でうまくやっていくために必要なことであると考えられる。＜他者との上手な関わり方＞では、「気遣いの仕方」「苦手な人との関わり方」「人に合わせること」などが挙げられた。気を遣うということは、自分が相手の様子を見ながら振る舞いを変えたり合わせたりすることであることから、他者と上手に関わるために『他者に合わせる』ことの必要性が挙げられていると考えられる。「苦手な人との関わり方」については具体的にどのような関わり方であるかは不明確であるが、研究2において、‘グループ’から誰かをはずすようなトラブルの1つの要因として、苦手な人や気の合わない人に対し、ずっと我慢していたことが限界に達して無視という攻撃に転じる場合があり、苦手な人と距離を置いて付き合うことがそういったトラブルを回避するために必要であることが示唆された。それらを考慮すると、苦手な人に対し、正面から向き合ったり無理して一緒にいることでストレスを増やすような付き合い方ではなく、少し距離を置いた付き合い方へ変えていく方が良いと学んでいる可能性が考えられる。6番目に多かった＜自分の意見を持つこと＞では、「自分らしさを大切にする」「周りの意見に流されすぎない」などが挙がっていた。‘グループ’

の渦中にいる中学生・高校生たちは、‘グループ’では主体性を出してはいけない、出さない方が良くと認識している(三好,1998)一方で、‘グループ’経験を通して徐々に‘グループ’に流されずに主体性を大切にすべきだという姿勢に変化していると考えられ、このような認識の変化は、高校生は自分を出しつつ親しい関係性を維持するための模索の時期である(杉浦,2000)という指摘を支持するものであると考えられる。以上の結果から、‘グループ’においてストレスフルにならずに安定した関係性を維持するにあたり必要な関わり方として、‘グループ’に入りこみすぎずに一定の『距離を置く』こと、場の空気や友達の様子を見て表面的には『周りに合わせておく』こと、ただし、『自分の意見はしっかりと持つこと』であり、このような関わり方を‘グループ’経験から学び、生かしていると考えられる。

次に多かった内容は、友達に対して思いやりを持ったり、お互いに助け合うなど、内面的なつながりを持たたことを肯定的に捉える回答であった。最も多かったのは、「友達と関わる楽しさ」や「友達と一緒にいる素晴らしさ」から構成される＜友達と関わることの大切さ＞である。また、次に多かった＜親和的他者配慮＞カテゴリーも友達同士の情緒的なつながりに言及する内容であった。‘グループ’での関わりは非常に基本的な部分での情緒的安定感につながっている(中村,1998)という指摘通り、友人との情緒の通い合いを‘グループ’で経験している様子が見えてくる。三好(1998)は、女子の‘グループ’の内部では、お互いの感情の深い部分にふれあい、そこにいるだけで気楽な気分でいられるといった強い一体感を示す場合もあることを示唆している。また、‘グループ’の中での友人との関わりによって仲間から支えが得られたり、かけがえのない友情が育まれたり、‘グループ’の中での親友との関係を経験する場合もあり(須藤,2012)、『グループ』は、単なる居場所としての安心感だけでなく、親から自立してのための根拠地(竹内,1987)のような、従来、青年期の友人関係が果たす役割として挙げられていた機能を持つと考えることもできる。

3番目に多かったのは、視野の広がりや考え方の多様性に関する内容であった。‘グループ’での友達との関わりを通して、自分にはない考え方を知ったり、様々な考え方の人がいることを認識するなど、自分自身の視野が広がったといった回答が多かった。松井(1990)は、青年期の友人関係の意義として、友達との関わりを通して様々な意見や考えを知ることができ、自己の行動や認知のモデルとなり得ると述べている。‘グループ’においても従来から指摘されている「モデル機能」のような機能があるとも考えられる。一方で、幸本(2011)が‘グループ’の良くないと思う点について調査した結果からは、「視野・考え方が狭まる」といった回答が多く見られ、佐藤(2001)も、中学生や高校生の‘グループ’

は、お互いに自分が1人にならずに済むように縛りをかけているため、自分たちの安全性を高めようとするあまり、もっと多くの人と遊んだり話したりする機会を自ら手放していることを指摘している。様々な人と接することで色々な物の見方や考え方に触れるべき時期に、‘グループ’はその可能性を制限してしまっているとも考えられる。

4つめに多かったのは‘グループ’の性質に関する回答であった。中でも多かったのは‘グループ’で日々を過ごすことの大変さに言及するものであった。‘グループ’経験を通して、自分には‘グループ’は合わないことを学んだという回答や、‘グループ’はあまりにも大変でもうこりごりだといった回答も見られた。数は少ないが、<‘グループ’の印象が自分の印象になる>といった回答が見られ、これは三好（1998）の指摘する「‘グループ’はそれ自体がパーソナリティーの一部として捉えられる」という‘グループ’に特有の性質をよく表している回答であるといえる。

研究3のまとめと課題

本研究では、中学生や高校生が‘グループ’経験を通してどのようなことを学んだかを調べることにより、この時期に‘グループ’経験を通して学ぶ対人スキルがどのようなものであるかを探索的に検討した。

‘グループ’経験を通して学んだこととして最も多く挙げられたのは、友達との関わり方や集団での振る舞い方など対人スキルに近い内容の回答であった。挙げられた回答をまとめると、‘グループ’に入り込みすぎずに一定の「距離を置く」こと、周りの空気や状況を考えて行動し、時には「友達に合わせる」こと、ただし表面的には合わせていても流されすぎずに「自分の意見はしっかりと持つこと」が‘グループ’においてうまくやっていくために大切であることが示唆された。また、友達との情緒的な交流を持てたことや視野が広がったことなどに言及する者もあり、青年期の友人関係の意義と同じ機能が‘グループ’にもあることが窺えた。研究2では、自己を調整するスキルとして自分の考えや気持ちを表明する力、抑える力が‘グループ’での関わりに必要なのではないかという考えのもと、検討を行った。しかし、研究3の結果から、単に抑制するというよりも、心の中でどう思っていようととりあえず「合わせておく」ことや、苦手な人や気の合わない人と「距離を置く」ことなどより処世術に近いスキルが必要であると考えられ、そのような対人スキルを用いて‘グループ’への認識を検討する必要がある。また、今回の結果からは「自分の意見を述べる」のような主張的な回答はほとんど見られなかったものの、研究1であまり自己を表明できない人は心理的な負担が強いことが示され、また研究2では男子においては主張できることがポジティブな‘グループ’認識と関係していたことから、主張するスキルも無関係ではないと思われる。単に自己主張は高いか低いかではなく、うまく主張するスキルのような他の概念を用いての再検討が必要であろう。

第6章 研究4 ‘グループ’経験による対人スキルの獲得

—対人距離化スキル・アサーションスキルの検討—

第1節 目的

研究1～3の結果から、中学生や高校生は多くの者が‘グループ’に所属し、‘グループ’において学校生活を過ごしているが、学年の移行に伴う関係性の変化や‘グループ’に対する認識に変化は見られず、関係性や認識の変化が、これまで考えられてきたモデルとは変わってきている可能性が示された。そこで、本研究では調査対象を中学生から大学生に幅を広げ、‘グループ’での友達との付き合い方やそれに伴う‘グループ’への認識に学年による変化があるかを再検討することを1つ目の目的とする。

また、‘グループ’において心理的な負担を最小限にしてうまくやっていくためには、自分の意見を表明することと周りの様子を見て気を遣うことの双方ができることが必要であるが、女子においては何か言いたいことがあっても場の空気を乱しそうであればあえて言わないといった抑制的な関わりがうまくやってくために必要であることが示唆された。研究3における‘グループ’経験から学んだ対人スキルとして、周りの様子を見て気を遣う場合に女子が実際にとる行動として、心の中でどう思っていようととりあえず合わせておくといった行動が見られることが示された。また、‘グループ’の人と距離を置いて付き合うことも‘グループ’に必要な関わり方であることが示された。この「とりあえず合わせておく」という行動は欺瞞的同調であると考えられ、距離を置いて付き合ったり、言いたいことがあってもあえて言わないといった関わりは回避的な関わり方と理解することもできる。以上のことから、本研究では欺瞞的同調および回避を含む対人距離化スキル(石井,2007)を用いた。また、主張的側面については、単なる自己主張の強さではなくより水準の高い主張スキルでの検討が必要であったことから、アサーションスキル(平木,2009)を用いた。対人距離化スキルおよびアサーションスキルが学年によりどのように変化するかを調べることを目的とする。

第2節 方法

2-1. 調査対象者

調査対象者は、宮崎県内の中学校に通う中学2年生124名(男子62名,女子62名),宮崎県・神奈川県の高校に通う高校2・3年生237名(男子83名,女子154名),東京都内の大学に通う大学2・3年生195名(男子78名,女子117名)の計556名である。

2-2. 調査時期

2016年6月～2016年9月の間に調査を行った。

2-3. 調査の手続き

中学生・高校生・大学生に対し質問紙調査を実施した。
授業担当者のもと一斉調査として実施し、回答を得た。

2-4. 調査内容

a. フェイスシート

性別, 中学校・高校・大学の区分, 学年についてたずねた。

b. 表出・非表出スキルに関する質問項目

石井(2007)の社会的スキル行使尺度を参考に作成した。従来の社会的スキルと重複する, 主張や関係維持行動からなる「対人的接近化スキル」と回避や欺瞞など, 内面の気持ちを正直に表明しない, 関係を収束させるコミュニケーション行動からなる「対人的距離化スキル」の2因子, 18項目から構成され, 「次の文について, あなたはふだんの程度行いますか?」という質問に対し, 「いつもする」～「まったくしない」の4件法で回答を求めた。

c. アサーションスキルに関する質問項目

アサーションスキルについては, 既存の尺度を使う方法ではなく, ある架空の場面に対し, その人の言動を選択肢から選んでもらう課題を実施した。その理由は, 中学生や高校生が授業中に回答することもあり, 自分が実際にどうするかよりも, 本当はどうすべきかといった社会的に望ましい方に回答が偏る可能性があると考えたためである。

課題の作成にあたっては、平木(2009)を参考に、中学生や高校生、大学生の学校生活や日常生活でありそうな架空の3場面を設定し、それぞれの場面について「あなたがいかに実際にとりそうな行動(言いそうなこと)」と「本当はどうしたいか(どう言いたいか)」について、それぞれ選択肢から1位と2位を選択するよう求めた。選択肢には、「攻撃的」「アサーティブ」「非主張」「欺瞞的同調」の4種類の行動(言葉)を設定した。作成した3場面と選択肢は以下の通りである。場面3については、中学生・高校生と大学生とでより身近になるように一部の文言を変えた。選択肢は共通である。

<場面1>

休みの日に、6人グループで遊びに行くことになりました。当日、駅で10時に待ち合わせをしていたのですが、Aさんだけが10時を過ぎてもなかなか来ません。10時30分になったころ、やっとAさんがやってきました。「あーごめん、ちょっと遅れた。よし、行こう」とAさんは言いました。実は、以前にもAさんは待ち合わせに遅れてきたことがあったので、他のみんなもうんざりした様子です。このとき、あなたならどうしますか？

- ①「ううん、気にしてないよ。行こうか。」と言う。(非主張)
- ②「どうしたの？心配したよ。遅れるなら誰かに言っておいてね」と言う。(アサーティブ)
- ③「いつまで待たせたら気がすむの？いつも時間守らないじゃん。いいかげんにしてよ」と言う。(攻撃的)

<場面2>

あなたは学校で4人グループに入っています。グループの中にはリーダーのような存在のBさんがいて、Bさんの言うことを聞かないといけなような雰囲気(ふんいき)があります。ある日、BさんがグループのメンバーのCさんについて、「Cって最近ウザいよね。グループからはずさない？無視しよう。」と言ってきました。あなたは特にCさんのことをきらいだとは思っていません。このとき、あなたならどうしますか？

- ①Cさんのことをきらいではないが、Bさんの言うことに合わせてCさんのことを無視する。(非主張)
- ②「私はCさんのことをきらいではないし、無視をするのは良くないと思うけど。いやなところがあるならCさんと直接話をしてみれば？」とBさんに言う。(アサーティブ)
- ③Bさんには「そうだね」と言ってその場では合わせておいて、Bさんと一緒の時は無視するが、BさんがいないときにはCさんとも仲良くする。(欺瞞的同調)
- ④「無視するなんて絶対ダメだよ！ありえない！」と言う。(攻撃的)

<場面 3>

(中学生・高校生)

あなたは、仲良しグループのメンバーと修学旅行で同じ班になりました。修学旅行では、A と B の 2 種類のコースから好きな方を選んでまわる時間があり、あなたは先輩から「A が楽しかったよ」とすすめられ、以前から A コースの方に行きたいと思っていました。しかし、話し合いの中でひとりのメンバーが、「絶対 B コースだよ！そっちの方が楽しそうだし！」と言うと、他のメンバーもうなずいて同意している様子です。このとき、あなたならどうしますか？

(大学生)

あなたは、大学で一緒に行動している仲良しグループの友達と夏休みに旅行に行くことになり、旅行会社のツアーに申し込みました。ツアーでは、A と B の 2 つのコースから好きな方を選んで観光する日があり、あなたは旅行が好きな知り合いから「A に行ったことあるけど素晴らしかったよ！」とすすめられ、以前から A コースに行ってみたいと思っていました。しかし、旅行の計画を話し合っている際にひとりのメンバーが「絶対 B コースだよ。そっちの方が楽しそうだし！」と言うと、他のメンバーもうなずいて同意している様子です。このとき、あなたならどうしますか？

- ①「そうだね。B がいいと思う」と言って本音(本当の気持ち)を言わずに合わせる。(欺瞞的同調)
- ②「私は絶対 A がいい！先輩が Aの方が楽しいって言ってたし、絶対 A！」と言う。(攻撃的)
- ③「確かに B は楽しそうだね。でも A も考えてみない？」と言う。(アサーティブ)
- ④特に何も意見を言わない。(非主張)

d. ‘グループ’ への認識に関する質問項目

①友人 ‘グループ’ に入っているかどうかについての質問

「あなたは現在、休み時間やお昼ご飯の時に一緒に過ごすような同性の友人 ‘グループ’ に所属していますか？」という質問に対し、「はい」または「いいえ」の 2 件法で回答を求めた。

③友人 ‘グループ’ への認識に関する質問項目 30 項目

研究 1 および研究 2 と同様の三好(1998)の対 ‘グループ’ 態度評価尺度のうち、「‘グループ’ 認識質問」を参考に作成。‘グループ’ に入っている人へのみ回答を求めた。

第3節 結果

3-1. ‘グループ’ 認識の学年差

‘グループ’ 認識に関する質問項目の因子分析結果

‘グループ’ に対する認識に関する質問項目 30 項目について、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量が.35に満たない項目および複数の因子に高い負荷量を示す項目を除外し、固有値の低下パターンと因子の解釈可能性から、最終的に4因子構造であると判断した。因子分析の結果はTable21のとおりである。

Table 21 ‘グループ’ 認識に関する質問項目の因子分析結果

	因子			
	I	II	III	IV
第1因子：つながり感 ($\alpha = .909$)				
13、悩み事を親身になって相談しあうことができる。	.806	.001	.139	.029
15、お互いをよく知った関係なので、余計な気疲れを感じなくてすむ。	.798	-.009	-.050	.030
14、それぞれの興味や考え方の違いから意見を言い合うことができる。	.790	.050	.108	-.141
25、気を使わず、気楽にしていられる。	.719	.063	-.177	-.039
3、メンバーそれぞれの考え方の違いが刺激(しげき)になる。	.650	.084	.185	-.001
4、お互いに面倒な気遣いをしなくてすむ。	.645	.035	-.210	.063
2、お互いに安心して何でも話すことができる。	.639	.099	-.098	.117
23、落ち込んでいるときに支えあうことができる。	.519	.316	-.054	.027
24、友達の意見を聞き、考えを広げることができる。	.453	.378	-.029	-.117
第2因子：有用性 ($\alpha = .829$)				
26、うまく人付き合いをするための勉強になる。	-.050	.764	-.088	.015
16、グループは、周りとうまく関わっていくためのコツを学ぶことができる。	.034	.756	.005	.055
6、グループにいと学校で役に立つ情報を教えてもらえる。	.186	.563	.080	-.081
5、グループにいてことで協調性を身につけることができる。	.155	.551	-.115	.141
17、試験に関する情報など有益な(ためになる)情報を手に入れることができる。	.206	.550	.167	-.089
第3因子：不自由感 ($\alpha = .799$)				
11、必ずしも気が合うわけではないので、疲れを感じる時がある。	-.012	-.017	.717	-.192
28、無理をして周りに合わせているので、負担に感じる時がある。	-.270	.111	.674	-.048
21、興味のわからないことでも一緒に付き合わないといけない。	-.018	.028	.618	.121
9、自分の考え方や意見を表に出してはいけない雰囲気がある。	-.098	.021	.583	.171
8、自分の所属するグループ以外の人と交流がしにくくなる。	.420	-.260	.559	.144
19、個人の意思をおさえなければならないと感じる。	-.268	.260	.446	.123
7、合わない人を仲間はずれにしてしまう傾向がある。	.174	-.103	.375	.181
第4因子：依存性 ($\alpha = .824$)				
27、グループから離れると、一人では何もできなくなってしまう。	-.091	.029	-.053	.869
10、グループの人が一緒にいてくれないと、一人では行動できない。	.130	-.108	.069	.799
20、グループなしには、一人で物事を決めることができなと感じる。	-.082	.133	.152	.598
	因子間相関	II	III	IV
	I	.642	-.451	-.042
	II		.210	.052
	III			.487

第1因子は、「悩み事を親身になって相談しあうことができる」「 お互いをよく知った関係なので余計な気疲れをしなくて済む」「お互いに安心して何でも話すことができる」などの項目であった。これらは、「グループ」では、互いによく知った関係性であり気楽に過ごしていること、また、お互いに悩み事を相談しあったり助け合うような内面的な支え合いができていたといった認識に関する項目であると解釈できる。そのため、第1因子を「つながり感($\alpha=.909$)」と名付けた。

第2因子は、「うまく人付き合いをするための勉強になる」「‘グループ’にいと学校で役立つ情報を教えてもらえる」など、「グループ」にいとことよって自分に取って役立つことがあるという認識であると解釈できる。そのため、第2因子は「有用感($\alpha=.829$)」と名付けた。

第3因子は、「必ずしも気が合うわけではないので疲れを感じる時がある」「無理をして周りに合わせているので負担に感じる時がある」など、「グループ」行動を負担に感じる気持ちを表しているとして解釈できる。そのため、第3因子は「負担感($\alpha=.799$)」と名付けた。

第4因子は、「‘グループ’から離れるとひとりでは何もできなくなってしまう」「‘グループ’の人が一緒にいてくれないと、ひとりでは何もできなくなってしまう」など、「グループ」に対する依存的な気持ちを表しているとして解釈できる。そのため、第4因子は「依存性($\alpha=.824$)」と名付けた。

‘グループ’ 認識の分散分析結果

‘グループ’ 認識に関する 4 つの因子について、学校段階(中学・高校・大学)を独立変数として分散分析を行った。その結果、いずれも有意な差は見られず、研究 1 および研究 2 と同様の結果となった。本研究では大学生まで対象を広げて比較を行ったが ‘グループ’ での友達との関わり方に伴う ‘グループ’ への認識は、中学生から大学生にかけて男女ともに変化が見られないことが示された。

Table 22 ‘グループ’ 認識と学年差(男子)

因子名	学年	平均値(標準偏差)	F値(自由度)
つながり感	中学生(n=59)	4.54 (.861)	.172(2,152)
	高校生(n=136)	4.48 (.934)	
	大学生(n=96)	4.59 (.887)	
有用性	中学生(n=59)	4.78 (.992)	.771(2,154)
	高校生(n=136)	4.59 (.897)	
	大学生(n=96)	4.59 (.808)	
不自由感	中学生(n=59)	2.70 (1.01)	.521(2,152)
	高校生(n=136)	2.86 (1.00)	
	大学生(n=96)	2.90 (.995)	
依存性	中学生(n=59)	2.32 (1.30)	.411(2,155)
	高校生(n=136)	2.45 (1.14)	
	大学生(n=96)	2.24 (1.16)	

Table 23 ‘グループ’ 認識と学年差(女子)

因子名	付き合い方	平均値(標準偏差)	F値(自由度)
つながり感	中学生(n=54)	4.59 (1.08)	.801(2,288)
	高校生(n=65)	4.51 (1.03)	
	大学生(n=36)	4.68 (.834)	
有用性	中学生(n=53)	4.63 (1.02)	1.39(2,288)
	高校生(n=65)	4.57 (1.00)	
	大学生(n=39)	4.65 (.686)	
不自由感	中学生(n=53)	2.74 (1.01)	.023(2,288)
	高校生(n=64)	2.73 (.865)	
	大学生(n=38)	2.71 (.919)	
依存性	中学生(n=54)	2.68 (1.37)	2.75(2,288)
	高校生(n=68)	2.27 (1.04)	
	大学生(n=39)	2.36 (1.13)	

3-2. 対人接近化スキルおよび対人距離化スキルの学年による変化

中学生や高校生が‘グループ’での対人関係を通して、欺瞞的同調や回避といったあえて距離を取るようなスキルを獲得しているかどうかを調べるために、石井(2007)の社会的スキル行使尺度を用いて学年による比較を行った。尚、本研究で注目しているのは「対人距離化スキル」の方であるが、比較のために従来の社会的スキルと呼ばれていたものと近い「対人接近化スキル」についても比較を行った。

社会的スキル行使尺度の因子分析結果

社会的スキルに関する質問項目について、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量が.35 に満たない項目および複数の因子に高い負荷量を示す項目を除外し、固有値の低下パターンと因子の解釈可能性から、最終的に 2 因子構造であると判断した。因子分析の結果は Table24 のとおりである。

Table 24 社会的スキル行使尺度の因子分析結果

	因子		平均	SD
	I	II		
第1因子：対人距離化スキル ($\alpha = .698$)				
本心はどうであれ、とりあえず同調して(相手に合わせて)安心させておく。	.724	.048	2.75	.765
相手を怒らせそうになったときに、すかさず相手のきげんをとってその話を流す。	.514	.192	2.67	.750
うまくやっていくために、心にもないことを言う。	.506	.050	2.49	.850
争いやケンカになったときに、理解したふりをしてとりあえず謝る。	.502	-.064	2.53	.822
意見が食い違ったときに相手の意見に合わせる。	.444	-.143	2.79	.592
一緒にいるときに、自分の意見を言わないで相手に合わせる	.444	-.335	2.38	.772
相手が自分の話を理解していなさそうなときに、「そうそう」などと言って適当に話を終わらせる。	.406	.059	2.67	.747
相手と意見が食い違ったときに、その話題にはふれないようにする。	.397	.052	2.72	.758
第2因子：対人接近化スキル ($\alpha = .660$)				
相手に自分がやってもらいたいことを素直に言う。	.017	.708	2.59	.732
自分の感情や気持ちを素直に言う。	-.056	.630	2.82	.743
相手が先に誰かと話をしているところへ気軽に参加する。	.266	.471	2.35	.895
相手が間違っただけをしているときには、「間違っている」とはっきり言う。	-.070	.468	2.66	.732
相手に会ってすぐに、自分から話題をふって会話を始める。	.166	.450	2.67	.789
相手が勝手な行動をとって、自分に迷惑がかかったときは怒る。	-.097	.388	2.42	.766
	因子間相関	I	II	
	I		-.176	
	II			

因子の構造は石井(2007)の結果とほぼ同様の結果であった。そのため、因子名については石井(2007)の用いている因子名を使用し、第1因子は「対人距離化スキル($\alpha = .698$)」、第2因子は「対人接近化スキル($\alpha = .660$)とした。

対人接近化スキルの分散分析結果

対人接近化スキルについて男女別に分散分析を行った(Figure3, Figure4)。

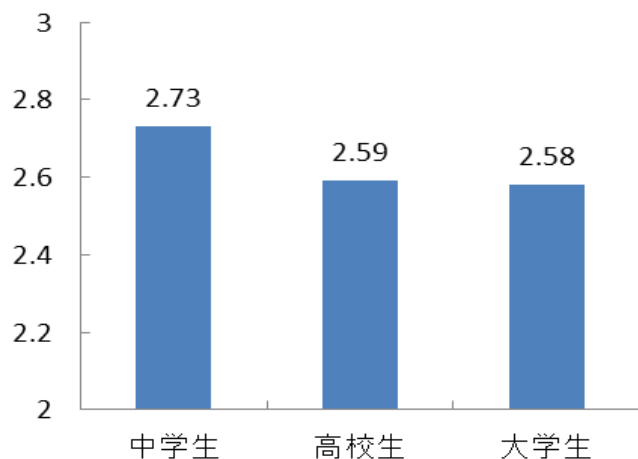


Figure 3. 対人接近化スキルの学年差(男子)

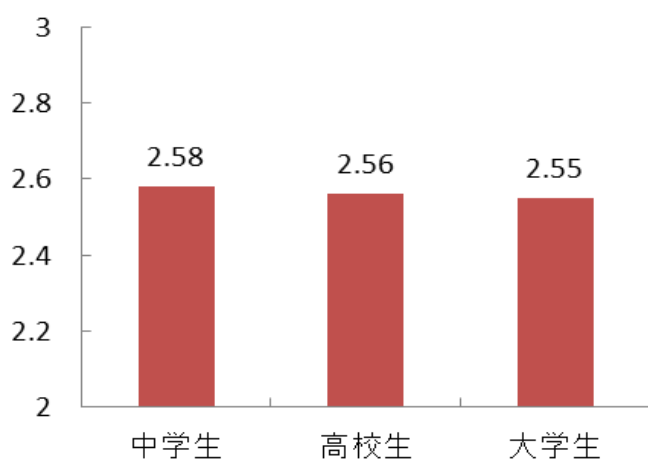


Figure 4. 対人接近化スキルの学年差(女子)

対人接近化スキルは、従来社会的スキルとして扱われてきた主張や関係維持行動からなる因子であった。男女別に学年の比較を行った結果、男子においても($F(2,194)=.404, p>.05$)女子においても($F(2,329)=3.40, p>.05$)有意な差は見られず、中学生の時点で大学生と同程度の数値であった。社会的スキルの中の表出的側面については、小学校高学年頃にはすでに身に付き、青年期を通して変化は見られないとする石井(2009)の指摘する結果となった。従来、社会的スキルと扱われてきた親和や主張といったスキルは青年期を通して変化が見られないことが示された。

対人距離化スキルの分散分析結果

対人距離化スキルについて男女別に分散分析を行った(Figure5, Figure6)。

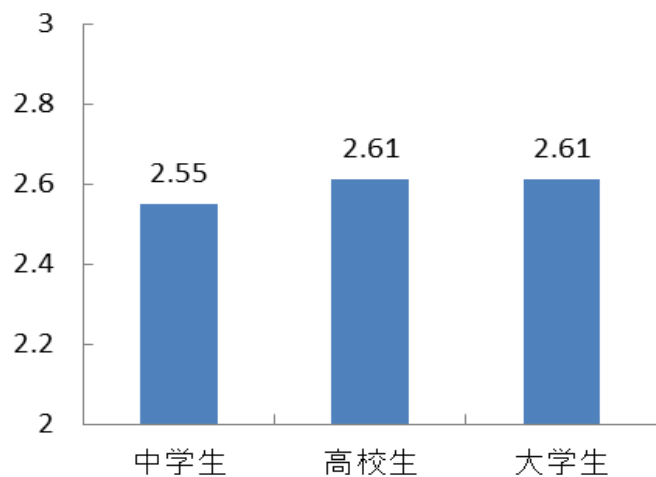


Figure 5. 対人距離化スキルの学年差(男子)

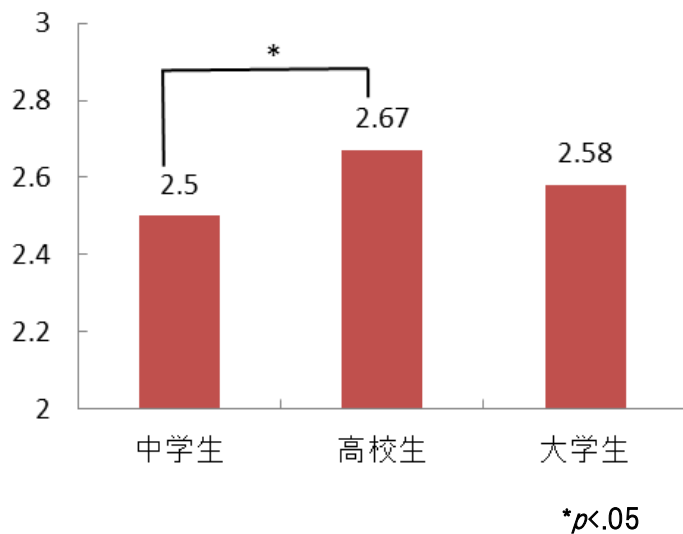


Figure 6. 対人距離化スキルの学年差(女子)

対人距離化スキルについては、男子については有意な差は見られなかったが、女子では高校生が中学生にくらべて5%水準で有意に高くなっていた。女子においては、中学生から高校生にかけて、対人スキルの中の回避や欺瞞など従来ネガティブであるとされてきたコミュニケーションを含む距離化スキルが高くなることが示された。

学年によるアサーションスキルの変化

3つの架空の場面を設定し、その状況において自分のとりそうな行動の1位と2位を「攻撃的」「アサーティブ」「非主張」「欺瞞的同調」の選択肢の中から選択してもらい回答を得た。1位にアサーティブを選んだ場合に1点を与え、3場面合計で最低0点最高3点となるようにアサーティブ得点を算出し、学年ごとの平均を比較した。結果を Figure7, Figure8 に示す。

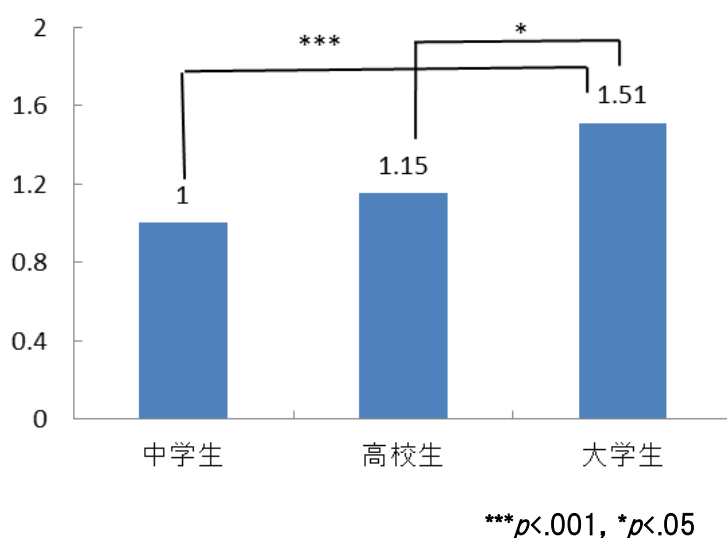


Figure 7. アサーションスキルの学年差(男子)

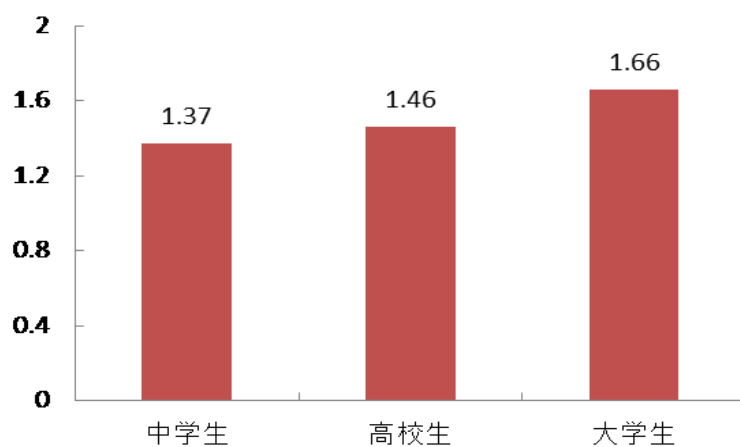


Figure 8. アサーションスキルの学年差(女子)

男子については，高校生と大学生との間で 5%水準の有意な差が見られ ($F(2,197)=9.04, p<.05$)，中学生と大学生との間で 0.1%水準の有意差が見られた ($F(2,197)=9.04, p<.001$)。男子については，高校生から大学生にかけての時期にアサーションスキルが高くなることが示された。女子については有意な差は見られず，男子に比べると中学生の時期から比較的高い値を示しており，その後もその値を維持するような結果であった。女子についてはアサーションスキルに青年期を通しての変化はないことが示された。

第4節 考察

4-1. ‘グループ’ 認識の学年差

‘グループ’ 認識の学年差については、男女ともに中学生・高校生・大学生のいずれの間にも有意な差は見られず、青年期を通して‘グループ’における関わりやそれに伴う認識には変化がないことが示された。保坂(2010)は、現代の青年期の子どもたちは、小学校時代に経験すべきギャング・グループを経験することがなくなっていること、そして、小学校高学年や中学生頃からチャム・グループのような関係性が始まると、高校生になってもそのままチャム・グループのような関係性が続くことを指摘している。また、齋藤(2008)も、大学生になっても表面的な関わりやお互いの同質性の確認に安住する者がいることを指摘し、大学生になってもチャム・グループのような関係性が続くことを示唆している。本研究で用いた尺度は、チャムやピアといった関係性の発達段階を測るものではなかったが、中学生が‘グループ’を負担に感じたり窮屈だと感じる背景には、主体性を出すことが許されない雰囲気や、‘グループ’の中身よりもみんなと一緒にいることが大切であるというチャム・グループのような表面的で浅い関係性や固定的で排他的な性質を持つためであるとも考えられ、互いの個別性を認め合い積極的に自己を開示しようとするピア・グループのような関係性に変化することで、‘グループ’へのネガティブな認識も変化する(大嶽,2010)という指摘もある。そのため、‘グループ’の認識に変化がないということは、‘グループ’の性質や関係性にも大きな違いがないと思われ、中学生から大学生にかけて、これまで考えられてきたような小学生はギャング、中学生はチャム、高校生はピアといった発達理論とは変わってきている可能性が考えられる。落合・佐藤(1996)は、高校生においては友人関係の持ち方に個人差が大きいとも述べており、今回の調査からも学年差より個人差の方が大きいことが示唆された。今後は、学年以外で関係性の発達差を示す指標を用いることで、関係性を発達させる要因を探る必要があると考えられる。

4-2. 対人接近化スキルおよび対人距離化スキルの学年による変化

本研究では、‘グループ’経験から獲得する対人スキルとして対人接近化スキルおよび対人距離化スキルを用いて検討を行った。対人接近化スキルは、従来、社会的スキルとして扱われてきたスキルであり、親和や主張などから構成されるものである。研究2や研究3の結果から、主張的なスキルはあまり‘グループ’において重要でないことが示されたため、主張的側面を含むこのスキルについては青年期を通して変化はないことが予測されたが、分析の結果、男女ともに有意な差は見られず、対人スキルの中の主張的側面は青年期を通して変化がないことが示された。石井(2007)は、親和や主張など社会的にのぞましいとされるコミュニケーションについては、青年期初期の段階ですでに身に付いており、青年期を通して大きな変化は見られないことを示唆しているが、今回の結果は石井(2007)の指摘を支持する結果となった。

一方で、対人距離化スキルについては、男子には有意な差は見られなかったが、女子において中学生と高校生の間には有意な差が見られ、青年期の女子においては中学生から高校生にかけて、欺瞞や回避といった従来ネガティブとされてきたあえて距離をとるコミュニケーションスキルである対人距離化スキルが高くなることが示された。大嶽(2010)は、女子は中学生以降の‘グループ’での関わりを通して、次第にどのような距離感で関われば円滑であり、高ストレス状況に陥らないかということを経験的に習得していくと述べている。また、研究3においても、大学生女子が‘グループ’経験から学んだ対人スキルは、相手との距離を置くことや人に合わせることなど、欺瞞や回避とも理解できる対人スキルであった。これらのことを踏まえると、女子が小学校高学年や中学生頃に経験する互いを束縛しあう窮屈な関係性(佐藤,2001)の‘グループ’から、次第に無理に一緒にいない、程よい関係性に変化(大嶽,2010)していく背景には、‘グループ’経験を通して回避や欺瞞といった対人スキルを獲得し、それらを行行使することで徐々に自分と‘グループ’との距離を調整できるようになるためであるとも考えられる。ただし、中学生から高校生にかけては変化が見られたが、高校生から大学生にかけての変化はなかったことから、大学生においても高校生と同じように距離化スキルを行行使しているといえる。窮屈で主体性が許されない‘グループ’においては、距離化スキルを行行使することが精神的な負担を軽減させるために必要であると考えられるが、中学生から高校生にかけて身についた距離化スキルを大学以降も引き続き行行使することは、高校生と大学生の‘グループ’の性質や関係性も変化していないと解釈することもできる。

4-3.アサーションスキルの学年差

アサーションスキルについては、男子において高校生と大学生および中学生と大学生の間に有意な差が見られ、男子は高校生から大学生にかけてアサーションスキルを獲得していくと考えられる。男子は青年期の初めには言いたいことがあっても言わないでその場をやり過ごすような関わりが多いが、学年が上がるにつれて、どんなふうに伝えたら相手を傷付けずに自分の気持ちを伝えられるかが分かるようになることで、大学生になる頃には自分の気持ちを表明できるようになると考えられる。丸山(2009)は、自己の調整機能のうち、自己主張をする頻度については、児童期から青年期初期にかけていったん下がるが、その後再び上昇傾向になることを示し、その要因として大学生頃になると言語コミュニケーション能力が高まることを1つの要因として挙げている。男子の結果は丸山(2009)の指摘を支持するものであった。また、研究2において、男子は自己主張ができないことが‘グループ’での不自由感につながることを示唆されており、男子については自分の気持ちを表明できることが‘グループ’において負担感や不満感を軽減させる要因になるのではないかと考えられる。そして、その気持ちの表明は単に自己主張が強くなるからではなく、相手にうまく伝える方法を身に付けることで以前よりも自己を表明しやすくなるためであると考えられる。

一方で、女子についてはアサーションスキルに学年による変化は見られなかった。女子の数値を見てみると、中学生や高校生の時点で男子大学生に近い値を示しており、アサーションスキルについては女子の方が早い段階で大学生以降のレベルに達しているといえる。研究2においても自己主張的側面と女子の‘グループ’には関連が見られず、研究3においても自己主張やアサーションを連想させるような結果はなかったことから、女子は中学生の時点でアサーティブな表現をすでに心得ており、少なくとも中学生以降の‘グループ’経験から身に付くものではないといえる。そして、対人距離化スキルが中学生から高校生にかけて高くなっていったことから、女子にとっては自分の言いたいことを伝えるアサーションスキルを身に付けていても、だからといって自分の思いを表明できるわけではないと考えられる。女子にとっては、たとえ心の中ではそう思っていなかったとしても、その場ではとりあえず同調したり、たとえ相手に言いたいことがあってもあえて主張せずその場をやり過ごすような関わりの方が‘グループ’でうまくやっていくためには重要であるからだと考えられる。

研究4のまとめと課題

本研究では‘グループ’の認識に学年差があるかどうかを大学生まで学年の幅を広げて再検討すること、‘グループ’経験によって身に付く対人スキルは、対人距離化スキルおよびアサーションスキルではないかという仮説のもと、それぞれについて学年による変化を調べることが目的であった。

‘グループ’認識の学年差については中学生から大学生にかけては男女ともに変化が見られず、中学生から大学生にかけて‘グループ’の性質や関係性に変化が見られないため、それらに伴う‘グループ’への気持ちや認識も変化しないことが考えられた。保坂(2010)が述べたように、関係性の変化が先延ばしになっていることを示唆する結果であった。青年期の‘グループ’の友達との関わり方や‘グループ’に対する認識は学年差よりも個人差の方が大きいことも考えられ、研究5では学年以外の他の指標で発達差を示すことを目的とした。

対人距離化スキルとアサーションスキルについては、男女で違った結果が得られた。まず、男子についてはアサーションスキルに高校生から大学生にかけて変化が見られたが、対人距離化スキルについては変化が見られなかった。男子は、中学生くらいの時期には言いたいことがあっても特に何も言わずにやりすごす関わり方が多いが、高校生から大学生にかけてアサーティブに自分の気持ちを表明する方法を身に着け、それらを行わせることにより、大学生になると自分の思いを表明することが可能になること、‘グループ’において感じていた不自由感が緩和されることが示唆された。一方で女子については、アサーションスキルについては変化が見られなかったが、対人距離化スキルでは中学生から高校生にかけて変化が見られ、回避や欺瞞といった他者との関係を収束させるようなコミュニケーションを中学生から高校生にかけて習得することが示唆された。そして、女子にとってはアサーションスキルよりも対人距離化スキルのようにあえて距離を取るような関わり方が、‘グループ’でうまくやっていくためには必要なスキルであることが示唆された。

第5節 研究1～研究4の総合考察

研究1～4では、主に2つの目的に沿って研究が進められた。1点目は、これまで考えられてきた落合・佐藤(1996)や保坂(1986)による仲間関係の変化が現代の中学生・高校生にも当てはまるかどうかを確認することであった。2つめは、良好な‘グループ’関係を維持し、ストレスfulにならないために、‘グループ’経験を通してどのような対処スキルを見出し、行使しているのかを明らかにすることであった。

1. 関係性の発達的变化

本研究では、‘グループ’における友達との関わり方や‘グループ’に対してどのような思いを抱いているかについて、3度の調査を行った。研究1では、中学3年生から高校2年生までの3年間の追跡調査を通し、友達との関わり方や‘グループ’の性質および認識について調査した。その結果、友達との関わり方、‘グループ’の性質や認識のいずれも学年による有意な差は見られず、これまで考えられてきた発達の様相とは違った結果が得られた。一方で、調査間隔の短さにより差が出なかった可能性も考えられた。そこで、研究2では、中学2年生と高校2,3年を対象とし、3学年以上の差を開け、再び調査を行った。しかしながら、やはり‘グループ’の友達との関わり方やそれに伴う‘グループ’への認識に違いが見られなかった。これらの結果をもたす要因として、青年を取り巻く環境の変化により、現代青年の友達との関わり方が変化していることが考えられた。土井(2009)は現代の青年の友達との関係を“優しい関係”と呼び、相手の気持ちを傷付けないように互いに深く踏み込まず、細かい配慮をし、過剰な優しさで気遣うのが特徴であると述べている。福重(2006)も、現代の青年が、波風の立たないコミュニケーションをとり、深く関わることに消極的であると指摘し、そのような関わり方をする要因として、現代の若者は、自己を開示する際に、無視や否定などのネガティブな反応が相手から返ってくるのを恐れるためだと示唆している。このような現代の若者特有の友達との関係の取り方について、國枝・古橋(2006)は、現代の子どもたちは、昔の子どもが仲間集団の中で学んだことが学べなくなっているため、仲間関係の形成や発展に大きな困難を抱えていると指摘している。保坂(2010)も、高校生で到達すると考えられてきたピア関係が、先延ばしになっていると述べ、高校生になっても同質性を重視した表面的な関係性が続いていることを示唆している。以上のような指摘を踏まえ、研究4では、調査対象を中学生・高校生・大学生とさらに年齢

幅を広くして調査を行った。しかし、研究4においても‘グループ’の関係性や認識に学年による有意な差は見られなかった。前述のように、昨今の青年の友人との関係のとり方には依然とくらべて変化が見られるという指摘はあるが、調査対象の中学2年生と大学2年生、3年生との間には6歳から7歳の年齢差があり、その間に関係性の発達のな変化が全く見られないというのも考えにくい。また、中学生と高校生を合わせて友達との関わり方による群分けを行った研究1において、気遣いばかりして自己開示をしない関わり方や積極的に自己開示しようとする関わり方をする者などいくつかのパターンに分かれており、同じ学年にいる者の中でも友人との関わり方や‘グループ’への認識は個人によって違っていると考えられる。落合(1995)も、特に高校生では様々なタイプの関わり方が見られ、個人差が大きいことを指摘している。今回の結果を踏まえて考えられることとして、友人関係の発達のな変化には学年差よりも個人差の方が大きく、皆が一様にギャング・チャム・ピアへと関係性を変化させるような一様な発達ではなく、個人によって発達の経路が様々な可能性が考えられる。そのため、学年差以外で関係性の深まりを示す指標を検討する必要があると考えられる。それによって、中学生から大学生にかけて多い関係性やいくつかのパターンを示すことにより、現代青年の友人関係の特徴が見えてくるのではないだろうか。

2. ‘グループ’における対処スキル

2番目の目的である‘グループ’における対処スキルについては、まず、どのような付き合い方をしている人が‘グループ’に対するネガティブな認識を抱きやすいかを調べるために、研究1において友達との付き合い方と‘グループ’への認識との関係を調べた。その結果、自分の言いたいことをあまり言わずに周りへの気遣いを多くする付き合い方は、負担感や束縛感を感じやすく心理的な負担が最も大きいことが示され、ある程度自己を開示しつつも状況に応じて自己の出し方を調整するような柔軟な対応が必要であることが示唆された。そこで、研究2では、自己の調整の仕方として社会的自己制御(原田,2008)を用いて自己の制御能力による‘グループ’への認識の違いについて調べた。また、佐藤(2010)の‘グループ’への認識には個人の自己の不安定さが関係しているという指摘を踏まえ、自己の安定性との関連についても調べた。その結果、自己が安定していることと抑制能力が高いことが女子においては‘グループ’の有用感や満足感を高め、不自由感を減少させるような傾向が見られた。一方、主張的側面については‘グループ’認識とはほとんど関

連が見られなかった。また、‘グループ’からはずされた経験、‘グループ’から誰かをはずした経験の有無により、自己の安定性および自己制御能力の違いについても調べた。その結果、はずされた経験のある者・はずした経験のある者のいずれも抑制能力が低い傾向が見られ、やはり良好な関係性の維持に抑制能力が重要であることが示唆された。しかし、‘グループ’にまつわる様々な問題は、保坂(1993)が「並々ならぬ気遣い」と述べたように、気を遣って自分を抑制しすぎてしまうことが要因であるとも考えられ、また、三好(1998)は、高校生女子の‘グループ’における関わり方について、「心の中でどう思っている、とりあえず合わせる」「相手の言い分がよく分からなくても、とりあえず分かったふりをして話を終わらせる」のように、抑制というよりは欺瞞的同調や回避など、処世術とも言えるような関わりであると指摘している。そこで、研究3では、‘グループ’を経験した女子が実際に‘グループ’ではどのようなスキルが大切であると考えているか、また、‘グループ’経験からどのようなスキルを見出しのかについて詳しく調べるために、自由記述による探索的な検討を行った。その結果、「‘グループ’での経験を通して学んだことは何ですか？」という質問に対し、最も多く挙げられたのは、友達との関わり方や集団での振る舞い方といった対人スキルに近い内容の回答であった。挙げられた回答から、‘グループ’に入りこみすぎず、一定の「距離を置く」こと、周りの空気や状況を考えながら行動し、場合によっては友達に「合わせる」こと、ただし、表面的には合わせていても流されすぎずに「自分の意見はしっかり持つこと」が‘グループ’において関係維持のため必要であることが示唆された。これらの結果から、研究4では、従来、ソーシャルスキルとして扱われてきた内容に近い“対人接近化スキル”に加え、欺瞞的同調や回避など、従来ネガティブであるとされてきたコミュニケーションスタイルである“対人距離化スキル”の2側面からなるメタ・ソーシャルスキル(石井,2007)を用いて、‘グループ’経験から得られるスキルは“対人距離化スキル”ではないかという考えのもと、学年による比較を行った。また、主張的側面についても、友達との関わりを通して自己主張が強くなるのではなく、うまく相手に自分の気持ちを伝えるスキルが得られるのではないかと考え、アサーション(平木,1993)概念を用いて、学年による比較を行った。その結果、女子については相手との関係を開始させたり距離を縮めるようなスキルは中学生の時点ですでにそれ以降(高校生や大学生)と同程度に獲得しており、中学生から高校生にかけて得られるスキルは、「とりあえず合わせておく」、「苦手な人と距離を置く」といった対人距離化スキルであることが示された。一方、アサーションスキルについては、女子は中学生の時点で大学生の男子と同程度のス

スキルを持っており、その後も横ばいで変化は見られなかった。男子については、対人距離化スキルに有意な差は見られず、男子は女子にくらべて‘グループ’における処世術のような対人スキルはあまり必要がないことがうかがえる。一方、アサーションスキルについては、男子では中学生から高校生に書けて有意に上昇する傾向が見られ、中学生くらいでは言いたいことがあっても何も言わずにやり過ごすことが多いが、高校生から大学生にかけて自分の気持ちをよりアサーティブに伝えられるように変化することが示された。以上より、女子においては回避や欺瞞といった相手との関係を表面的に取り繕ったり、収束させたりするようなスキルが‘グループ’の関係維持のために重要であることが示された。しかし、スキルには学年による変化は見られたものの、‘グループ’の関係性や‘グループ’に対する認識には変化が見られなかった。これについては、スキルが‘グループ’関係や‘グループ’への認識に直接影響を及ぼすものではないことが考えられる。友人関係が深まるプロセスにおいて、防衛的な姿勢から友達に積極的に関与しようという姿勢に変化する(落合・佐藤,1995)と述べられているように、表面的な関係性から互いの個別性を認め合ったピア関係(保坂,1986)に変化するには、対人距離化ばかりでなく、対人接近化を行使する必要もあると考えられる。対人距離化スキルを上手く使うことによって保たれたり変化が見られるのは、‘グループ’関係や‘グループ’への認識ではなく、当人のメンタルヘルスや学校適応感などであるとも考えられる。‘グループ’における対処スキルの有効性をより明確にするためには、それらの指標との関連を示すことも必要であると考えられる。

第7章 研究5 関係性ステイタス作成の試み

第1節 目的

研究1～研究4を通して、‘グループ’に対する認識が学年によって変化するかについて、年齢幅を広げながら3度にわたり検討したが、中学生から大学生にかけての間に学年による変化は男女ともに見られなかった。学年差よりも個人差の方が大きい可能性が考えられ、学年以外で関係性の発達差を表す指標を示すことが必要であると考えた。そこで、本研究ではマーシャが考案したアイデンティティの発達段階を示す尺度であるアイデンティティ・ステイタスおよび夫婦関係の関係性の深まりから関係性の水準を示す夫婦間関係性ステイタス(宇都宮,1999)を参考に、‘グループ’における友人関係の関係性の深まりを示す指標である関係性ステイタスを作成し、中学生・高校生・大学生がそれぞれのステイタスに位置しているかを調べることで、そして、そのステイタスによる‘グループ’の認識の違いや研究4において扱った対人スキルの違いを明らかにすることを目的とする。

第2節 方法

2-1.調査対象および調査時期

調査対象者および調査時期については、研究4と同様である。

2-2.調査内容

a.フェイスシート

性別、中学校・高校・大学の区分、学年について尋ねた。

b.表出・非表出スキルに関する質問項目

研究4と同じ尺度を用いた。

c.アサーションスキルに関する質問項目

研究4と同じ尺度を用いた。

d. ‘グループ’ への認識に関する質問項目

研究4と同じ尺度を用いた。

e.関係性ステイタスに関する質問項目

①マーシャのアイデンティティ・ステイタス(Marcia, J. E, 1966)

本研究で用いる関係性ステイタスは、マーシャのアイデンティティ・ステイタスを理論的基盤としている。マーシャは、アイデンティティの形成過程を見る基準として、自分の生き方について選択・決定する際に、迷ったり苦悩した時期を示す危機 (Crisis) と、人生の重要な領域に対する積極的関与 (Commitment) の2つの基準によって、自我同一性の状況を4つの地位に分類した。以下に4つを簡単に示す。

同一性達成：心理的危機を体験し、その葛藤の中で自分の可能性を模索した結果、自分なりの回答を見出して、1つの生き方に対して主体的な選択と積極的関与を行い、それに基づいて行動している状態。

モラトリアム：現在、危機を体験している最中であり、迷いながらも自分がいないために、傾倒すべき対象を見つけ出そうと努力している段階である

早期完了：自分の生き方について戸惑うことなく、両親の期待や目標をそのまま受け入れていている。一見同一達成と同じように見えるが、環境の急激な変化などのストレス下で柔軟な対応が困難である。

同一性拡散：過去の有無に関わらず、現在自分の重要な領域への積極的関与を行っていない状態。

Marciaによるこの同一性地位アプローチは、2変数の組み合わせによって、同一性形成の過程および機構に関するモデルが示されており、我が国でも無藤(1979)によってその妥当性の検討と修正とが試みられている。マーシャは、危機の有無や積極的関与の有無を判断する手法として面接法を用いているが、面接法では多数のデータ収集が難しいという欠点があった。そこで、加藤(1983)は、面接法ではなく質問紙によってアイデンティティ・ステータスが判定できる同一性地位判定尺度を作成した。本研究では、この加藤の同一性地位判定尺度をベースに関係性ステータスの質問項目を作成している。同一性地位判定尺度の流れ図と判定のもととなる質問項目を以下に示す(Table25)。

Table 25 同一性地位判定尺度の質問項目(加藤,1983)

現在の自己投入

私は今、自分の目標を成し遂げるために努力している

私には、特にうちこむものはない

私は、自分がどんな人間で何を望み行おうとしているのかを知っている

私は、「こんなことがしたい」という確かなイメージを持っていない

過去の危機

私はこれまで、自分について自主的に重大な決断をしたことはない

私は、自分がどんな人間なのか、何をしたいのかということ、かつて真剣に迷い考えたことがある

私は、親や周りの人の期待にそった生き方をすることに疑問を感じたことはない

私は以前、自分のそれまでの生き方に自信が持てなくなったことがある

将来の自己投入の希求

私は、一生懸命にうちこめるものを積極的に探し求めている

私は、環境に応じて、なにをすることになっても特にかまわない

私は、自分がどういう人間であり何をしようとしているのかを、今いくつかの可能な選択をくらべながら真剣に考えている

私には、自分がこの人生で何か意味があることができるとは思えない

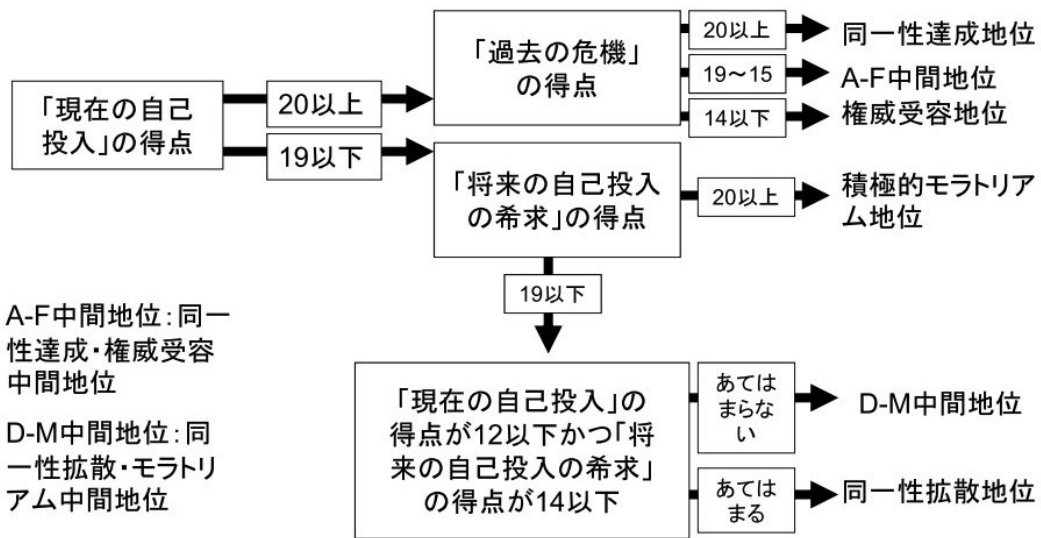


Figure 9. 同一性地位判定尺度の流れ図(加藤,1983)

Table25 に示す 14 個の項目について 6 件法で回答し、各項目の得点から Figure9 の流れ図に沿って判定される手法となっている。

② ‘グループ’ における関係性ステイタスの作成

アイデンティティ・ステイタスを参考に関係性ステイタスを示した宇都宮(1993)は、高齢期の夫婦を対象に SCT を用いて関係性の質を分析し、配偶者への存在の意味づけと積極的関与の有無を軸として 6 つの関係性に分類している。宇都宮(1993)は、配偶者の存在の意味づけができていないかどうかの判定基準について、「配偶者と自己とが別個の存在であることを理解したうえで、配偶者の存在を人格レベルから意味づける必要性を認識していること、配偶者の存在そのものに高い価値を見出していること」と述べているが、本研究で調査対象としている中学生・高校生・大学生は、友達と互いの個別性を認め合った上に成り立つピア関係(保坂,1986)にも未だ達していない水準であると考えられ、人格的意味づけを中心に位置づけることは適切でないと考えた。そこで、ステイタスの流れ図についてはマーシヤの同一性地位判定尺度にならい、「‘グループ’ への肯定的な関与があるか」と「過去に、‘グループ’ のことで悩んだことがあるか」という 2 つの観点から判別していくこととした。杉浦(2001)は、青年期の友人関係について親しい関係性を維持したいと思うと拒否不安

が強くなり悩みや迷いが生じるが、拒否不安が年齢により減少していくことで関係性にも変化がみられることを指摘している。また、‘グループ’の関係性の変化について調査した大嶽(2010)も、中学生から大学生にかけて‘グループ’の関係性が他者と親しい気持ちと自分らしさを出したいという気持ちに葛藤が存在し、その葛藤が成長とともに克服されていくからであると述べ、友人関係にまつわる葛藤の経験の重要性を指摘している。これらのことから、人格的意味づけよりも‘グループ’にまつわる友人関係について悩んだ経験を軸にすることが適当であると考えた。そして、‘グループ’への積極的関与があり、‘グループ’について悩んだ経験もあると判断された群に対して、宇都宮(1993)の人格的意味づけを加えることで、関係性達成群・機能的関係性群・表面的関係性群の3群に分類した。‘グループ’への積極的な関与が見られない群については、マーシャがアイデンティティ・ステイタスにおいて「将来の自己投入の希求」と名づけた、現状を変えようという姿勢が見られるかどうかの指標を‘グループ’においては「現状を変えようとする意欲」と読み替えた。これは、現在のグループの友達との関係性について、もっと深い関係性になることを求めているなど、今とは違った関係性を希求していることを意味している。この現状を変えたいと思っているかどうかを分岐点として、模索群と非関与群の2つに分類した。最終的に、関係性達成群・機能的関係性群・表面的関係性群・模索群・非関与群の合計5つのステイタスに分類した。

質問項目については、加藤(1983)の同一性地位判定尺度と宇都宮(1993)の関係性ステイタスのSCTの判定方法を参考に、それらを‘グループ’に置き換えた形で作成した(Tabele10,Figure26)。

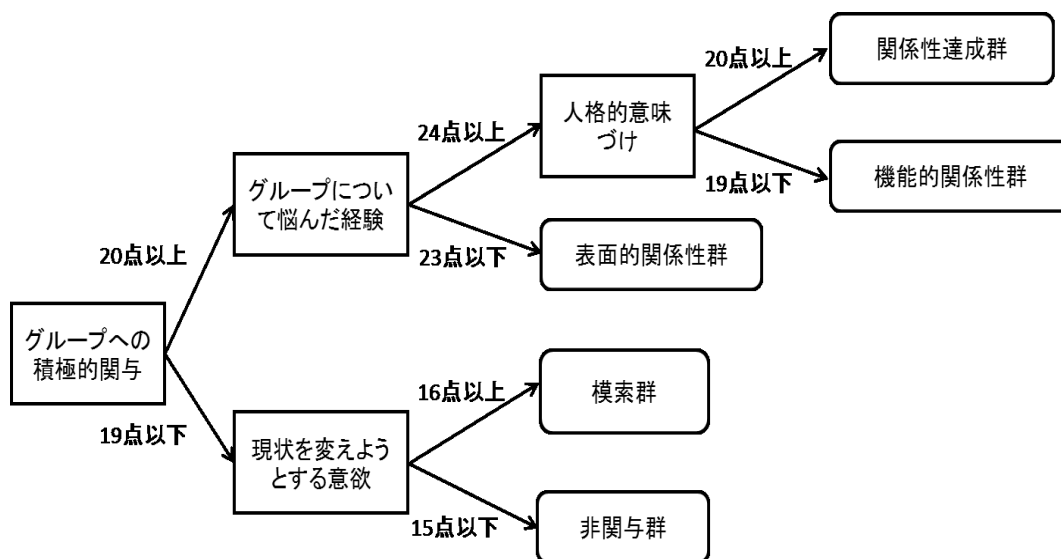


Figure 10. ‘グループ’ 関係性ステイタスの流れ図

Table 26. 関係性ステイタスの判定に用いた質問項目

グループに対する肯定的関与

グループでは、みんなと仲良く過ごせるように気を配っている
 学校生活では、奥の時間をグループの人と一緒に過ごしている
 グループの友達には、あまり自分のことに干渉しないでもらいたい
 グループの友達とは距離を置いて、気楽に過ごしたい
 グループでは、浮いてしまわないように気を付けている
 グループで過ごす時間はとても楽しい

グループについて悩んだ経験

グループの友達との接し方について悩んだことがある
 グループの友達との関係について疑問に思ったことがある
 グループの友達の期待に沿った振る舞いをするに抵抗を感じたことがある
 グループにいて、言いたいことが言えなかったり、やりたいことができないと感じたことがある
 グループ行動が面倒だと感じたことがある
 グループから抜けたいと思ったことがある。

現状を変える意欲

グループの友達と、もっと深く付き合えるようになりたい
 グループは、自分にとって特に意味のないものだと思う
 グループの友達には、特に何も期待していない
 グループでは、もう少し自分の意見を言えるようになりたい
 今後、どんなグループに入ることになっても特にかまわない

人格的意味づけ

今のグループのメンバーは、かけがえのない存在である。
 今のグループに入っていなければ、学校生活はとてつまらなかったと思う
 今のグループには、何かと便利だから入っているだけである
 グループにさえ入っていれば、今のメンバーでなくても特に何も変わらない
 今のグループのメンバーとは、卒業後もずっと仲良くしていきたい

1 つめの関係性達成群は、今現在のグルーにおいて肯定的な関与があり、これまでの‘グループ’において悩んだ経験のある者たちの中で、さらに‘グループ’のメンバーに対する人格的な意味づけができてきている群である。この群は、自分と友達とは別個の存在であることを理解したうえで友達に対して高い価値を見出しており、関与のあり方も積極的なものとなっている。‘グループ’や‘グループ’の友達に対する非代替性の感覚(宇都宮,1993)があることや‘グループ’の友達に対する機能的評価だけでなく人格的な意味づけが見られることが特徴で、最も関係性の深い群であるといえる。

2 つめの機能的関係性群は、‘グループ’への肯定的な関与があり、過去に‘グループ’や‘グループ’の友達について悩み考えた経験があるものの、‘グループ’のメンバーひとりひとりをかけがえのない存在と人格的な意味づけをする水準まではいかず、‘グループ’や友達をどちらかという機能的な面で評価している群である。

3 つめの表面的関係性群は、今現在において‘グループ’への肯定的関与は見られるものの、過去に悩んだり葛藤した経験がなく、一見すると深い関係性を持っているように見えるが、友達の存在をただ漠然と肯定していたり自己にもたらされる機能的メリットを評価しているにすぎず表面的な関係性の群である。

4 つめの模索群は、今現在‘グループ’への肯定的な関わりが見られないが、現状に対し「もっとこうしたい」「もっとこんなふうになりたい」といった今とは違う関係性の希求が見られ、現状を変えたいという意欲があり、それに向けて模索している群である。

5 つめの非関与群は、‘グループ’への肯定的な関わりが見られず、今とは違った関係性への希求も見られない群である。‘グループ’は自分にとって、特に価値のないものであり何の意味もないもの、あるいは自分に対して悪影響を及ぼすものであるという否定的な認識を示している群である。以上の5つの群を想定し、実際に中学生・高校生・大学生に質問紙を実施した。

第3節 結果

3-1.関係性ステイタスに関する質問項目の平均値と標準偏差

関係性ステイタスについての質問項目の平均値・標準偏差を算出した(Table.27)。その結果、「人格的意味づけ」において、5項目中3項目に天井効果が見られ、回答が得点の高い方に偏っている傾向が見られた。そのため、「人格的意味づけ」得点は妥当性が低いと考え、分析の対象から除外した。それに伴い、5つの群に分けていた関係性のうち、「関係性達成群」と「機能的関係性群」は区別せず、それを一緒にして「関係性達成群」とした。つまり、今現在において‘グループ’に積極的な関与が見られ、過去に‘グループ’や友人関係にまつわる葛藤を経験していることを関係性達成の条件とした。また、それぞれ α 係数を算出し、 α 係数を極端に下げている項目は除外した。その結果、合計20項目が採用された。変更した流れ図をFigure.11に示す。尚、それぞれの分岐点での得点による判定は、加藤(1983)の同一性地位判定尺度にならい、各質問群の平均が6点満点中4点以上であることを条件とした。

Table 27 関係性ステイタスに関する質問項目の平均値標準偏差

	平均	標準偏差
グループに対する肯定的関与($\alpha = .625$)		
グループでは、みんなと仲良く過ごせるように気を配っている	4.12	1.047
学校生活では、奥の時間をグループの人と一緒に過ごしている	4.14	1.169
グループの友達には、あまり自分のことに干渉しないでほしい	3.14	1.297
グループの友達とは距離を置いて、気楽に過ごしたい	2.43	1.366
グループで過ごす時間はとても楽しい	4.11	.978
グループについて悩んだ経験($\alpha = .814$)		
グループの友達との接し方について悩んだことがある	3.83	1.577
グループの友達との関係について疑問に思ったことがある	3.43	1.572
グループの友達の期待に沿った振る舞いをするに抵抗を感じたことがある	3.09	1.361
グループにいて、言いたいことが言えなかったり、やりたいことができないと感じたことがある	2.88	1.531
グループ行動が面倒だと感じたことがある	3.26	1.603
グループから抜きたいと思ったことがある。	2.58	1.572
現状を変えようとする意欲($\alpha = .621$)		
グループの友達と、もっと深く付き合えるようになりたい	4.72	1.204
グループは、自分にとって特に意味のないものだと思う	2.34	1.256
グループの友達には、特に何も期待していない	3.06	1.392
今後、どんなグループに入ることになっても特にかまわない	2.61	1.388
人格的意味づけ($\alpha = .716$)		
今のグループのメンバーは、かけがえのない存在である。	4.81	1.154
今のグループに入っていなければ、学校生活はとてつもらなかつたと思う	4.28	1.526
今のグループには、何かと便利だから入っているだけである	2.15	1.253
グループにさえ入っていれば、今のメンバーでなくても特に何も変わらない	2.20	1.235
今のグループのメンバーとは、卒業後もずっと仲良くしていきたい	5.00	1.201

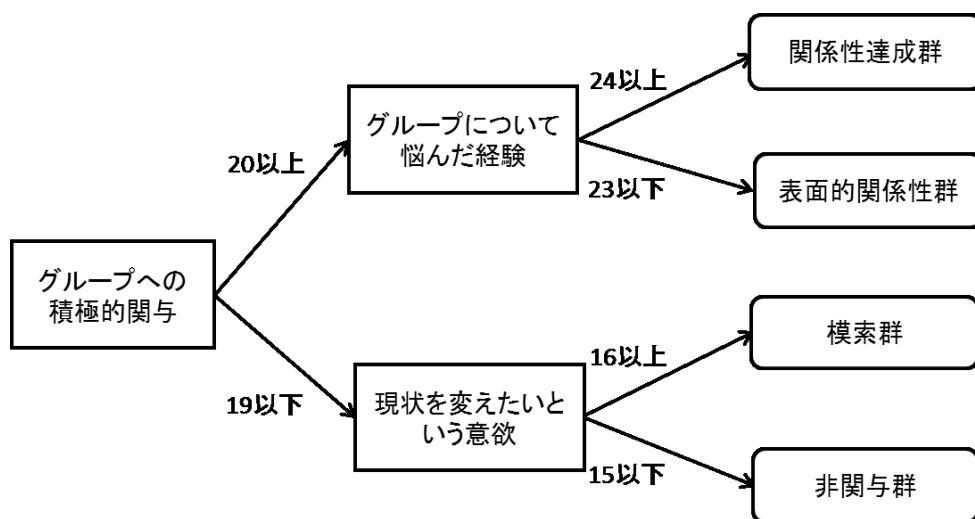


Figure 11 改良後の関係性ステータスの流れ図

3-2. 学年による関係性ステータスの違い

中学生・高校生・大学生によって関係性ステータスの段階に違いがあるかどうかを調べる
こと、また、どの段階の関係性の者が多いかを調べるために、カイ2乗検定を行った。

関係性ステータス4群と学校段階についてのクロス集計を男女別に示す(Table28, Table29)。

Table 28 関係性ステータス4群と学校段階(男子)

	中学生	高校生	大学生	計
関係性達成群	8人 15.1%	9人 14.1%	16人 20.5%	30人 16.1%
表面的関係性群	40人 75.5%	39人 60.9%	45人 57.6%	107人 65.8%
模索群	2人 3.8%	9人 14.1%	6人 7.7%	17人 7.7%
非関与群	3人 5.7%	7人 10.9%	11人 14.1%	21人 10.3%

Table 29 関係性ステイタス 4 群と学校段階(女子)

	中学生	高校生	大学生	計
関係性達成群	10人 16.9%	20人 14.9%	15人 16.0%	45人 15.7%
表面的関係性群	40人 67.8%	86人 64.2%	64人 68.1%	190人 66.2%
模索群	5人 8.5%	8人 6.0%	3人 3.2%	16人 5.6%
非関与群	4人 6.8%	20人 14.9%	12人 12.8%	36人 12.5%

カイ二乗検定の結果，男女ともに有意な差は見られず，学年によるステイタスの違いは見られなかった。関係性ステイタスの水準に学年の要因はないと考え，これ以降の分析では中学生・高校生・大学生を全て一緒にして分析を進めることとした。

関係性ステイタスの全体的な傾向として，男女ともに表面的関係性群が最も多く，全体の65%程度を占めていた。現代の青年は，‘グループ’に対して肯定的に関与しているが，‘グループ’の友達との関わりや関係性についての葛藤経験はなく，表面的な関係性に終始している者が青年期を通して多いことが示された。中学生においても関係性達成群にあたる者が一定数存在することも示され，関係性の変化については，学年差よりも個人差の方が大きいことが示唆された。

3-3.関係性ステイタスによる‘グループ’への認識の違い

関係性ステイタス4群と研究4で用いた‘グループ’への認識について、関係性の段階によって‘グループ’認識に違いが見られるかを明らかにするために、ステイタスの4つの群を独立変数として男女別に分散分析を行った(Figure12～Figure19)。

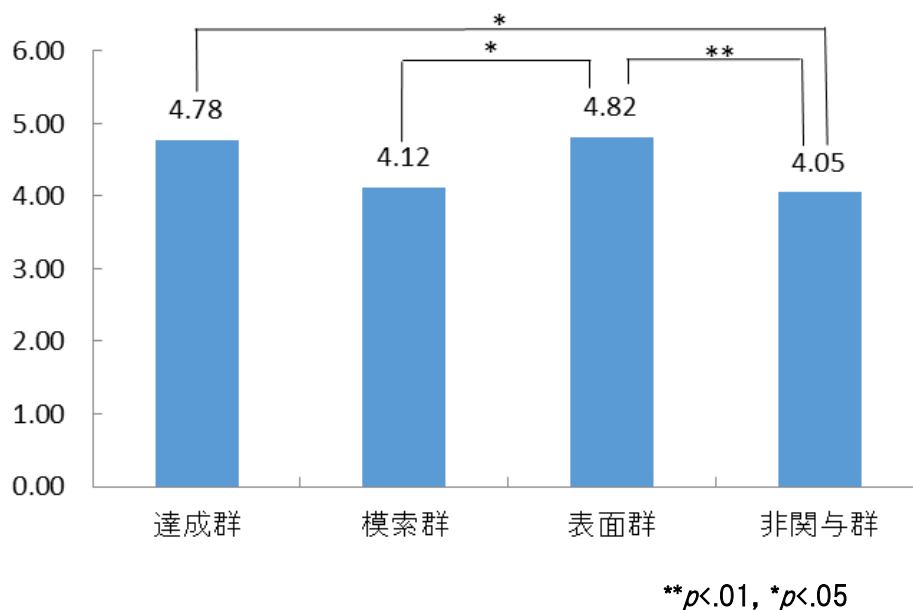


Figure 12. 関係性ステイタスによる「内面的つながり」の違い(男子)

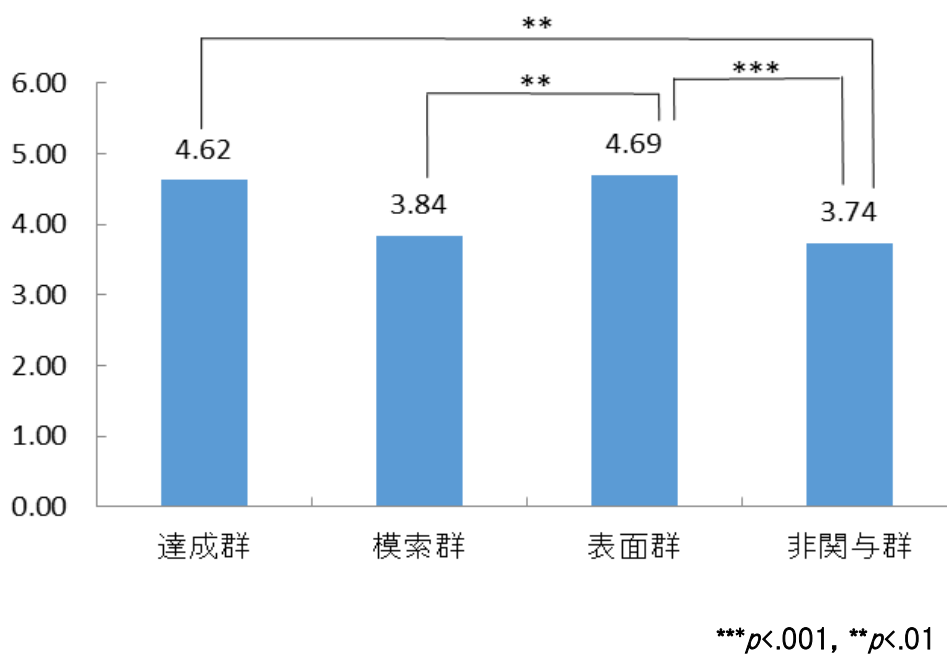


Figure 13. 関係性ステイタスによる「‘グループ’の有用感」の違い(男子)

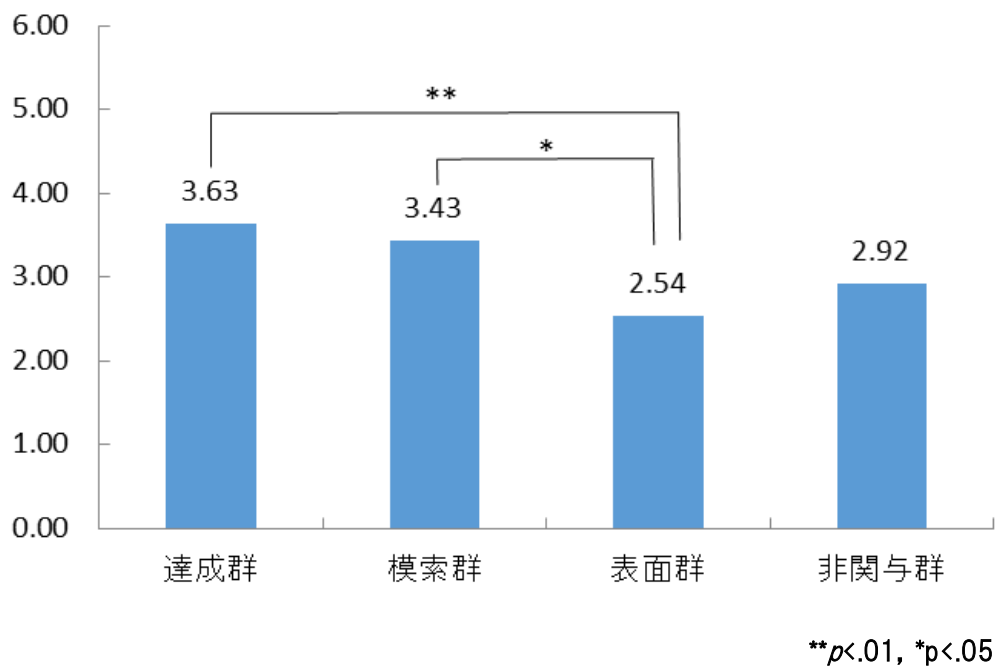


Figure 14. 関係性ステイタスによる「グループ」不自由感の違い(男子)

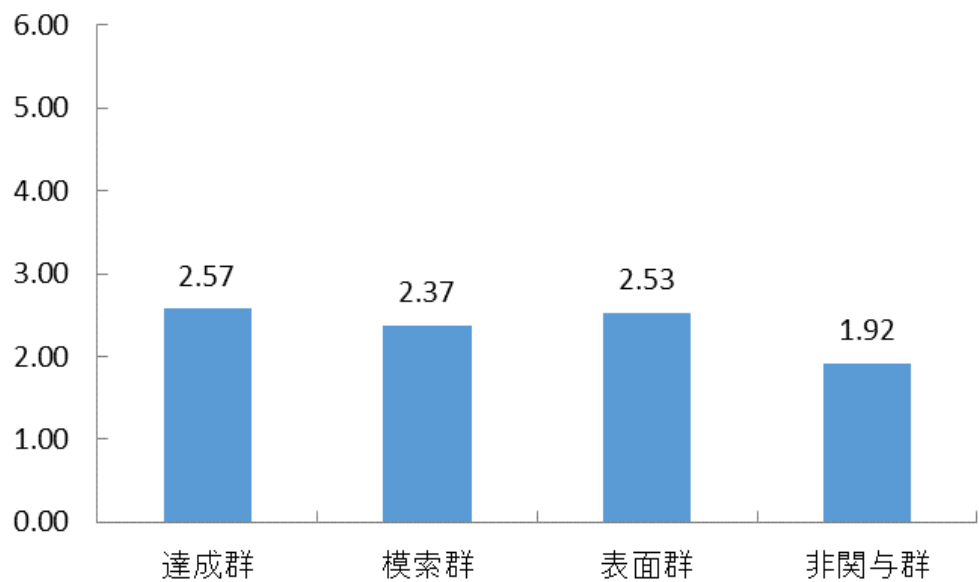
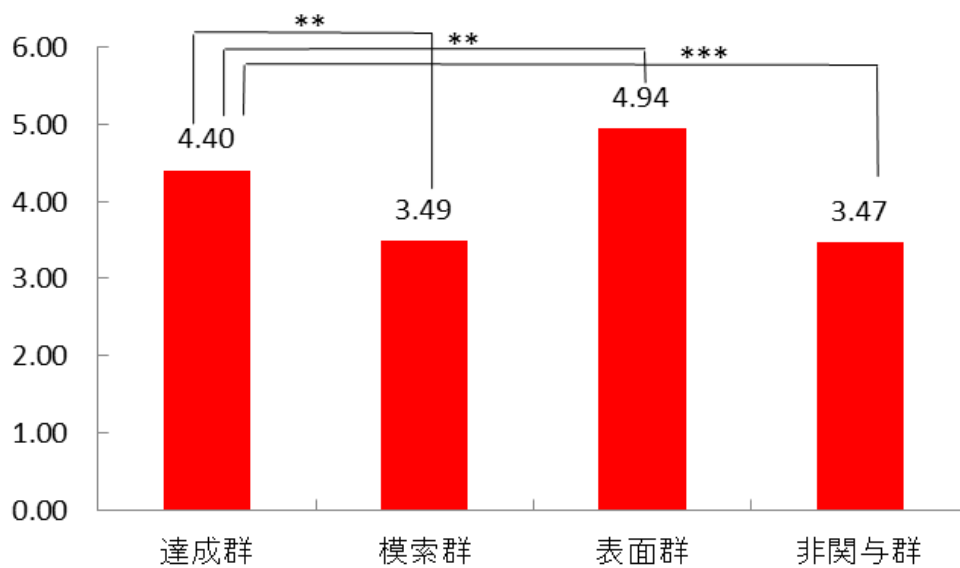
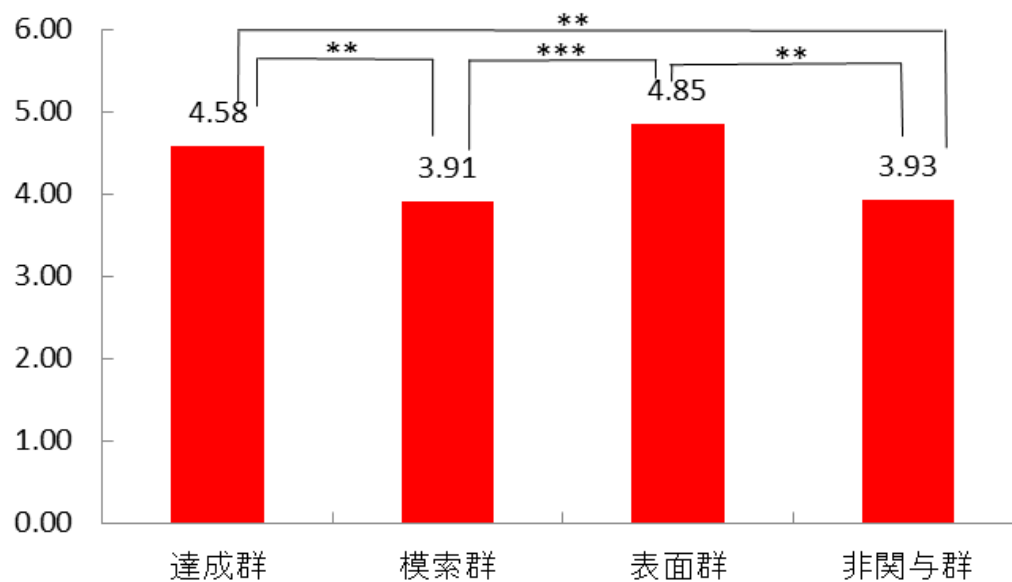


Figure 15. 関係性ステイタスによる「依存性」の違い(男子)



*** $p < .001$, ** $p < .01$

Figure 16. 関係性ステイタスによる「内面的つながり」の違い(女子)



*** $p < .001$, ** $p < .01$

Figure 17. 関係性ステイタスによる「グループ」の有用感の違い(女子)

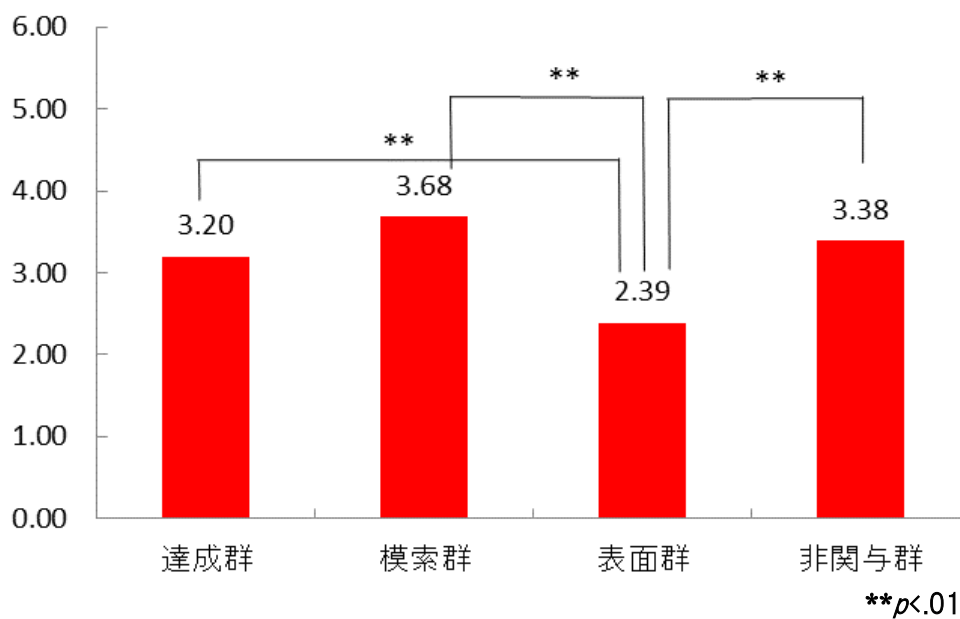


Figure 18. 関係性ステイタスによる「グループ」の不自由感の違い(女子)

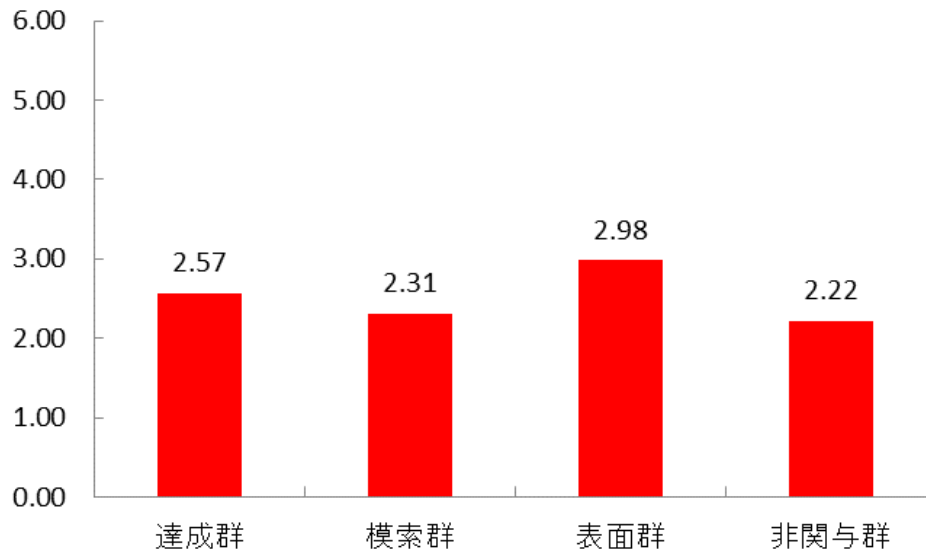


Figure 19. 関係性ステイタスによる「依存性」の違い(女子)

まず、男子においては「内面的つながり」において、達成群と表面群が模索群及び非関与群にくらべて有意に高く($F(3,148)=8.20, p < .001$), 関係性ステイタスの上位群の方が「グループ」における内面的なつながりを持っていると認識する傾向が高いことが示された。

「有用感」については、達成群は非関与群との間に、表面群は模索群および非関与群との間に有意な差が見られた($F(3,150)=5.40, p<.01$)。「つながり感」と同様に、関係性ステイタスの上位群の方が‘グループ’の有用性をより認識していることが示された。「不自由感」については、表面群が達成群および模索群にくらべて有意に低かった($F(3,148)=11.56, p<.001$)。「依存性」についてはどのステイタス間にも有意差は見られなかった。

次に女子の結果である。「内面的つながり」については、表面群が他の3群にくらべて有意に高く($F(3,283)=45.9, p<.001$)、表面群が関係性ステイタスの最上位群である達成群よりも‘グループ’の友達との内面的なつながりを認識でていることが示された。「有用感」では、達成群と表面群が模索群および非関与群にくらべて有意に高く($F(3,283)=15.53, p<.001$)、‘グループ’が自分にとって良い影響を与えるものだという認識は、関係性の深い群の方が認識していることが示された。「不自由感」では、「内面的つながり」と同様の結果が見られ、「表面群」が他の3群よりも有意に低かった($F(3,283)=15.53, p<.001$)。表面群はどの群よりも‘グループ’の中での不自由感の認識が低いことが示された。「依存性」については、男子と同様にどのステイタスとの間にも有意な差は見られなかった。

3-4.関係性ステイタスによる対人スキルの違い

関係性ステイタス 4 群と研究 4 で用いた石井(2006)の対人接近化スキルおよび対人距離化スキルについて、関係性の段階によってそれぞれのスキルの行使に違いが見られるかを明らかにするために、ステイタスの 4 つの群を独立変数として男女別に分散分析を行った (Figure20～Figure23)。

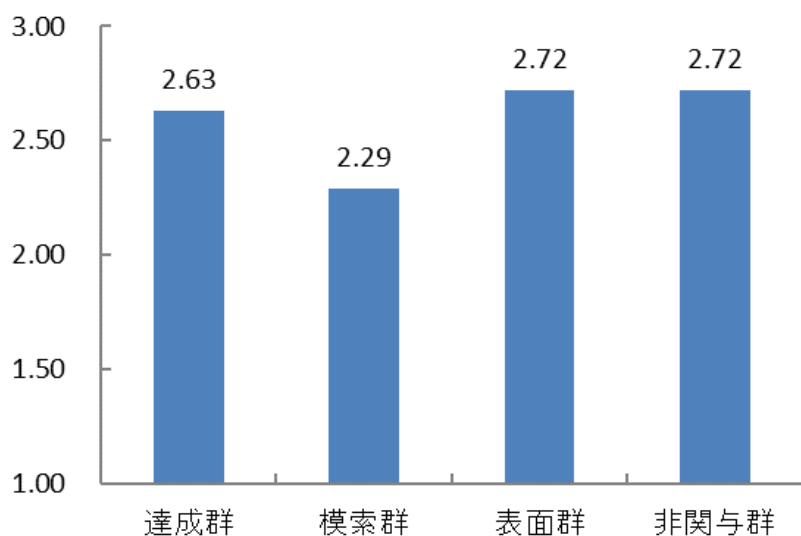


Figure 20. 関係性ステイタスによる対人接近化スキルの違い(男子)

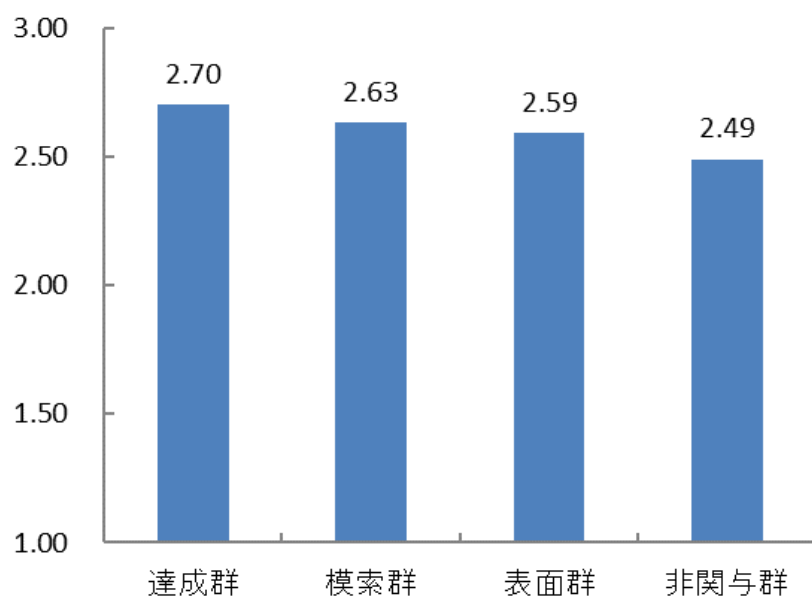


Figure 21. 関係性ステイタスによる対人距離化スキルの違い(男子)

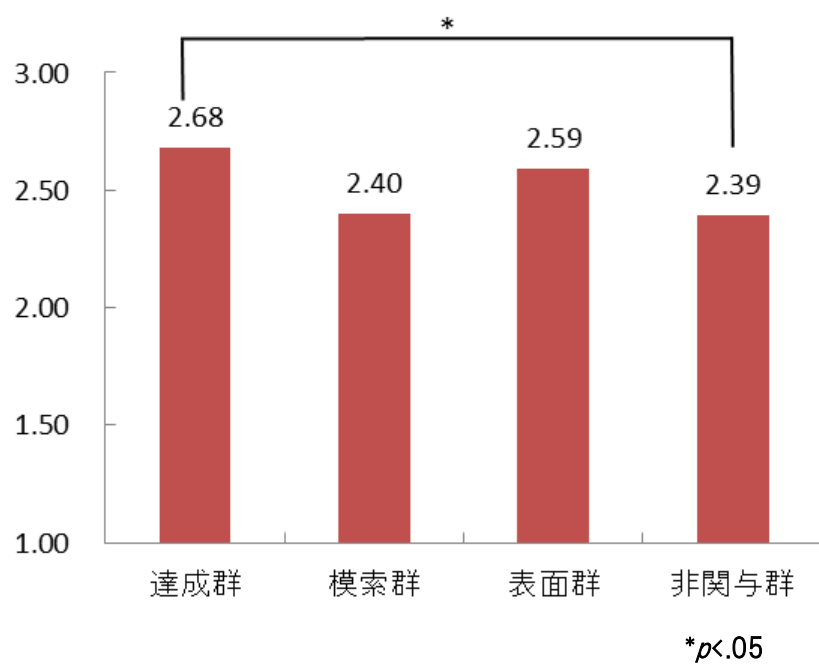


Figure 22. 関係性ステイタスによる対人接近化スキルの違い(女子)

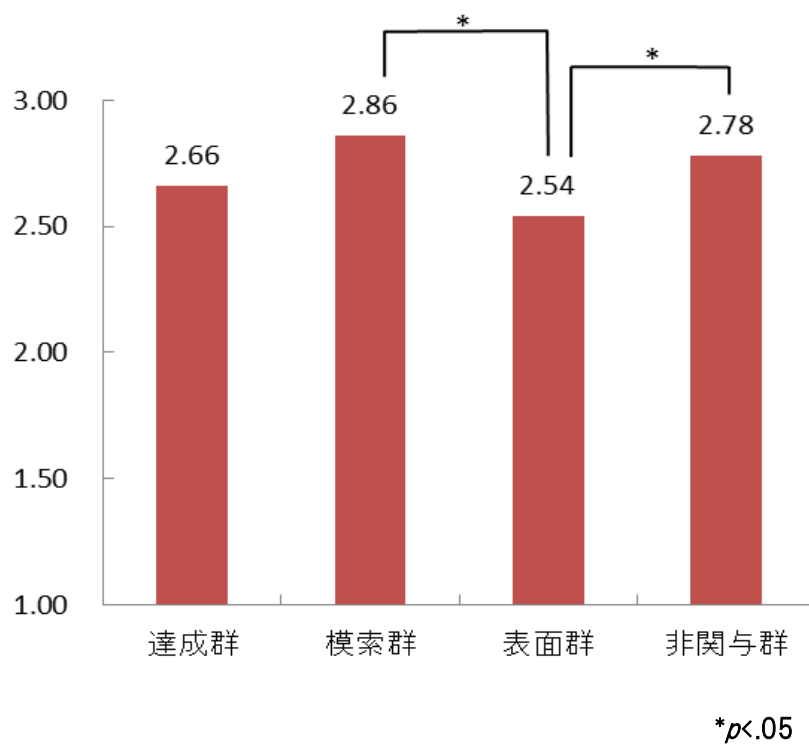


Figure 23. 関係性ステイタスによる対人距離化スキルの違い(女子)

男子については、対人接近化スキルおよび対人距離化スキルともに有意な差は見られず、関係性ステイタスによる対人スキル行使の違いはないことが分かった。一方、女子では対人接近化スキルにおいては達成群と非関与群との間に有差が見られ($F(3,283)=3.81, p<.05$), 全体的な数値も達成群に向けて高くなる傾向が見られた。接近化スキルの行使は、関係性のステイタスが上位に行くにつれて高くなることが示された。対人距離化スキルについては、表面群が模索群および非関与群より有意に低く($F(3,283)=4.65, p<.01$), 模索群や非関与群など関係性ステイタスの低い群の方が欺瞞や同調といった他者とあえて距離を取る関わりが頻繁に見られることが示された。

3-5.関係性ステイタスによるとアサーションスキルの違い

関係性ステイタスによるアサーションスキルの違いについて、関係性の段階によってスキルの高さに違いが見られるかどうかを明らかにするために、関係性ステイタスの4つの群を独立変数として男女別に分散分析を行った(Figure.24, Figure.25)。

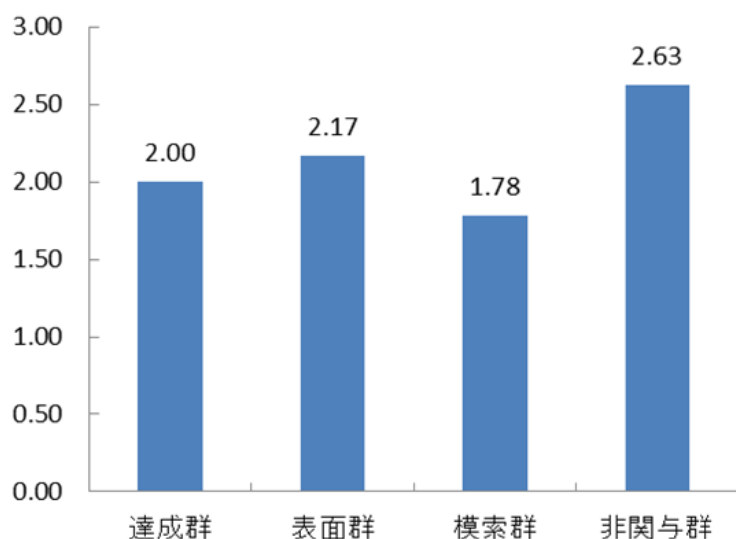


Figure 24. 関係性ステイタスによるアサーションスキルの違い(男子)

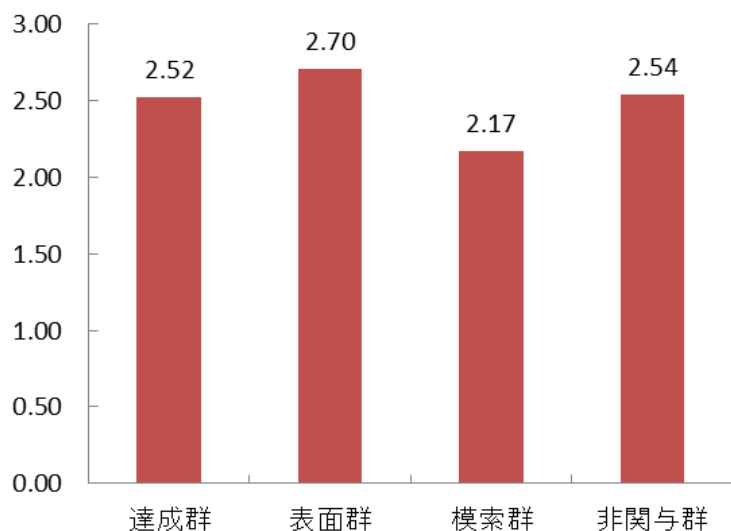


Figure 25. 関係性ステイタスによるアサーションスキルの違い(女子)

アサーションスキルについては、男女ともにどのステイタスとの間にも有意な差は見られなかった。関係性ステイタスとアサーションスキルについては、関係がないことが示された。

第4節 考察

4-1.関係性ステイタスの作成

本研究の目的の1つめは、‘グループ’の関係性やそれにとまなう‘グループ’への認識についての発達の変化を年齢以外の指標で捉えることであった。

Marcia(1966)や加藤(1983)の作成したアイデンティティ・ステイタス、および宇都宮(1993)の作成した関係性ステイタスを参考に、‘グループ’における積極的関与と‘グループ’における友人関係での葛藤経験の2つを軸として5つの関係性のパターンを想定した。しかしながら、「人格的意味づけ」では、多くの項目に天井効果が見られ、人格的な意味づけの有無から関係性を区別することができなかった。研究3において、‘グループ’から学んだことの回答として、「‘グループ’には入っていると何かと便利なことがある」と考えている者も多かったことから、‘グループ’や友達に対し、「ひとりにならなくて済むから」「情報がいろいろ入ってくるから」など、自分にとって得があったり便利なことがあるからという機能的な面で評価している段階の者も多いと考えられる。青年期の関係性の変化の最も大きな変化は、互いの個別性を認め合った上で積極的に分かり合おうとする姿勢(落合・長沼, 1998)であり、‘グループ’や友達を自分にとってかけがいのないものであり代替性の利かないものだとして認識している関係性と機能的な評価の段階は関係性の質としてずいぶん違っていると考えられる。人格意味づけの有無を正確に測ることが今後の課題である。人格的意味づけが正確に測れなかった要因としては、中学生や高校生にとって‘グループ’や友達に対して人格的な意味づけがあるかどうかを客観的に捉えることが難しいからだと考えられる。人格的意味づけの質問項目は宇都宮(1983)を参考に作成した。宇都宮(1983)の研究対象は60歳以上で結婚生活が30年以上の夫婦を対象としているが、それらの対象者が配偶者に対して「かけがいのないものだ」と思う気持ちと青年期の子どもたちが‘グループ’の人を「かけがえのないものだ」と思う気持ちを同等に扱うことには無理があるだろう。これについては、質問紙よりも Marcia(1966)が行っていたような面接調査や宇都宮(1983)が行ったような SCT によって‘グループ’の友達は自分にとってどんな存在かを実際に書いてもらう課題の方法が適切であるとも考えられる。今後、調査手法も含めて見直していくことが課題である。また、アイデンティティ・ステイタス(Marcia, 1966)や関係性ステイタス(宇都宮, 1983)は、達成に向けての段階を想定しているため、それぞれのステイタスにはランクがあるが、本研究では現代の青年期の子どもたちの関係性がどのように変化していくのかを明らかにできておらず、また、実際に大学生で非関与群にいる

者が今後模索群や達成群へと変化するののかについては疑念が残る。そのため、今回用いた関係性ステイタスは段階があるものではなく、単に関係性の違う群でありそれぞれ独立したものだと思えるべきであろう。

関係性ステイタスについては、まだ探索的に作成した段階であり、構成概念や質問項目の妥当性など改良すべき点が多々あると思われる。関係性や親密性についてのステイタスを測る尺度は、夫婦関係など成人以降の男女の関係性を測るものが多く、青年期の友達との関係性を測るものはほとんど見られない。これは、青年期の友達との関係性は年齢という要因によって発達すると考えられていたためとも考えられる。しかしながら、2000年以降の研究(保坂, 2010; 土井, 2004)では、関係性が以前と変わってきていることが指摘され、本研究の研究1~4においても中学生から大学生の間での変化が見られなかったことから、学年以外で発達差を示す指標は必要であろう。今後、現代の青年の関係性の発達を捉えた上で、発達を段階的に示す尺度を作ることが課題である。

4-2. 学年による関係性ステイタスの違い

関係性ステイタスによって分類された4つの関係性について、中学生・高校生・大学生がそれぞれどの群に多く該当しているかを確認した結果、男女ともに「表面的関係性群」に該当するものが多く、全体の65%以上であった。また、学年による有意な差はなく、現代の青年の多くが表面的関係性群の特徴を持つことがわかった。この「表面的関係性群」は、いま現在‘グループ’への積極的な関与があり、過去に‘グループ’について悩んだ経験はないとする者である。Marcia(1966)のアイデンティティ・ステイタスでは早期完了型に当たるもので、一見適応的に見えるが過去に葛藤を経験していないために好ましい群とは捉えられていない。昨今の青年期の友人関係の変化としてさかんに言われてきたのは、土井(2004)の言うような「やさしい関係」がよく見られることである。つまり、相手が傷付かないように細かい配慮をして過剰なやさしさで振舞う関係性である。そのため、自分の思いを表明したり相手を否定するようなことがないため、関係性が表面的であると指摘されており、今回の結果において、中学生から大学生を通して多くの青年が「表面的関係性群」に該当したことは、現代の青年の関係性の特徴をよく表していると理解することもできる。これまで青年期の友人関係で述べられてきた関係性の変化や保坂(1986)の述べた関係性の3段階の変化は、現代の青年期には当てはまらない可能性が考えられる。また、保坂(1986)の述べた関係性の3段階のうち、チャム・グループは、関係性の中身よりも一緒にい

るといふことに重きを置いた表面的な関係性を特長とする関係性であった。本研究の「表面的関係性群」はこのチャム・グループにあたることもできる。現代の中学生から大学性の65%が男女ともにチャム・グループのような関係性であることが現代の青年の友人関係の特徴であるといえる。大学カウンセラーの齋藤(2008)は、学生‘グループ’の話し合いが日常慣れ親しんだ交流モードである同質性の相互確認に安住しがちであることを指摘している。これまで多く指摘されてきたように、現代の青年の友人関係は、以前にくらべて関係性が浅く表面的であるという指摘(土井,2004;福重,2006など)を支持する結果となった。

一方で、‘グループ’に対して積極的な関与が見られず今とは違った関係性への希求も見られない非関与群がどの年齢においても一定数存在していた。これらの人たちは、‘グループ’に入っていたけどその道から外れてしまった人もいれば、無理してでも過剰に適応することよりも積極的に関与しない道を選んだと考えることもでき、‘グループ’に適応する以外の選択肢があることを示すものである。これまでの関係性の発達論では、個人差はあっても最終的には互いの個別性を認め合った深い関係性へ向かっていくと考えられてきた。しかし、今回の結果から、必ずしも全員が同じ道筋で関係性を深めていくのではなく、その発達の道筋にはいくつかのパターンがあるとも考えられる。‘グループ’の機能や関係性の発達の与える影響を捉えるに当たり、非関与群のような関係性の人たちが、どのような人たちなのか、またなぜその関係性に至ったのかを調べることで、関係性発達の新たな道筋が見えてくるのではないだろうか。

4-3 関係性ステイタスと‘グループ’認識の違い

関係性ステイタスによる‘グループ’認識の違いについては、男女で似たような結果が得られた。現在の‘グループ’への積極的関与が見られ、過去に‘グループ’について悩んだ経験のある達成群は、4群の中で最も関係性が深いと仮定した群であった。達成群は、「内面的つながり」や「‘グループ’の有用性」などのポジティブな認識が高い傾向にあるが、表面群とくらべると「不自由感」も高い傾向があった。似たような傾向が見られた表面群は、達成群と同様に「内面的つながり」や「‘グループ’の有用性」が高く、‘グループ’に対する「不自由感」も4群の中で最も低くなっていた。「不自由感」とは、‘グループ’内で主体性を出すことができなかつたり無理して合わせているという認識を指している。落合・佐藤(1998)の明らかにした関係性の変化では、同質性を重視した関係性から個

別性を重視した関係になるか過程で、自己を積極的に開示しようとしたり、相手のことを積極的に理解しようとする付き合い方が見られることを示唆している。つまり、達成群の青年たちは、もっと自分の気持ちを表現したり本音をぶつけ合うような個別性を大切にしたい関係性を望んでいるのかもしれない。そのため、主体性を出すことを禁止するような‘グループ’には不自由感を感じているのではないだろうか。反対に、不自由感が低い表面群は、‘グループ’において悩んだり葛藤した経験がなく、一緒にいることを重視した今の関係性に特に不満もないため、達成群ほどの不自由感を感じずに過ごせていると考えられる。現在の‘グループ’には肯定的な関与ができていないが、今とは違った関係性への希求が見られる模索群は、「内面的つながり」や「‘グループ’の有用性」などポジティブな認識が低く、「‘グループ’の不自由感」が高いという結果となった。模索群は、今とは違った関係性の希求が見られる群であり、まさに同質性を重んじて個性を出すことを良しとしない窮屈な‘グループ’に葛藤している状態であると理解できる。‘グループ’への肯定的な関与がなく、今とは違った関係性への希求も見られない非関与群については、「内面的なつながり」や「有用感」といったポジティブな認識が低い、「不自由感」については、有意な差は見られなかった。非関与群は、‘グループ’や‘グループ’のメンバーに対しての現状を変えたいという意欲もない群であり、‘グループ’に対して必要以上に関与せず、‘グループ’に対して特に何も期待していないという群であると理解できる。今回比較した‘グループ’への認識の違いは、全体的に達成群と表面群が似たような結果を示し、模索群と非関与群が同じ動きを示していた。達成群と表面群の違いは、宇都宮(1993)によれば人格的な意味付けがあるかどうかという観点で見ることが大切であるが、今回の調査では、妥当性の問題から人格的意味づけの項目を使用することができなかった。今後、人格的意味づけの有無を測れるような尺度あるいは方法論を検討し、達成群と表面群はどのような点が異なるかを明らかにすることが、関係性の発達を捉える上で必要である。

4-4 関係性ステイタスと対処スキル

関係性ステイタスによる対処スキルの違いについては、男子では有意な差は見られなかった。男子においては‘グループ’で必要な対処スキルと関係性の深まりは関係がないといえる。一方、女子では、対人接近化スキルおよび対人距離化スキルにおいて有意差が見られた。対人接近化スキルは達成群が非関与群にくらべて高く、対人距離化スキルは模索群および非関与群が表面群より高い結果となった。これらの結果から、対人距離化スキル

については、現在の‘グループ’に積極的に関与できていない青年が距離化スキルを頻繁に行使していることになり、「‘グループ’は所属したいが、‘グループ’の人たちとはあまり深く関わりたくない」「いまの‘グループ’の関係性に違和感がある」など、‘グループ’と少し距離を置いて関わりたい場合、‘グループ’の雰囲気や波風を立てることなくその場を上手くやり過ごすために有効で、よく行使されるスキルであると考えることができる。一方で、親和や主張といった自分から相手に積極的に近づいていこうとする接近化スキルは達成群が非関与群にくらべて高かったことから、達成群は本音を見せ合ってより深く付き合おうとしていると理解できる。対人接近化スキルと対人距離化スキルは、‘グループ’への葛藤や否定的な気持ちがある段階では距離化スキルが頻繁に使われるが、葛藤を自分なりに克服した後で、次に接近化スキルがより行使されるようになるとも考えられる。そうであるならば、対人距離化スキルは、自分を出したい気持ちと‘グループ’からはずれたくないといった葛藤を克服する過程で、自分の気持ちと‘グループ’での自分の立場や‘グループ’の雰囲気とのバランスを取るために行使されるスキルであるとも理解できる。

‘グループ’への対処スキルと‘グループ’認識との関連については、対処スキルを獲得することで‘グループ’へ認識がただちに良くなるような直接的な影響は少なく、対処スキルはあくまでその場の‘グループ’関係を維持させるものであると考えられる。つまり、同質性を重視した表面的な関係性の‘グループ’から個別性を認め合う関係性へと変化する過程において、‘グループ’の同調圧力による主体性を出せない雰囲気や気の合わない友達などと対峙する際に、‘グループ’の関係性や空気を乱すことなく、また自分の精神的安定を崩すこともなくその場をうまく収める方法として距離化スキルが有効であり、中学生や高校生は日々の‘グループ’での経験から‘グループ’において必要なスキルとして距離化スキルを見出す。それは‘グループ’への認識というよりも自分自身の精神的健康を守るためのものであるため、‘グループ’への認識には特に変化がないと考えられる。

研究5のまとめ

本研究では、学年以外の指標で友達との関係性を示す指標として「関係性ステイタス」の作成を試みた。Marcia(1966)のアイデンティティ・ステイタスの理論的枠組みを参考に、現在への‘グループ’への積極的な関与(現状への自己投入)と過去に‘グループ’について悩んだ経験(過去の危機)および今とは違った関係性への希求(将来への自己投入)の3つの得点により、達成群、模索群、表面群、非関与群の4つの関係性のパターンに分類した。中学生・高校生・大学生がどの関係性に当たるかを調べた結果、全体の約65%が表面群にあたる段階の関係性に該当し、学年による有意な差も見られなかった。研究1~4で示してきた通り、学年に関係なく多くの青年が表面的な関係性に留まっていることが示された。一方、中学生の段階ですでに関係性達成群に該当する者や大学生において非関与群に該当する者など個人差も大きく、全ての者が達成群に向けて変化するののかについては疑問の残る結果となり、皆が一様の道筋で達成群の関係性に向かうような発達経路ではなく、いくつかの発達のパターンがあり、向かう先も異なっている可能性が示唆された。

‘グループ’への認識および‘グループ’における対処スキルについては、これまで学年要因では差が見られなかったが、関係性ステイタスの群ごとの比較では差が見られた。全体の65%を占める表面群は、ポジティブな認識は高くネガティブな認識は低いという傾向が見られ、居心地の良い関係性である様子が窺えた。一方、達成群は、接近化スキルをよく使い、‘グループ’に対してはポジティブな認識は高いが「不自由感」が表面群より高い結果となった。また、模索群は距離化スキルをよく使い、‘グループ’への認識はネガティブな認識が強い傾向が見られた。以上の結果より、対人距離化スキルは、模索群のように自分を出したい気持ちと‘グループ’からはずれたくないといった葛藤を克服する過程で、自分の気持ちと‘グループ’での自分の立場や‘グループ’の雰囲気とのバランスを取るために行使されるスキルであり、達成群のように葛藤を乗り越え、関係性が一つ上の段階に行く過程で接近化スキルのように積極的に自己を開示しようとするスキルが行使されている可能性が示唆された。表面群は、アイデンティティ・ステイタスの早期完了型に該当する群であるが、早期完了型は、一見すると達成しているように見えるが過去に葛藤した経験がないため、あまり推奨されないステイタスである。本研究での表面群は、達成群のように相手に積極的に自分を出していこうという姿勢もなく、模索群のように主体性を出せない‘グループ’に対して疑念持つこともなく、楽な関係性であるとも理解でき、

だからこそ多くの青年が表面的な関係性にとどまっていると考えることもできる。

第8章 総合考察

第1節 本論文の目的

青年期の友人関係は、この時期の若者にとって何より重要な人間関係であり、多くの研究者がその意義について述べている(長沼・落合,1998; 碓井,2000; 難波,2005 など)。第1章の1節～2節では、青年期の友人関係の意義と友人関係の発達的变化、現代の青年の友人関係の特徴について概観した。青年期には、親から独立し、自己の形成や自立性を確立する時期である。これまで親との関係性が重要な安全基地であった子どもにとって、それにとって代わる仲間関係が新たな拠り所として重要であり、青年期の中でもそれぞれの年齢に応じて特徴的な関係性が見られると指摘されてきた(落合・佐藤,1996; 保坂,1986)。しかし、インターネットやソーシャルメディアの発展により、青年を取り巻く環境は大きく変わった。加えて、都市化に伴う遊び場の減少、テレビゲームの普及、習い事や塾通いなどの個人志向の高まりにより、従来小学校時代までに経験すべきケンカやトラブルも含めた友達との活動を経験できず、また、直接的なコミュニケーションの少なさから自分の考えや気持ちを他者に受け入れてもらった経験が乏しいため、互いに深く踏み込まない優しい関係に終始していると指摘されるようになった(土井,2009)。そして、その傾向は大学生になっても続くことが指摘されており(齋藤,2008)、これまで落合・佐藤(1996)や保坂(1986)が述べてきたような友人関係の発達的变化とは違った様相を見せていると考えられた。そこで、本研究では、現代の中学生・高校生・大学生の間に、これまで考えられてきた関係性の変化が見られるかどうかを第1の目的とし、3度の調査を通して検証を行った。

また、中学生や高校生において見られる友人‘グループ’は、子どもにとって学校生活の中心であり、大変大きな関心ごとである。青年期の友人関係については、この時期に親友を持つことの重要性が指摘され、1対1の友人関係について様々な研究がされてきた。しかし、1970年ごろに女子の‘グループ’の存在が指摘されて以降、青年期の友人関係における研究は‘グループ’が中心となり、昨今では、親友の存在よりも‘グループ’に所属できているか否かが学校適応を高めるとも言われている(石本, 2009)。これまでの‘グループ’に関する研究は、主に青年期に‘グループ’が必要とされる理由を青年期の心理的特徴から明らかにしようとするものが多かった。親からの心理的離乳に伴い、不安定な心の彼らにとって、‘グループ’はそれにとって代わる居場所であり、必要なものであると考えられる。一方で、‘グループ’に入れなかった者や‘グループ’でのトラブルをきっかけに

不登校や不適応などの臨床的な問題が生じるケースは少なくない。‘グループ’に入るかどうかは個人の自由であるものの、学校ではほとんどの生徒が‘グループ’に入っており、どこかに属さなければならないような風潮があるとも言われている。‘グループ’は、1対1の対人関係と違い、集団であるがゆえに、暗黙の集団規範や同調圧力が生じることも少なくない。そして、直接的なコミュニケーションの経験が乏しく関係性の構築が難しい現代の青年期の子どもたちが、‘グループ’に所属し、そこでの関係性を維持するためには、社交性や親和性のようなパーソナリティだけでなく、対人スキルを持っているかどうかにも円滑な関係性の維持には必要であることが指摘されている(牧野,2012)。松井(1990)も、青年期の友人関係の意義として「社会的スキルの学習機能」を挙げ、國枝・古橋(2006)は、現代の青年期の子どもたちが仲間関係の発展に大きな困難を抱えているのは、適切な自己主張の方法やルールを守るなどの社会的スキルが身に付いていないためであることを示唆している。本研究では、中学生・高校生にとって避けては通れない‘グループ’に適応してうまくやっていくために、どのような対処スキルが有効であるかを調べることを第2の目的として研究を行った。

第2節 青年期の友人関係の発達的变化

2-1.現代青年の友人関係の発達の様相

青年期の友人関係には、各年代によって関係性に特徴が見られ、青年期を通して関係性に変化が見られると述べられてきたが、携帯電話の普及やインターネットおよびソーシャルメディアの発展など、青年を取り巻く社会の大きな変化により、現代の中学生や高校生の関係性にはこれまでと同様の変化が見られない可能性も考えられた。そこで、本研究では、友達との関わり方やそれに伴う‘グループ’への認識について、3度に渡り調査を行った。研究1では、中学3年生から高校2年生までの3年間の追跡調査を通し、友達との関わり方や‘グループ’の性質および認識について調査した。その結果、友達との関わり方、‘グループ’の性質や認識のいずれも学年による有意な差は見られず、これまで考えられてきた発達の様相とは異なる結果が得られた。一方で、調査間隔の短さにより差が出なかった可能性も考えられた。そこで、研究2では、中学2年生と高校2,3年を対象とし、3年以上の差を開け、再び調査を行った。しかしながら、やはり‘グループ’の友達との関わり方やそれに伴う‘グループ’への認識に違いが見られなかった。これらの結果をもたらず要因として、インターネットやソーシャルメディアの発展により青年を取り巻く環境が変化し、現代の青年の友達との関わり方が変化していることが考えられた。土井(2009)は現代の青年の友達との関係を“優しい関係”と呼び、相手の気持ちを傷付けないように互いに深く踏み込まず、細かい配慮をし、過剰な優しさで気遣うのが特徴であると述べている。福重(2006)も、現代の青年が、波風の立たないコミュニケーションをとり、深く関わることに消極的であると指摘し、そのような関わり方をする要因として、現代の若者は、自己を開示する際に、無視や否定などのネガティブな反応が相手から返ってくるのを恐れるためだと示唆している。岡田(1999)も、大学生に対する調査の結果から、青年は理想として親密な付き合いを望んでいるが、相手がそれを望まないのではないかという不安が先に立ち、希薄な関係に留めてしまうことを示唆している。このような現代の若者特有の友達との関係の取り方について、國枝・古橋(2006)は、現代の子どもたちは、昔の子どもが仲間集団の中で学んだことが学ばなくなっているため、仲間関係の形成や発展に大きな困難を抱えていると指摘している。保坂(2010)も、高校生で到達すると考えられてきたピア関係が、先延ばしになっていると述べ、高校生になっても同質性を重視した表面的な関係性が続いていることを示唆している。以上のような指摘を踏まえ、研究4では、調査対象を中学生・高校生・大学生とさらに年齢幅を広くして調査を行った。その結果、研究4においても‘グ

グループ’の関係性や認識に学年による有意な差は見られなかった。前述のように、昨今の青年の友人との関係のとり方には以前とくらべて変化が見られるという指摘はあるが、調査対象の中学2年生と大学2年生、3年生との間には6歳から7歳の年齢差があり、その間に関係性の発達のな変化が全く見られないということは考えにくい。また、中学生と高校生を合わせて友達との関わり方による群分けを行った研究1において、気遣いばかりして自己開示をしない関わり方や積極的に自己開示しようとする関わり方をする者などいくつかのパターンに分かれており、同じ学年にいる者の中でも友人との関わり方や‘グループ’への認識は個人によって異なると考えられる。落合(1995)も、特に高校生では様々なタイプの関わり方が見られ、個人差が大きいことを指摘している。今回の結果を踏まえて考えられることとして、友人関係の発達のな変化には学年差よりも個人差の方が大きく、皆が一様にピア関係に向かって関係性を深めていくような発達ではなく、個人によって発達の経路が様々に違っている可能性が考えられる。大学生の友人関係のあり方を調査した池田(2012)は、青年期の若者は、友人との親密度によって付き合い方を分けているタイプと、どの友人とも同様の付き合いをしているタイプの2類型が存在すること、また、前者は対面関係を重視して付き合うのに対し、後者では友人に立ち入りすぎないように気を遣い、対面関係を避けながら過ごしていることを示し、同じ年齢の者の中にも友人関係のあり方に複数のパターンが見られることを示唆している。これまでの青年期の友人関係の発達については、年齢の移行とともに関係性の変化が見られることが考えられていたため、個人差による要因にはあまり注目されてこなかった。今後は、同年齢の中での友人関係の個人差やいくつかのパターンなどを見出すことにより、関係性の発達や深まりにはどのような要因が影響しているのかを明らかにすることが課題であると考えられる。

2-2.関係性ステイタスからみた友人関係の発達

研究5では、学年以外に関係性の発達差を示す指標として、関係性ステイタスの作成を試みた。Marcia(1966)の用いたアイデンティティ・ステイタスを理論的基盤とし、現在の‘グループ’への積極的関与(コミットメント)と過去に‘グループ’について悩んだ経験(危機)を軸として、関係性達成群・模索群・表面的関係性群・非関与群の4つの関係性に分類した。杉浦(2001)や大嶽(2010)は、青年期には他者に嫌われたくない気持ちと自分らしさを出したいという気持ちとの葛藤を克服していくプロセスが見られると述べている。本研究で示した関係性ステイタスは、‘グループ’への関与が消極的で‘グループ’には何も期待

していない非関与群，‘グループ’には肯定的に関与するが過去に悩んだり葛藤の経験のない表面群，‘グループ’への関与は消極的であるが現状を変えようと模索する模索群，過去の葛藤を乗り越えて‘グループ’に肯定的に関与する達成群の4つに分類されており，現在の‘グループ’の友達への関与の程度に加えて，過去の葛藤や相手とより親密になりたいという希求の程度によって群分けが行われていることから，杉浦(2001)や大嶽(2010)の述べるような「他者に嫌われたくない気持ちと自分らしさを出したい気持ちとの葛藤を乗り越え，より親密な関係性を築くプロセス」を表していると考えられる。実際に，中学生・高校生・大学生に調査を行い，どの関係性の水準に該当しているかを検討した結果，中学生・高校生・大学生いずれも表面的関係性群が最も多く，全体の65%を占めていた。表面群とは，アイデンティティ・ステータスの早期完了型に当たる群であり，一見適応的に見えるが，友人関係において悩んだり葛藤を乗り越えた経験のない浅い関係性であるといえる。今回の結果は，多くの研究者(土井，2009；福重，2006など)が指摘するとおり，現代青年が深いかかわりを避け，表面的な関係性に安住していることを示す結果となったと考えることができる。一方で，中学生の段階ですでに関係性達成群に該当する者や大学生において非関与群に該当する者など個人差も大きかった。Marcia(1966)のアイデンティティ・ステータスはそれぞれのステータスにはランクがあり，下位のステータスから上位のステータスに向かって，最終的には達成型に到達するという道筋が想定されている。しかし，本研究の関係性ステータスにおいて，例えば大学生の男子で非関与群に該当する人が，今後，表面群・模索群を経て達成群に向かうのかということについては疑問の残る結果となった。大学生はある程度の‘グループ’経験を積んできた年齢であることを考えると，青年期を通してずっと非関与的な関わりで大学生に至った可能性も考えられるが，これまでの経験の中で，自分は‘グループ’とは距離を置いて関わる方が向いているという考えから非関与的な付き合い方にたどり着いた可能性も十分に考えられる。つまり，ある人にとっては達成群のような人格的に相手を認める深い関係性が行きついた関係性であっても，別の人にとっては非関与群のような，関わりを最低限に済ませるような関係性が自分にとって心地よく，最終的に行きついた関係性であったというように，皆が一樣の道筋で関係性を深めていくような発達ではなく，いくつかの発達のパターンがあり，向かう先も異なっている可能性があるのではないか。岡田(2015)は，青年期の友人関係の個人差について，青年全体をひとまとめにした結果，異なる特徴を持った青年群が相殺され，変化が見えにくくなっていることを指摘している。その上で，大学生の中には，①群れて表面的に楽し

い関係性を維持する青年群，②対人関係を回避する青年群，③伝統的・青年観に近似した青年群など，複数のタイプが混在することを示唆している。平石(2010)も，青年全体をひとまとめにするような過度な一般化の危険性を指摘している。これらの指摘は，同年齢の青年の中にも友人との関係のとり方には個人差があり，必ずしも一様のパターンではないことを示唆するものである。夫婦関係における関係性ステイタスを提示した宇都宮(1999)は，これまでの夫婦間についての研究は，結婚の機能的なメリットや離婚すべきでないという規範に沿うものが多く，関係性を1次元で捉える傾向があり，個々の夫婦の関係性の多様さを捉えるには不十分であると指摘し，夫婦関係を発達の視座から捉え，関係性発達の力動的側面を視野に入れて関係性の枠組みを再考している。宇都宮(1999)の調査からは，達成群に該当する夫婦が結婚生活への適応が最も良い結果が示された一方で，達成群以外の関係性も5つのパターンが見られることを示し，様々な発達経路があり，行き着く関係性も個々の夫婦によって様々であることを示唆している。友人関係においても，互いの個別性を認め合って積極的に互いを理解しあおうとするピア関係が望ましい関係ではあるが，誰もがピア関係に向けて関係性を変化させるのではなく，ピア関係が心地良いと感じる者がピア関係へと変化し，あまり深く関わらない関係性が自分には合っているという者はまた違った関係性へと変化するなど多様な関係性と経路を考える必要があるといえる。また，Marcia(1966)のアイデンティティ・ステイタスに対する批判として，不合理なステイタスの移行が見られることが指摘されている(谷，1999)。例えば，ある時点で達成型に該当したものが数年後の追跡調査でより下位のステイタスである早期完了型へ移行するケースなどである。このような傾向から，友達との関係性についても環境の変化によって複数の関係性を行ったり来たりすることが考えられる。今後の研究により，より多様な関係性や関係性の発達経路を明らかにすることが必要であろう。本研究では，具体的にそれぞれの群がどのような発達をしているかまでは明らかになっていないが，少なくともこれまで考えられてきた落合・佐藤(1995)や保坂(1986)の論じた関係性の発達論と現代の青年の関係性の変化は必ずしも同様ではないことが示された。従来の発達理論を現代の青年に用いることには慎重になるべきであるし，関係性の発達理論を再考する必要があると考えられる。

第3節 円滑な関係性に有効な‘グループ’対処スキル

‘グループ’における対処スキルについては、まず、どのような付き合い方をしている人が‘グループ’に対するネガティブな認識を抱きやすいかを調べるために、研究1において友達との付き合い方と‘グループ’への認識との関係を調べた。その結果、自分の言いたいことをあまり言わずに周りへの気遣いを多くする付き合い方は、負担感や束縛感を感じやすく心理的な負担が最も大きいことが示され、ある程度自己を開示しつつも状況に応じて自己の出し方を調整するような柔軟な対応が必要であることが示唆された。

そこで、研究2では、自己の調整の仕方として社会的自己制御(原田,2008)を用いて自己の制御能力による‘グループ’への認識の違いについて調べた。また、佐藤(2010)の‘グループ’への認識には個人の自己の不安定さが関係しているという指摘を踏まえ、自己の安定性との関連についても調べた。その結果、自己が安定していることと抑制能力が高いことが女子においては‘グループ’の有用感や満足感を高め、不自由感を減少させるような傾向が見られた。一方、主張的側面については‘グループ’認識とはほとんど関連が見られなかった。また、‘グループ’からはずされた経験、‘グループ’から誰かをはずした経験の有無により、自己の安定性および自己制御能力の違いについても調べた。その結果、はずされた経験のある者・はずした経験のある者のいずれも抑制能力が低い傾向が見られ、やはり良好な関係性の維持に抑制能力が重要であることが示唆された。しかし、‘グループ’にまつわる様々な問題は、保坂(1993)が「並々ならぬ気遣い」と述べたように、気を遣って自分を抑制しすぎてしまうことが要因であるとも考えられ、また、三好(1998)は、高校生女子の‘グループ’における関わり方について、「心の中でどう思っているかと、とりあえず合わせる」「相手の言い分がよく分からなくても、とりあえず分かったふりをして話を終わらせる」のように、抑制というよりは欺瞞的同調や回避など、処世術とも言えるような関わりであると指摘している。

そこで、研究3では、‘グループ’を経験した女子が実際に‘グループ’ではどのようなスキルが重要であると考えているか、また、‘グループ’経験からどのようなスキルを見出したのかについて詳しく調べるために、自由記述による探索的な検討を行った。その結果、「‘グループ’での経験を通して学んだことは何ですか？」という質問に対し、最も多く挙げられたのは、友達との関わり方や集団での振る舞い方といった対人スキルに近い内容の回答であった。挙げられた回答から、‘グループ’に入りこみすぎず、一定の「距離を置く」こと、周りの空気や状況を考えながら行動し、場合によっては友達に「合わせる」こと、

ただし、表面的には合わせていても流されすぎずに「自分の意見はしっかり持つこと」が‘グループ’において関係維持のため有効であることが示唆された。

これらの結果から、研究4では、従来、ソーシャルスキルとして扱われてきた内容に近い‘対人接近化スキル’に加え、欺瞞的同調や回避など、従来ネガティブであるとされてきたコミュニケーションスタイルである‘対人距離化スキル’の2側面からなるメタ・ソーシャルスキル(石井,2007)を用いて、‘グループ’経験から得られるスキルは‘対人距離化スキル’ではないかという考えのもと、学年による比較を行った。また、主張的側面についても、友達との関わりを通して自己主張が強くなるのではなく、うまく相手に自分の気持ちを伝えるスキルが得られるのではないかと考え、アサーション(平木,1993)概念を用いて、学年による比較を行った。その結果、女子については相手との関係を開始させたり距離を縮めるような‘対人接近化スキル’は中学生の時点ですでにそれ以降(高校生や大学生)と同程度に獲得しており、中学生から高校生にかけて得られるスキルは、「とりあえず合わせておく」、「苦手な人と距離を置く」といった‘対人距離化スキル’であることが示された。対人距離化スキルには、「気乗りしない遊びに誘われたときに、適当な理由をつけて断る」など、どちらかと言うと主張と思われる項目も含まれており、単なる抑制とはかなり違っている。女子は、自分にとってたいしたことではなければ、相手に合わせたり「そうだよね」と言ってその場をやり過ごし、嫌なことをはっきり嫌と言うのではなく、嘘になってしまっても波風の立たないようにうまく断るといった対処スキルを身に付けており、このような対処スキルが‘グループ’でうまくやっていくために有効であると考えられる。一方、アサーションスキルについては、女子は中学生の時点で大学生の男子と同程度のスキルを持っており、その後も横ばいで変化は見られなかった。男子については、対人距離化スキルに有意な差は見られず、男子は女子にくらべて‘グループ’における処世術のような対人スキルはあまり用いないことが示唆された。一方、アサーションスキルについては、男子では中学生から高校生にかけて有意に上昇する傾向が見られ、中学生くらいでは言いたいことがあっても何も言わずにやり過ごすことが多いが、高校生から大学生にかけて自分の気持ちをよりアサーティブに伝えられるように変化することが示された。

以上より、男子においては自分の思いや考えを相手にうまく伝えるスキルが、女子においては回避や欺瞞といった相手との関係を表面的に取り繕ったり、収束させたりするようなスキルが‘グループ’の関係維持のために有効であることが明らかとなった。青年期の友人関係の悩みについての研究を行った高井(2008)は、「人にどのように接したらいいか分

からない」「合わない相手・嫌いな相手との付き合い方が分からない」といった悩みを持つ者が一定数存在することを示している。また、悩みはないと回答した者についても詳細に分析し、コミュニケーションスキルに工夫を凝らすことで悩みを感じなくなっている様子や、適度な距離感を保つことでスムーズな人間関係を築くことができるようになっていることを報告している。本研究で示された女子の関係性維持に有効な対人距離化スキルは、まさに他者と適度に距離をとるためのコミュニケーションスキルである。宮本(2005)が、青年期の友人関係の役割の1つとして「対人スキルの獲得」をあげているように、‘グループ’においても日々の友達との関わりの中で「対‘グループ’スキル」のようなものを見出し、それぞれにスキルを獲得していくことが示唆された。

第4節 関係性ステイタスと‘グループ’対処スキルとの関連

研究4において、男子ではアサーションスキルが、女子では対人距離化スキルが青年期を通して獲得される対処スキルであることが明らかとなった。しかし、学年による‘グループ’に対する認識には変化がなかった。つまり、スキルを獲得してもただちに‘グループ’への認識が肯定的になったり不自由感が軽減されるといった変化にはつながらないことが示された。また、関係性ステイタス4群と対処スキルとの関連では、距離化スキルを頻繁に行っていたのは模索群や非関与群など‘グループ’への肯定的関与の低い群であった。逆に、親和や主張といった対人接近化スキルは関係性達成群に高い傾向が見られた。これについては、前述した大嶽(2010)、杉浦(2001)の「青年期には、他者に嫌われたくない、親しい関係を持ちたいという気持ちと自分らしさを出したいという気持ちに葛藤が生じ、それらを克服していくプロセスが見られる」という指摘が重要である。つまり、非関与群や模索群は、現在の‘グループ’に肯定的に関与できていない群であり、模索群は現在の関係性に何らかの葛藤や迷いを感じている可能性があり、非関与群はそもそも‘グループ’に対する希求がない状態である。そのような、「‘グループ’にはいたい、‘グループ’の人とはあまり深く関わりたくはない」と感じている時には、対人距離化スキルはその場の空気を乱すことなく平穩に距離化できるため、より行使されると理解できる。しかし、相手とより親密になりたい、自分のことを分かって欲しいという親和動機の高まりによって葛藤が生じ、その葛藤を克服した後にはより相手を理解し、自分のことも理解してもらおうとする対人接近化のスキルの行使頻度が上がる可能性が考えられる。これらのことから、対人距離化スキルは関係性が浅い段階や模索している段階で特に必要とされるスキルであり、深い関係性に向かう途中の段階において必要なスキルであるといえる。そして、関係性が深まることで距離化スキルの頻度は減り、次に相手と相互に理解しあおうという対人接近化スキルが大切になるのではないだろうか。大嶽(2010)は、女子では、高校生の時期は友人関係の模索の時期であると述べており、女子において、高校生で距離化スキルが一時的に上昇したのは、模索の時期であることを表しているとも理解できる。

男子についても、学年によるアサーションスキルの変化が見られたものの、関係性の変化との関連は見られなかった。関係性ステイタスによるスキルの差異も見られず、対処スキルの獲得と‘グループ’への肯定的な気持ちには関連がないといえる。落合・長沼(1998)は、高校生や大学生の男子は、女子に比べ、友達と深いつながりを持つとしない傾向があることを示している。榎本(1999)は、青年期男子が同質性を重視した関係から異質性を

重視したより深い関係性に変化する際、その基盤になる感情は、友達への信頼と独立(自分の確立した意思を持つこと)であることを示した。この「独立」には、「相手と意見が違っても自分の考えは曲げない」「自分の意見は積極的に述べる」といった主張的な側面がふくまれている。榎本によれば、この自分の確立した意思を持ち、相手に素直に伝えようとする意志は早い段階で見られ、大学生頃になってやっと友人への信頼感など内面的なものが見られるようになると述べている。本研究で見られた男子のアサーションスキルの学年による発達的变化は、深い関係性に向かって行く中での1つの変化であると理解できる。友人関係が深まるプロセスにおいて、防衛的な姿勢から友達に積極的に関与しようという姿勢に変化する(落合・佐藤,1995)と述べられているように、表面的な関係性から互いの個別性を認め合ったピア関係(保坂,1986)に変化するには、対人距離化スキルばかりでなく、対人接近化スキルを行使する必要もあると考えられる。牧野(2012)は、大学生では、同性友人に対する会話スキルが高いほど、精神的健康状態が良いことを指摘している。対人距離化スキルを上手く使うことによって維持されたり変化が見られるのは、‘グループ’関係や‘グループ’への認識ではなく、当人のメンタルヘルスや学校適応感などであるとも考えられる。‘グループ’における対処スキルの有効性をより明確にするためには、それらの指標との関連を示すことも必要であると考えられる。

第5節 本論文で明らかになったこと

本論文で明らかになったことは以下の3点である。

- 1.現代の青年の友人関係の発達的变化は、これまで言われてきた落合・佐藤(1995)や保坂(1986)の示した発達の様相と同様でないことが示された。また、現代の青年の友人関係の発達観として、これまでは中学生から高校生にかけて、浅い関係性から深い関係性へ変化していくと考えられてきたが、学年差よりも個人差が大きいことが示唆された。加えて、発達の道筋は皆が一様に深い関係性へと変化するのではなく、深い関係性を希求する者もいれば必要最低限の関わりを取ろうとする者など、多様である可能性が示唆された。
2. 関係性の発達的な変化においては、関係性ステイタスという新たな指標を用いることで、学年の要因では見られなかった‘グループ’に対する認識に差が見られ、学年以外で関係性の深まりを示す指標を用いることの有効性が示された。本研究で用いた関係性ステイタスは、その1つの試みであり、探索的な段階である。しかし、‘グループ’への積極的関与と過去に‘グループ’において葛藤をした経験という2点から関係性の発達を捉えるという新たな観点は、これまでの発達理論では説明できない現代青年の関係性を捉える上で、有効であると考えられる。
3. ‘グループ’において良好な関係性を維持するためには、自分の思いや考えを主張することと状況に応じて自分の欲求を抑制することの双方の姿勢を持った付き合い方であることが示されたが、このようなスキルは単に自己主張や自己抑制といった社会場面において必要なレベルのスキルのみならず、回避や欺瞞的同調といった相手と距離を取ったり関係を収束させるような対人スキルや、相手を嫌な気持ちにさせることなく自分の意思をうまく伝えるような処世術にも近いスキルであることが示された。それは、‘グループ’というものが、集団としての機能を持つためでもあり、同調圧力や暗黙の集団規範などの上に立ち絶妙なバランスで立ち回ることが必要だからである。円滑な‘グループ’関係に有効なスキルは、男女で違いが見られ、女子では、あえて本音を言わずにその場を取り繕う対人距離化スキルが‘グループ’の関係維持には有効であることが示され、男子においては、自分の意見を主張できることが‘グループ’のポジティブな認識に関連があることが示唆された。男女ともにそれぞれのスキルの行使頻度が学年により上昇することが示され、このような対処スキルを日々の‘グループ’経験によって見出していることが示唆された。

第6節 本論文の意義

これまでの青年期の友人関係においては、1対1の関係性に注目したものが多かった。本研究では、現代の多くの青年が学校生活を共にしている‘グループ’に注目し、‘グループ’をどのように捉え、どのような気持ちを抱きながら毎日を過ごしているのかをより現実に近い形で切り取ろうと試みた。

まず、現代の中学生・高校生の約90%が‘グループ’に所属している(幸本, 2011)現代において、‘グループ’という概念は避けて通れないものである。しかしながら、これまでの友人関係の研究では、1対1の友人関係について調査したものが多く、集団という視点を扱ったものは少なかった。本研究は、‘グループ’という言葉を用いて調査を行ったことに、よりリアルな青年の友達関係を示したという点で意義があったと考える。

友人関係の発達的变化については、具体的な関係性を捉えることはできなかったが、少なくとも中学生から大学性の中に‘グループ’の関係性やそれに伴う‘グループ’に対する認識について、従来の青年期の友人関係の発達的变化の概念だけでは説明できない様相が見られることを示唆した。青年期の友人関係の発達的变化は、落合・佐藤(1998)が調査して以降、詳細に検討されたものはほとんどなかった。本研究は、これまでの発達理論における関係性の変化を再検討する必要性を示したことに意義があると考えている。

また、新たな関係性の発達差の指標として関係性ステータスの作成を試みた点も意義があったと考えている。関係性ステータスは探索的な段階であり、改善の余地が大いにあるといえる。しかしながら、学年の移行とともに関係性が発達するというこれまでの視点から、関係性には個人差も大きく、また、これまで考えられてきた様な発達ばかりでなく、より多様性のある発達を考える必要性を示唆したことに意義があると考えている。

‘グループ’に必要な対処スキルでは、質的調査と量的調査を通し、‘グループ’において有効な対処スキルとして、女子では対人距離化スキルの有効性を示した。これまで、‘グループ’の関係性の変化の背景に見られる個人の心理的な要因については多くの研究蓄積があったが、対人スキルに注目した研究はほとんどなかった。本研究から、‘グループ’関係を円滑にし、自分自身の精神的健康を維持する上で、対人スキルを持っていることが有効であることが示された。‘グループ’における友人関係によって不登校や不適応といった臨床的な問題が少なくない中で、円滑に関係性を維持するために有効な手段の1つとして対人スキルを具体的に示したことに意義があったと考えている。

第7節 本論文の限界と今後の課題

本研究では、青年期の友人関係の発達的な変化がこれまで考えられてきた理論に沿うものであるかどうかを調べ、関係性の変化を捉え直すことを第1の目的としていた。3度の調査から従来の発達理論から想定された差が見られないという結果が得られたが、いくつかの課題も残った。まず、これまで述べられてきた関係性の発達理論は、‘グループ’を想定したものではなく1対1の友人関係についての調査であった。一方で、本研究では質問紙に‘グループ’という言葉に記載し、‘グループ’における自分の振る舞いや仲間との関係性をイメージした回答であるといえる。‘グループ’には、集団規範や同調圧力など1対1の友人関係には見られない要因が含まれており、そのために関係性や認識が以前とは同様ではなかった可能性も考えられる。この点については、今後調査をする上で留意する必要があるだろう。

また、関係性ステータスを用いての比較により注目すべき結果がいくつか出たものの、この関係性ステータスがまだ探索的な段階であり、改良の余地が大いにあると言える。まずは、Marcia(1966)がアイデンティティの発達に必須と述べる積極的関与と危機という2つの特徴が、友人関係の発達的な変化においても必要な事項であるかどうかを実証的に検討する必要がある。そして、本研究の結果においては、中学生において達成群に該当する者もいれば大学生で非関与群にいる者もおり個人差が非常に大きかった。そうであるならば、重要なのは達成群にいる中学生がこれまでどのような友人関係の経験をしてきたのか、そこに至るまでにどのようなプロセスがあったのかといった変化の過程である。今後、そのような変化の過程を明らかにすることで、関係性ステータスのランク付け(達成群が最も関係性が深いなど)が妥当であるか等を検討する必要がある。方法論的な点については、人格的意味づけを捉えられなかったことが大きな課題として残った。関係性の変化を捉えるにあたり、友達を人格的レベルから意味づけているかどうかの違いは大きな違いである。一方で、中学生や高校生の段階では自分が友達を人格的に意味づけているかどうかを客観的に判断することが難しいといった限界も感じられた。今後は、Marcia(1966)が行ったような面接調査や宇都宮(1993)の用いたSCTによるデータの収集などの方法論を含め、客観的視点から判定をするための方法論を検討する必要があるだろう。

‘グループ’において必要な対処スキルについては、女子では対人距離化スキルを使用することで自分と‘グループ’との距離をうまく取りながら関わっていることが示唆

されたが、今回調査を行った‘グループ’への認識には影響がない結果となった。この距離化スキルが‘グループ’において有効であるかどうかを明確にするために、距離化スキルの有無や行使頻度と当人の心理適応や精神的健康など、別の尺度との関連を調べる必要がある。そうすることによって、対処スキルの有効性がより明確になると考えられる。

引用文献

- 阿部真里子. (1990). *思春期女子の登校拒否—学校カウンセラーとしての関わり*. 児童心理. 6月号臨時増刊. 東京: 金子書房. (pp.119-123).
- 天野隆雄. (1975). *女性性との心理とその教育*. 東京: 早稲田大学出版部.
- 天野隆雄. (1985). *女子生徒のインフォーマル・グループ*. *アジア文化*, **10**, 87-95.
- 浅野智彦. (2006). 若者の現在. 浅野智彦 (編), *検証・若者の変貌—失われた10年の後*に一. 東京: 勁草書房. (pp.233-260).
- Blos,P. 野沢栄司訳. (1971). *青年期の精神医学* 東京: 誠心書房 (Blos,P. (1962). *On adolescence*. New York: Free Press.)
- Brown, B.B. (1982). The extent and effects of peer pressure among high school student: A retrospective analysis. *Journal of Youth and adolescence*, **11**, 121-133.
- Coleman, J.C.(1980). *Friendship and the peer group in adolescence*. In J. Anderson. (Ed.), *Handbook of adolescent psychology*. : New York: John Wiley & Sons. (pp.409-431).
- 土井隆義. (2004). 「個性」を煽られる子どもたち—親密権の変容を考える—. 岩波ブックレット 633. 東京: 岩波書店.
- 土井隆義. (2009). *友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル*. 東京: 筑摩書房.
- 榎本淳子. (1999). 青年期における友人との活動に対する感情の発達的变化. *教育心理学研究*, **47**, 180-190.
- 藤川大祐. (2008). *ケータイ世界の子どもたち*. 東京: 講談社.
- 福重 清. (2006). 若者の友人関係はどうなっているのか. 浅野智彦 (編), *検証・若者の変貌—失われた10年の後に一*. (pp.115-150). 東京: 勁草書房.
- Furman, W. & Burchmester, D. (1992). Age and sex differences in perceptions of networks of personal relationships. *Child development*. **63**. 103-115.
- Hall, W. E. & Gaeddert, W. (1960). Social skills and their relationship to scholastic achievement. *Journal of Genetic Psychology*. **96**. 269-273.
- 服部香子. (2006). 女子中学生の同性友人「グループ」に関する研究 — ‘グループ’におけるつきあい方と孤独感に注目して—. *名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学*. **53**, 248-249

- 原田智佳・古澤寛之・吉田俊和. (2008). 社会的自己制御(Social Self-Regulation)尺度の作成 —妥当性の検討および行動抑制/行動接近システム・実行注意制御との関連. *パーソナリティ研究*, **17(1)**, 82-94
- 保坂 亨・岡村達也. (1986). キャンパス・エンカウンター ‘グループ’ の発達の・治療的意義の検討. *心理臨床学研究*, **4**, 15-26.
- 保坂 亨. (2010). *いま, 思春期を問い直す—グレイゾーンに立つ子どもたち*. 東京: 東京大学出版会.
- 保坂一己. (1993). 中学・高校のスクールカウンセラーのあり方について—私立女子高での経験を振り返って *東京大学教育学部心理教育相談紀要*, **15**, 87-95.
- 堀田香織. (2000). 回想の中のいじめ体験の諸相. *東京大学大学院教育学研究科附属学校臨床総合教育研究センター学校教育臨床研究*, **1 (1)**, 7-15.
- 池田曜子. (2012). 大学生の友人関係における携帯電話利用の影響: 生徒たちの対人関係, コミュニケーションの在り方 *奈良女子大学文学部研究教育年報*, **9**, 35-39.
- 井上はるか・伊藤裕子. (2007). 中学生の友人グループと学校適応. *聖徳大学児童学研究紀要*, **9**, 27-33
- 石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平. (2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連 *発達心理学研究*, **20(2)**, 125-133.
- Janis, I.L. (1982). *Groupthink. Psychological studies of policy decisions and fiascoes*. Boston: Houghton Mifflin.
- 柏木恵子. (1988). *幼児期における自己の発達—行動の自己制御機能を中心に—*. 東京: 東京大学出版会
- 加藤 厚. (1983). 大学生における同一性の諸相とその構造. *教育心理学研究*, **31**, 292-302.
- Kirchler, E., Palmonari, A., & Pombeni, M. A.. (1993). Developmental tasks and adolescents' relationships with their peers and their family. In S. Jackson, & H. Rodriguez-Tome(Eds.), *Adolescence and its social worlds*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates
- 小石寛文. (1995). *人間関係の発達心理学 3 「児童期の人間関係」*. 東京: 培風館.
- 國枝幹子・古橋啓介. (2006). 児童期における友人関係の発達. *福岡県立大学人間社会学部紀要*, **15(1)**, 105-118.

- 高坂康雅. (2008). 自己の重要領域から見た青年期における劣等感の発達的变化. *教育心理学研究*, **56**, 218-229.
- 高坂康雅. (2010). 青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向-青年期における変化と友人関係満足度との関連-. *教育心理学研究* **58(3)**, 338-347.
- 釘原直樹. (2011). *‘グループ’・ダイナミックス - 集団と群集の心理学*. 東京：有斐閣.
- 町沢静夫. (1992). *成熟できない若者たち*. 東京：講談社.
- 牧野幸志. (2012). 青年期におけるコミュニケーション・スキルと精神的健康 -同性・異性友人に対するコミュニケーション・スキルと精神的健康との関連-. *経営情報研究*, **20(2)**, 35-47.
- 松井 豊. (1990). 友人関係の機能. 齋藤耕二・菊池章夫 (編著). *社会科の心理学ハンドブック-人間形成と社会と文化-*. 東京：川島書店. (pp.283-296)
- 松元泰儀. (1997). 人間関係の変化. 加藤隆勝・高木秀明 (編). *青年心理学概論*. 東京：誠信書房. (pp.98-143).
- Marcia, J.E. 1966. Development and Validation of ego-identity status. *Journal of Personality & Social psychology*, **3**. 551-558.
- 宮本信也. (2005). 注意欠陥／多動性障害のある子ども. *小児科臨床*, **58**. 717-723.
- 宮下一博. (1995). 青年期の同世代関係 落合良行・楠見孝 (編). *講座生涯発達心理学4 自己への問い直し-青年期*. (pp.155-184). 東京：金子書房.
- 水野邦夫. (2003). どの社会的スキルが良好な対人関係の形成・維持に関連するか. *聖泉論集*, **14**. 55-59.
- 三好智子. (1998). 女子友人‘グループ’に関する一研究-対‘グループ’態度の評価尺度作成の試み *臨床教育センター紀要*, **2**, 85-94
- 三好智子. (1999). 女子友人‘グループ’についての理論的考察. *京都大学大学院教育学研究科紀要*, **45**. 353-361
- 三好智子. (2001). ”個“-“集団”間葛藤の観点から見た青年期後期の自我同一性の形成過程. *心理学研究*, **72**. 298-306.
- 三好智子. (2002). 女子短大生の同性友人‘グループ’との関わりにおける自己の個別性のあり方-イメージ画を用いた検討-. *青年心理学研究*, **14**, 1-19.
- 用松敏子・坂中正義. (2004). 日本におけるアサーション研究に関する展望. *福岡教育大学紀要*, **53**. 219-226.

- 文部科学省. (2015). 平成 25 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について. (pp.22-52).
- 森口 朗. (2007). いじめの構造. 東京：新潮社.
- 永沢幸七. (1969). 女子大学生の informal group の発生要因について(その 1)：YG 性格検査を中心手続きとして. 東京家政学院大学紀要, 9. 17-27.
- 長沼恭子・落合良行. (1998). 同性の友達との付き合い方から見た青年期の友人関係. 青年心理学研究, 10, 35-47.
- 中村泰子. (1998). 女の子のトラブル解読法—思春期の普通の女の子の生活と心— 月刊生徒指導, 1. 12-17.
- 難波久美子. (2005). 青年にとって仲間とは何か：対人関係における位置づけと友だち・親友との比較から. 発達心理学研究, 16(3). 276-285.
- 西平直喜 (1973). 青年心理学. 塚田毅(シリーズ編). 現代心理学叢書 7. 東京：共立出版.
- 西平直喜 (1990). 成人になること—生育史心理学から— 東京：東京大学出版会.
- 西村 馨. (2007). 小学生に対する心理教育グループの課題, デザイン, 実践. 国際基督教大学学報. I-A, 教育研究, 49. 79-89.
- 大坊郁夫. (2005). 第 6 章 社会的スキル・トレーニングの効果性の検討 大坊郁夫(編著). 社会的スキル向上を目指す対人コミュニケーション(pp. 135-155). 京都：ナカニシヤ出版.
- 大坊郁夫・堀毛一也・相川充・安藤清志・大竹恵子. (2009). Well-being を目指す社会心理学の役割と課題. 対人社会心理学研究, 9. 1-32.
- 大嶽さと子(2007). 「ひとりぼっち回避規範」が中学生女子の対人関係に及ぼす影響—面接データにもとづく女子‘グループ’の事例的考察—. カウンセリング研究, 40(3). 267-277.
- 落合良行・佐藤有耕. (1996). 青年期における友達との付き合い方の発達的变化. 教育心理学研究, 44. 55-65.
- 岡田 努. (1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について. 教育心理学研究, 47. 432-439.
- 岡田 努. (2016). 青年期の友人関係における現代性とは何か. 発達心理学研究, 27(4). 346-356.
- 岡村達也. (1998). 親からの精神的分離. 古屋健治他 (編). 青年期カウンセリング入門—青年の危機と発達課題— (pp.209-221). 東京：川島書店.

- Santor, D.A., & Messervey, D., & Kusumakar, V.(2000). Measuring Peer Pressure, Popularity, and Conformity in Adolescent Boys and Girls: Predicting School Performance, Sexual Attitudes, and Substance Abuse. *Journal of Youth and Adolescence*, **29**, 163-182.
- 斉藤憲司. (1986). 思春期における友人関係の発達的变化. 東京大学大学院教育学研究科修士論文(未公刊). 東京: 東京大学.
- 斎藤 環. (2011). キャラクター精神分析. 東京: 筑摩書房.
- Sullivan, H. S. (1953) . *The Interpersonal theory of psychiatry*. 中井久夫他訳 (1990). 精神医学は対人関係論である. 東京: みすず書房.
- 佐藤有耕. (1995). 高校生女子が学校生活において‘グループ’に所属する理由の分析. *神戸大学発達科学部研究紀要*, **3**. 11-20
- 佐藤有耕. (2011). 思春期の子どもたちの友人‘グループ’. 思春期のこころ—思春期の心理と変化 友人関係が大きく変化するとき—(pp.56-61). *児童心理*. **65**(15), 東京: 金子書房.
- 須藤春佳. (2014). 友人‘グループ’を通してみる思春期・青年期の友人関係. *神戸女学院大学論集*, **61** (1). 113-126.
- 菅佐和子. (1988). 思春期女性の心理療法. 大阪: 創元社.
- 住本克彦. (1998). 人間関係のもつれから不登校になった子ども達の事例を通しての一考察. *県立但馬やまびこの郷研究紀要*, 創刊号. 17-24.
- 鈴木翔. (2012). 教室内(スクール)カースト. 東京: 光文社新書.
- 高井範子. (2008). 青年期における人間関係の悩みに関する検討. *太成学院大学紀要*. **10**(27), 85-95.
- 竹内常一. (1987). 子どもの自分くずしと自分づくり. 東京大学出版会.
- 竹内慶至.(2009). 友人関係は希薄化しているのか 友枝敏雄(編). *現代の高校生は何を考えているか—意識調査の計量分析をとおして—*. 世界思想社. (pp.38-60).
- 碓井真史. (2000). 人間関係の心理. 岡村一成・浮谷秀一(編著). *青年心理学トゥデイ* (pp.115-130)
- ヴィヒャルト千佳こ. (1999). 先生に見えない女の子たち. *月刊生徒指導*, **1**. 18-21.
- 幸本香奈. (2011). 中学生・高校生の‘グループ’関係. 白百合女子大学大学院文学研究科発達心理学専攻修士論文(未公刊). 東京: 白百合女子大学.

- 幸本香奈. (2013). 高校生女子の友人関係—‘グループ’の良い点・悪い点と‘グループ’を通して学んだこと—. *日本発達心理学会第25回大会論文集*.
- 和田 実. (1993). 同性友人関係：その性および性役割タイプによる差異. *社会心理学研究*, **8**, 67-75.
- 和田 実. (1996). 同性の友人関係と年齢・性・性役割同一性との関連. *心理学研究*, **67**, 232-237.

付記

本論文の一部は、下記の論文及び学会で発表したものである。また、本論文の研究の一部は、2013年度白百合女子大学博士課程学生研究奨励金を受けて行った。

【第1章】

2015年 「中学生・高校生の友人‘グループ’：‘グループ’の果たす役割と‘グループ’関係の発達的变化についての考察」.生涯発達心理学研究(白百合女子大学生涯発達研究教育センター紀要), 7, 27-37

【第3章】

2009年 「中学生のグループ関係」. 生涯発達心理学研究(白百合女子大学生涯発達研究教育センター紀要), 1, 84-93.

2012年 第23回発達心理学会ポスター発表
「中学生のグループ関係—個人の性格と友達との付き合い方がグループ関係の性質に及ぼす影響—」. 日本発達心理学会第24回大会論文集

2014年 第25回発達心理学会ポスター発表
「中学生の友人グループ—グループに所属している人と所属していない人の性格・友達付き合いの違いの検討—」. 日本発達心理学会第26回大会論文集

【第5章】

2013年 第24回発達心理学会ポスター発表
「高校生女子の友人関係—‘グループ’の良い点・悪い点と‘グループ’を通して学んだこと—」. 日本発達心理学会第25回大会論文集

要約

青年期の友人関係は、この時期に何より大事な人間関係だといわれている。これまでの研究から、青年期の友人との関係性は同質性を重視した浅い関係性から個別性を認め合った深い関係性へと変化することが述べられてきた。一方で、現代青年の関係性は従来の発達理論とは同様でないことが指摘されているが、関係性の変化について実証的に調べた研究は2000年以降ほとんど見られない。また、中学生や高校生の学校生活では、‘グループ’と呼ばれる集団的友人関係がよく見られる。昨今、中学生や高校生が‘グループ’の関係性を維持するために過剰に気を遣い、精神的に参ってしまうことが問題視されており、‘グループ’に焦点を当てた研究は臨床的観点からも重要であるが、これまでの友人関係に関する研究では‘グループ’を考慮に入れてこなかった。本研究では、青年期の友人関係について、‘グループ’に焦点を当て、現代の中学生・高校生に、これまで述べられてきた友人関係の変化が見られるかどうかを調べることで、良好な‘グループ’関係を維持し、高ストレス状況に陥らないために、どのような対人スキルが有効であるかを明らかにすることの2つを目的として研究を行った。

研究1では、同じ対象者に対して、中学校3年生から高校2年生にかけて毎年質問紙調査を行った。その結果、‘グループ’における友達との付き合い方や、‘グループ’に対する認識については、いずれの学年についても差が見られず、中学生から高校生にかけての時期では、‘グループ’の関係性や認識に違いは見られないことが示され、これまでの知見から想定された結果とは異なる結果であった。近年指摘されているような、青年期の友人関係の発達の变化が以前とは同様でない可能性に加えて、本研究の調査間隔の短さが関係している可能性が考えられ、再検討の必要性について論じた。

友達との付き合い方による‘グループ’認識の違いからは、ある程度自分の思いを表明しつつも場合によっては引くというような、主張と抑制の双方の姿勢が必要であることが示唆され、自分の思いを表明したり場合によっては遠慮したりするようないわば「自己調整」のようなスキルが円滑な‘グループ’関係の維持に有効である可能性が示唆された。

研究2では、‘グループ’に対する認識の学年差を学年の幅を広げて再検討したが、差は見られなかった。従来であれば高校生の年齢で到達するはずの関係性に、現代の高校生はまだ到達せず、関係性の変化が先延ばしになっている可能性が示唆された。

‘グループ’において有効な対処スキルについては、自己の安定性および自己制御スキル

を用いて検討を行った。その結果、女子では自己が安定していることと抑制能力が高いことが、‘グループ’に対するポジティブな認識を高め、ネガティブな認識を減少させる傾向があることが示された。ただし、主張的側面については‘グループ’認識との関連はほとんど見られず、別の観点からの再検討が必要であることが分かった。

研究 3 では、中学生や高校生が‘グループ’経験を通してどのようなことを学んだかを調べることにより、この時期に‘グループ’経験を通して学ぶ対人スキルがどのようなものであるかを探索的に検討した。その結果、‘単に抑制するというよりも、心の中でどう思っているようにとりあえず『合わせておく』ことや、苦手な人や気の合わない人と『距離を置く』ことなどより処世術に近いスキルを学んでいることが明らかとなり、そのような対人スキルを用いて‘グループ’への認識を検討する必要性が示された。また、主張するスキルについても、単に自己主張が強いかわ弱いかではなく、自分の意見をうまく伝えるスキルのような他の概念を用いての再検討の必要性が示された。

研究 4 では、まず、‘グループ’に対する認識について、大学生まで学年の幅を広げて再検討を行った。その結果、中学生から大学生にかけて男女ともに変化が見られず、青年期の‘グループ’の友達との関わり方や‘グループ’に対する認識は学年差よりも個人差の方が大きい可能性が示され、学年以外の指標で発達差を示す必要性があると考えた。‘グループ’の対処スキルについては、アサーションスキルと対人距離化スキルを用いて検討を行った。その結果、男子ではアサーションスキルが、女子では対人距離化スキルが、‘グループ’の関係維持に有効なスキルであることが明らかとなった。

研究 5 では、学年以外の指標で友達との関係性を示す指標として「関係性ステイタス」の作成を試みた。その結果、研究 1～4 で示された通り、学年に関係なく多くの青年が表面的な関係性に留まっていることが示された。一方、中学生の段階ですでに関係性達成群に該当する者や大学生において非関与群に該当する者など個人差も大きく、皆が一様の道筋で関係性を深めていくような変化ではなく、いくつかの発達のパターンがある可能性が示唆された。‘グループ’の対処スキルとの関連については、対人距離化スキルは、「‘グループ’にはいたい、深くは関わりたくない」段階においてよく使われ、葛藤を乗り越え、「自分のことを分かかってほしい。相手と親密になりたい」段階においては接近化スキルのように積極的に自己を開示しようとするスキルがよく使われていることが明らかとなった。

総合考察では、各研究で得られた知見から、青年期の友人関係における関係性ステイタスと‘グループ’対処スキルの位置づけについて論じた。本研究で示した関係性ステイタ

スとは、‘グループ’において、他者に嫌われたくない気持ちと自分らしさを出したいという気持ちとの葛藤を克服していくプロセスである。葛藤克服のプロセスは、学年の移行と共に決まったパターンで変化するのではなく、青年期を通して表面的な関係性にとどまっている人もいれば、表面的関係性から、模索の時期を経て深い関係性へと変化する人、あるいは、表面的関係性から模索したが、他者との関わりを回避する方向へ変化した人、また、青年期を通して他者との関わりを回避する傾向が続く人のように、いくつかのパターンがある可能性が示された。そして、‘グループ’対処スキルは、模索の時期や回避的な関わりをするときには距離化スキルが、深い関係性へと進むときには対人接近化スキルがそれぞれ多く使われるように、葛藤を克服するプロセスの時々において、関係維持に有効なものであり、対処スキルを身に付けることにより、学校適応や精神的健康に良い影響をもたらすことが示唆された。

付録

研究 1

私は、心理学を勉強している大学 3 年生です。現在、中学生の同性友人関係についての調査を行っており、その資料とするため、皆様の考えをおうかがいしたいと思います。アンケートの結果はコンピュータで処理し、データは適切な方法で処分します。無記名ですので、どうかありのままお答えください。ご協力をよろしくお願いいたします。

白百合女子大学 3 年
幸本 香奈

※記入上の注意

すべての質問において、友人・‘グループ’という言葉が出てきた場合、同性の友人・2人以上の‘グループ’についてです。異性の友人については、ふくめな
いで答えてください

はじめに、性別・年齢・学年を記入して、次ページから続く質問に答えてください。

・性別：1, 男 2, 女

・年齢：() 歳

・学年：() 年

I, ここではあなたの性格についてお聞きします。

次の 20 個の文について、あなたに「よくあてはまる」場合は 4, 「少しあてはまる」場合は 3, 「あまりあてはまらない」場合は 2, 「あてはまらない」場合は 1 を選び、数字を ○ でかこんでください。

よくあてはまる	すこしあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
---------	----------	------------	---------

- | | |
|---------------------------------|---------------|
| 1, 話好きである | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 2, 他人の苦しみがよくわかる | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 3, 注目のまともになりたい | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 4, 多くの点で人にひけめを感じる | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 5, 人と広く付き合うほうだ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 6, たのまれごとは断りきれない | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 7, 人前で自分の経験を話すのが好きだ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 8, 意見ははっきりと述べるほうだ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 9, 自分はわりと人気者だ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 10, 人のために自分がぎせいになるのはいやだ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 11, 有名人と友達になりたい | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 12, 何かを決める時, 自分 1 人ではなかなか決められない | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 13, よく人から相談を持ちかけられる | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 14, 他人の世話をするのが好きだ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 15, 人が自分をみとめてくれないと不安だ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 16, 自分はつまらない人間だ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 17, 誰とでも気さくに話せる | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 18, 相手の気持ちになって考えるようにしている | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 19, ちやほやされるのが好きだ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 20, 人の言いなりになってしまうことがよくある | 4 - 3 - 2 - 1 |

Ⅱ、ここでは携帯電話についてお聞きします。

①携帯電話を持っていますか？あてはまる方の数字を○でかこんで下さい。

- 1, 持っている 2, 持っていない

これより下の質問は、①で持っていると答えた人のみ答えてください。①で持っていないと答えた人は、Ⅲの質問に進んでください。

②携帯電話をいつから持ち始めましたか？

- 1, 小学校 1,2,3 年 2, 小学校 4,5,6 年 3, 中学 1 年 4, 中学 2 年 5, 中学 3 年

③1 ヶ月の平均使用量はどれくらいですか？あてはまるものの数字を○でかこんで下さい。

- 1, 3000 円未満 2, 3000 円～6000 円 3, 6000 円～10000 円 4, 10000 円以上

④1 日にメールを何通くらい送信しますか？あてはまるものの数字を○でかこんで下さい。

- 1, 10 通未満 2, 10 通～50 通 3, 50 通～100 通 4, 100 通以上

⑤アドレス帳に電話番号やメールアドレスがほしい何件入っていますか？あてはまるものの数字を○でかこんで下さい。

- 1, 50 件未満 2, 50 件～100 件 3, 100 件～150 件 4, 150 件以上

⑥携帯電話を何に 1 番使っていますか？使っている順に 1～4 の番号を書いて下さい。

- 通話 () メール () ウェブ () ゲーム ()

次の⑦～⑩の文について、あなたに「よくあてはまる」場合は 4, 「少しあてはまる」場合は 3, 「あまりあてはまらない」場合は 2, 「あてはまらない」場合は 1 を選び、数字を○でかこんでください。

よくあてはまる	すこしあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
---------	----------	------------	---------

⑦メールの返信はかならずする

4 - 3 - 2 - 1

⑧誰かと連絡をとっていないと不安になる

4 - 3 - 2 - 1

⑨メールの返信がすぐこないと不安になる

4 - 3 - 2 - 1

⑩携帯に依存していると思う

4 - 3 - 2 - 1

Ⅲ、ここではあなたの友人関係についてお聞きします。

次の14個の文について、あなたに「よくあてはまる」場合は4、「少しあてはまる」場合は3、「あまりあてはまらない」場合は2、「あてはまらない」場合は1を選び、数字を○でかこんでください。

よくあてはまる	すこしあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
---------	----------	------------	---------

- | | | | | |
|--------------------------------|---|---|---|---|
| 1, 友達にきらわれないように行動している | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2, 友達に甘えたくない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3, 友達を傷付けてはいないかと心配になる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4, 友達とは深くかかわらないようにしている | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5, 共通のひみつがあるからこそ、友達づきあいが深まっていく | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 6, 友達には心を開いて付き合っている | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 7, みんなに好かれていたい | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 8, 友達にいやな思いをさせないように気を使っている | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 9, 周りの友達みんなに合わせようと気をくばっている | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 10, 友達といるより、一人でいるほうが気楽でいい | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 11, いったん友達になったら、できるだけ長く付き合いたい | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 12, 友達とは何でも本音で話し合うようにしている | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 13, 友達とはいつも一緒にいないとうまくやっていけない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 14, 友達にすぐたよろうとする | 4 | 3 | 2 | 1 |

IV, 次に, 友人 ‘グループ’ のことについてお聞きします。

問 1, あなたは決まった同性の 2 人以上の友人 ‘グループ’ に属していますか? あてはまる方の数字を ○でかこんでください。

- 1, はい 2, いいえ

問 2, 以下の質問は, 問 1 で ‘はい’ と答えた人 (決まった同性友人 ‘グループ’ に属している場合) のみ答えてください。次の 27 個の文について, あなたに「よくあてはまる」場合は 4, 「少しあてはまる」場合は 3, 「あまりあてはまらない」場合は 2, 「あてはまらない」場合は 1 を選び, 数字を ○でかこんでください。

よくあてはまる	すこしあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
---------	----------	------------	---------

- | | |
|--|---------------|
| 1, ‘グループ’ の人がいるから学校が楽しい | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 2, 今の ‘グループ’ 関係に満足している | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 3, ‘グループ’ の人たちと離れて一人で行動するのはさみしい | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 4, ‘グループ’ の人といつも一緒にいるとつかれる | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 5, 一人でいるよりは ‘グループ’ の人と一緒にいたほうがいい | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 6, ‘グループ’ に他の ‘グループ’ の人が入ってくるとなんとなくやりにくい | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 7, ‘グループ’ の人とつねに連絡を取っていないと不安だ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 8, ‘グループ’ の人と一緒にいると, 自分らしさがうしなわれる気がする | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 9, ‘グループ’ 行動をめんどうだと感じることもある | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 10, ‘グループ’ からはずされるのではないかと不安を感じることもある | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 11, 他の ‘グループ’ をうらやましく思うことがある | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 12, 今の ‘グループ’ にいることで, 得をしていると感じる | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 13, ‘グループ’ にいると, 居場所がない不安感を感じなくてすむ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 14, ‘グループ’ の人に対して, 気を使わず気楽にいらられる | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 15, クラス内のほかの ‘グループ’ の人とも交流がある | 4 - 3 - 2 - 1 |

よくあてはまる	すこしあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
---------	----------	------------	---------

- | | | | | |
|--------------------------------------|---|---|---|---|
| 16, ‘グループ’の人となやみ事を相談しあうことができる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 17, 気の合わない人を‘グループ’からはずそうとすることがある | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 18, ‘グループ’の人が一緒にいてくれないと一人では行動できない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 19, 他の‘グループ’の人たちと仲良くできない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 20, ‘グループ’の人全員が仲良しである | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 21, ‘グループ’の中にリーダー的な存在の人がいる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 22, ‘グループ’の人とは距離を置いて行動している | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 23, 学校内で一人で行動することはほとんどない | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 24, ‘グループ’の人の行動に合わせるがよくある | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 25, ‘グループ’の中でも自分の意見はちゃんとと言える | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 26, ‘グループ’の人からのメールは必ず返信する | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 27, ‘グループ’で固まっていて、他の‘グループ’の人と話す機会がない | 4 | 3 | 2 | 1 |

ご協力ありがとうございました。

研究 1

私は、心理学を勉強している大学4年生です。現在、高校生の同性友人関係についての調査を行っており、その資料とするため、皆様の考えをおうかがいしたいと思います。アンケートの結果はコンピュータで処理し、データは適切な方法で処分します。無記名ですので、どうかありのままお答えください。ご協力をよろしくお願いいたします。

白百合女子大学4年
幸本 香奈

※記入上の注意

すべての質問において、友人・‘グループ’という言葉が出てきた場合、同性の友人・2人以上の‘グループ’についてです。異性の友人については、ふくめな
いで答えてください

はじめに、性別・年齢・学年を記入して、次ページから続く質問に答えてください。

・性別：1, 男 2, 女

・年齢：() 歳

・学年：() 年

I, ここではあなたの性格についてお聞きします。

次の 20 個の文について, あなたに「よくあてはまる」場合は 4, 「少しあてはまる」場合は 3, 「あまりあてはまらない」場合は 2, 「あてはまらない」場合は 1 を選び, 数字を○でかこんでください。

よくあてはまる	すこしあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
---------	----------	------------	---------

- | | |
|---------------------------------|---------------|
| 1, 話好きである | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 2, 他人の苦しみがよくわかる | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 3, 注目のまともになりたい | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 4, 多くの点で人より劣っていると感じる | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 5, 人と広く付き合うほうだ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 6, たのまれごととは断りきれない | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 7, 人前で自分の経験を話すのが好きだ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 8, 意見ははっきりと述べるほうだ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 9, 自分はわりと人気者だ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 10, 人のために自分がぎせいになるのはいやだ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 11, 有名人と友達になりたい | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 12, 何かを決める時, 自分 1 人ではなかなか決められない | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 13, よく人から相談を持ちかけられる | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 14, 他人の世話をするのが好きだ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 15, 人が自分をみとめてくれないと不安だ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 16, 自分つまらない人間だ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 17, 誰とでも気さくに話せる | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 18, 相手の気持ちになって考えるようにしている | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 19, ちやほやされるのが好きだ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 20, 人の言いなりになってしまうことがよくある | 4 - 3 - 2 - 1 |

II, ここでは携帯電話についてお聞きします。

①携帯電話を持っていますか？あてはまる方の数字を○でかこんで下さい。

- 1, 持っている 2, 持っていない

これより下の質問は、①で持っていると答えた人のみ答えてください。①で持っていないと答えた人は、Ⅲの質問に進んでください。

②中学の頃とくらべて、1ヶ月の使用料はどうになりましたか？あてはまるものの数字を○でかこんでください。

- 1, 増えた 2, 減った 3, 変わらない 4, 中学の頃は持っていなかった

③中学の頃とくらべて、1日のメールの送信量はどくなりましたか？あてはまるものの数字を○でかこんで下さい。

- 1, 増えた 2, 減った 3, 変わらない 4, 中学の頃は持っていなかった

④中学の頃とくらべて、アドレス帳に入っている電話番号やメールアドレスの件数はどうになりましたか？あてはまるものの数字を○でかこんで下さい。

- 1, 増えた 2, 減った 3, 変わらない 4, 中学の頃は持っていなかった

次の⑤～⑧の文について、あなたに「よくあてはまる」場合は4、「少しあてはまる」場合は3、「あまりあてはまらない」場合は2、「あてはまらない」場合は1を選び、数字を○でかこんでください。

よくあてはまる	すこしあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
---------	----------	------------	---------

⑤ メール返信はかならずする

4 - 3 - 2 - 1

⑥ 誰かと連絡をとっていないと不安になる

4 - 3 - 2 - 1

⑦ メール返信がすぐこないと不安になる

4 - 3 - 2 - 1

⑧ 携帯に依存していると思う

4 - 3 - 2 - 1

Ⅲ、ここではあなたの友人関係についてお聞きします。

次の14個の文について、あなたに「よくあてはまる」場合は4、「少しあてはまる」場合は3、「あまりあてはまらない」場合は2、「あてはまらない」場合は1を選び、数字を○でかこんでください。

よくあてはまる	すこしあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
---------	----------	------------	---------

- | | |
|--------------------------------|---------------|
| 1, 友達にきらわれないように行動している | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 2, 友達に甘えたくない | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 3, 友達を傷付けてはいないかと心配になる | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 4, 友達とは深くかかわらないようにしている | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 5, 共通のひみつがあるからこそ、友達づきあいが深まっていく | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 6, 友達には心を開いて付き合っている | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 7, みんなに好かれていたい | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 8, 友達にいやな思いをさせないように気を使っている | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 9, 周りの友達みんなに合わせようと気をくばっている | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 10, 友達といるより、一人でいるほうが気楽でいい | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 11, いったん友達になったら、できるだけ長く付き合いたい | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 12, 友達とは何でも本音で話し合うようにしている | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 13, 友達とはいつも一緒にいないとうまくやっていけない | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 14, 友達にすぐたよろうとする | 4 - 3 - 2 - 1 |

IV, 次に, 友人 ‘グループ’ についてお聞きします。

問 1, あなたは決まった同性の 2 人以上の友人 ‘グループ’ に属していますか? あてはまる方の数字を ○ でかこんでください。

- 1, はい 2, いいえ

問 2, 以下の質問は, 問 1 で ‘はい’ と答えた人 (決まった同性友人 ‘グループ’ に属している場合) のみ答えてください。次の 30 個の文について, あなたに「よくあてはまる」場合は 4, 「少しあてはまる」場合は 3, 「あまりあてはまらない」場合は 2, 「あてはまらない」場合は 1 を選び, 数字を ○ でかこんでください。尚, 問 1 で ‘いいえ’ と答えた人はこれで終わりです。

よくあてはまる	すこしあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
---------	----------	------------	---------

- | | | | | |
|--|---|---|---|---|
| 1, ‘グループ’ の人がいるから学校が楽しい | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2, 今の ‘グループ’ 関係に満足している | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3, ‘グループ’ の人たちと離れて一人で行動するのはさみしい | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4, ‘グループ’ の人といつも一緒にいるとつかれる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5, 一人でいるよりは ‘グループ’ の人と一緒にいたほうがいい | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 6, ‘グループ’ に他の ‘グループ’ の人が入ってくるとなんとなくやりにくい | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 7, ‘グループ’ の人とつねに連絡を取っていないと不安だ | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 8, ‘グループ’ の人と一緒にいると, 自分らしさがうしなわれる気がする | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 9, ‘グループ’ 行動をめんどうだと感じることもある | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 10, ‘グループ’ からはずされるのではないかと不安を感じることもある | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 11, 他の ‘グループ’ をうらやましく思うことがある | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 12, 今の ‘グループ’ にいることで, 得をしていると感じる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 13, ‘グループ’ にいると, 居場所がない不安感を感じなくてすむ | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 14, ‘グループ’ の人に対して, 気を使わず気楽にいらられる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 15, クラス内のほかの ‘グループ’ の人とも交流がある | 4 | 3 | 2 | 1 |

よくあてはまる	すこしあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
---------	----------	------------	---------

- 16, ‘グループ’の人となやみ事を相談しあうことができる 4 - 3 - 2 - 1
- 17, 気の合わない人を‘グループ’からはずそうとすることがある 4 - 3 - 2 - 1
- 18, ‘グループ’の人が一緒にいてくれないと一人では行動できない 4 - 3 - 2 - 1
- 19, 他の‘グループ’の人たちと仲良くできない 4 - 3 - 2 - 1
- 20, ‘グループ’の人全員が仲良しである 4 - 3 - 2 - 1
- 21, ‘グループ’の中にリーダー的な存在の人がいる 4 - 3 - 2 - 1
- 22, ‘グループ’の人とは距離を置いて行動している 4 - 3 - 2 - 1
- 23, 学校内で一人で行動することはほとんどない 4 - 3 - 2 - 1
- 24, ‘グループ’の人の行動に合わせるがよくある 4 - 3 - 2 - 1
- 25, ‘グループ’の中でも自分の意見はちゃんとと言える 4 - 3 - 2 - 1
- 26, ‘グループ’の人からのメールは必ず返信する 4 - 3 - 2 - 1
- 27, ‘グループ’で固まっていて、他の‘グループ’の人と話す機会がない 4 - 3 - 2 - 1

問3, 現在あなたが所属している‘グループ’の友達と仲良くなったきっかけは何ですか?
例を参考にして書いてください。

例)部活が一緒だったから。席が近かったから。など

ご協力ありがとうございました。

研究 1

私は、心理学を勉強している大学院生です。現在、高校生の同性友人関係についての調査を行っており、その資料とするため、皆様の考えをおうかがいしたいと思います。アンケートの結果はコンピュータで処理し、データは適切な方法で処分します。無記名ですので、どうかありのままお答えください。

ご協力をよろしくお願いいたします。

白百合女子大学大学院 修士課程 1年

幸本 香奈

※記入上の注意

すべての質問において、友人・‘グループ’という言葉が出てきた場合、同性の友人・2人以上の‘グループ’についてです。異性の友人については、ふくめないで答えてください

はじめに、性別・年齢・学年を記入して、次ページから続く質問に答えてください。

・性別：1, 男 2, 女

・年齢：() 歳

・学年：() 年

I, ここではあなたの性格についてお聞きします。

次の 20 個の文について, あなたに「よくあてはまる」場合は 4, 「少しあてはまる」場合は 3, 「あまりあてはまらない」場合は 2, 「あてはまらない」場合は 1 を選び, 数字を○でかこんでください。

よくあてはまる	すこしあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
---------	----------	------------	---------

- | | |
|---------------------------------|---------------|
| 1, 話好きである | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 2, 他人の苦しみがよくわかる | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 3, 注目のまともになりたい | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 4, 多くの点で人より劣っていると感じる | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 5, 人と広く付き合うほうだ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 6, たのまれごととは断りきれない | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 7, 人前で自分の経験を話すのが好きだ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 8, 意見ははっきりと述べるほうだ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 9, 自分はわりと人気者だ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 10, 人のために自分がぎせいになるのはいやだ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 11, 有名人と友達になりたい | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 12, 何かを決める時, 自分 1 人ではなかなか決められない | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 13, よく人から相談を持ちかけられる | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 14, 他人の世話をするのが好きだ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 15, 人が自分をみとめてくれないと不安だ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 16, 自分つまらない人間だ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 17, 誰とでも気さくに話せる | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 18, 相手の気持ちになって考えるようにしている | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 19, ちやほやされるのが好きだ | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 20, 人の言いなりになってしまうことがよくある | 4 - 3 - 2 - 1 |

II, ここではあなたの友達付き合いについてお聞きします。

次の文について、あなたに「よくあてはまる」場合は4, 「少しあてはまる」場合は3, 「あまりあてはまらない」場合は2, 「あてはまらない」場合は1を選び, 数字を○でかこんでください。

よくあてはまる	すこしあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
---------	----------	------------	---------

- | | |
|---------------------------------|---------------|
| 1, 友達にきらわれないように行動している | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 2, 友達に甘えたくない | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 3, 友達を傷付けてはいないかと心配になる | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 4, 友達とは深くかかわらないようにしている | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 5, 共通のひみつがあるからこそ, 友達づきあいが深まっていく | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 6, 友達には心を開いて付き合っている | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 7, みんなに好かれていたい | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 8, 友達にいやな思いをさせないように気を使っている | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 9, 周りの友達みんなに合わせようと気をくばっている | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 10, 友達といるより, 一人でいるほうが気楽でいい | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 11, いったん友達になったら, できるだけ長く付き合いたい | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 12, 友達とは何でも本音で話し合うようにしている | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 13, 友達とはいつも一緒にいないとうまくやっけていけない | 4 - 3 - 2 - 1 |
| 14, 友達にすぐたよろうとする | 4 - 3 - 2 - 1 |

Ⅲ、次に、友人‘グループ’についてお聞きします。

問1、あなたは決まった同性の2人以上の友人‘グループ’に属していますか？あてはまる方の数字を○でかこんでください。

- 1, はい 2, いいえ

問2、以下の質問は、問1で‘はい’と答えた人（決まった同性友人‘グループ’に属している場合）のみ答えてください。次の文について、あなたに「よくあてはまる」場合は4、「少しあてはまる」場合は3、「あまりあてはまらない」場合は2、「あてはまらない」場合は1を選び、数字を○でかこんでください。尚、問1で‘いいえ’と答えた人は質問Vに進んでください。

よくあてはまる	すこしあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
---------	----------	------------	---------

- | | | | | | | | |
|-------------------------------------|---|---|---|---|---|---|---|
| 1, ‘グループ’の人がいるから学校が楽しい | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 2, 今の‘グループ’関係に満足している | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 3, ‘グループ’の人たちと離れて一人で行動するのはさみしい | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 4, ‘グループ’の人といつも一緒にいるとつかれる | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 5, 一人でいるよりは‘グループ’の人と一緒にいたほうがいい | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 6, ‘グループ’に他のグループの人が入ってくるとなんとなくやりにくい | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 7, ‘グループ’の人とつねに連絡を取っていないと不安だ | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 8, ‘グループ’の人と一緒にいると、自分らしさがうしなわれる気がする | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 9, ‘グループ’行動をめんどうだと感じることもある | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 10, ‘グループ’からはずされるのではないかと不安を感じることもある | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 11, 他の‘グループ’をうらやましく思うことがある | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 12, 今の‘グループ’にいて、得をしていると感じる | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 13, ‘グループ’にいて、居場所がない不安感を感じなくてすむ | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 14, ‘グループ’の人に対して、気を使わず気楽にいられる | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 15, クラス内のほかの‘グループ’の人とも交流がある | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |

よくあてはまる	すこしあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
---------	----------	------------	---------

- 16, ‘グループ’の人となやみ事を相談しあうことができる 4 - 3 - 2 - 1
- 17, 気の合わない人を‘グループ’からはずそうとすることがある 4 - 3 - 2 - 1
- 18, ‘グループ’の人が一緒にいてくれないと一人では行動できない 4 - 3 - 2 - 1
- 19, 他の‘グループ’の人たちと仲良くできない 4 - 3 - 2 - 1
- 20, ‘グループ’の人全員が仲良しである 4 - 3 - 2 - 1

- 21, ‘グループ’の中にリーダー的な存在の人がいる 4 - 3 - 2 - 1
- 22, ‘グループ’の人とは距離を置いて行動している 4 - 3 - 2 - 1
- 23, 学校内で一人で行動することはほとんどない 4 - 3 - 2 - 1
- 24, ‘グループ’の人の行動に合わせるがよくある 4 - 3 - 2 - 1
- 25, ‘グループ’の中でも自分の意見はちゃんと言える 4 - 3 - 2 - 1

- 26, ‘グループ’の人からのメールは必ず返信する 4 - 3 - 2 - 1
- 27, ‘グループ’で固まっていて、他の‘グループ’の人と話す機会がない 4 - 3 - 2 - 1

IV, 次に, ‘グループ’に関するこれまでの経験や考え方についてお聞きします。
 問1, 以下の文について, あなたに「よくあてはまる」場合は4, 「少しあてはまる」場合は3, 「あまりあてはまらない」場合は2, 「あてはまらない」場合は1を選び, 数字を○でかこんで下さい。現在‘グループ’に所属していない人も, 答えられる範囲でお答えください。

よくあてはまる	すこしあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
---------	----------	------------	---------

- 1, 日頃から, ‘グループ’からはずされないように気をつけている 4 - 3 - 2 - 1
- 2, 自分の所属している‘グループ’を自慢したいと思う 4 - 3 - 2 - 1
- 3, ‘グループ’内の行動では, 誰かに合わせていることが多い 4 - 3 - 2 - 1

- 4, 自分の所属する‘グループ’が, 他の人からどう思われているか気になる 4 - 3 - 2 - 1
 5, 自分が‘グループ’の人たちからどう思われているのか気になる 4 - 3 - 2 - 1
 6, 周りから, 「あそこの‘グループ’の人」と思われるのは嫌だ 4 - 3 - 2 - 1

問2, 以下の質問について, 当てはまる番号を○でかこんでください。ただし, 8と9については指示にしたがって答えてください。

- 1, ‘グループ’からはずされたことはありますか?
 1, はい 2, いいえ
- 2, ‘グループ’から誰かをはずしたことはありますか?
 1, はい 2, いいえ
- 3, ‘グループ’を変わったことがありますか?
 1, 変わったことはない 2, はずされて変わった 3, 自分から移った
- 4, ‘グループ’に所属せず, ひとりでもやっていけると思えますか?
 1, 問題なくひとりでやっていける 2, 苦しいがなんとかやっていける 3, やっていける自信がない
- 5, ‘グループ’というものがあること自体をどう思いますか?
 1, なければ困る 2, あっても良い 3, できればない方がよい
- 6, 今いる‘グループ’から出て, 他に入りたいと思っている‘グループ’がありますか?
 1, はい 2, いいえ
- 7, 自分の所属する‘グループ’内で, 「この人そろそろはずされるんじゃないかな?」と予想がつきますか?
 1, 確実に分かる 2, だいたい分かる 3, ほとんど分からない 4, 全く分からない

8, ‘グループ’があることによるプラスの面とマイナスの面はどれくらいの比率ですか? 例を参考に, 全体を10として「プラスの面: マイナスの面」というふうに答えてください。

(例: プラスの面が7割, マイナスの面が3割の場合 → 7:3)

:

9, ‘グループ’についてふだん感じていることや, これまでの質問に答えてみて思ったことがあれば, なんでも自由に書いてください。

ご協力ありがとうございました。

研究 2

友人‘グループ’についてのアンケート調査

私は、心理学を勉強している大学院生です。現在、中学生・高校生の同性友人関係についての調査を行っており、その資料とするため、皆様の考えをおうかがいしたいと思います。無記名ですので、誰が回答したかは分かりません。また、先生が見ることもありません。アンケートの結果はコンピュータで処理し、データは適切な方法で処分します。ご協力をよろしくお願いいたします。

白百合女子大学大学院 修士課程 2 年
幸本 香奈

(1)はじめに、あなたの性別・学年・学校を教えてください。下線が引いてある部分はあてはまる方の番号に○をつけ、()内には数字を記入してください。

- ・性別 : 1. 男 2. 女
・学年 : 1. 中学校 2. 高校 の () 年生
・学校 : 1. 公立 2. 私立 の 1. 共学 2. 男子校 3. 女子校

(2)ここでは、あなた自身についておうかがいします。

I. 次の 12 個の文について、あなたに「よくあてはまる」場合は4、「少しあてはまる」場合は3、「あまりあてはまらない」場合は2、「あてはまらない」場合は1を選び、数字を○でかこんでください。	よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
1. 私は今、自分の目標をなしとげるために努力している。	4	3	2	1
2. やりそこないをしていないかと心配ばかりしている。	4	3	2	1
3. 私には特にうちこむものはない。	4	3	2	1
4. 私の心は、とても傷付きやすく、もろい。	4	3	2	1
5. 異性とのつきあい方がわからない。	4	3	2	1
6. 何かしているより空想にふけていることが多い。	4	3	2	1
7. 『こんなことがしたい』という確かなイメージを持っていない。	4	3	2	1
8. 人が見ているとうまくやれない。	4	3	2	1

9, 自分の中には, いつもなんとなく不安がある。	4	3	2	1
10, どうしたらよいか分からなくなると自分のからの中に閉じこもってしまう。	4	3	2	1
11, 自分がどんな人間なのか, 何をしたいのかということを真剣に迷い考えたことがある。	4	3	2	1
12, 自分 1 人で初めてのことをするのは不安だ。	4	3	2	1
13, 親やまわりの人の期待にそった生き方をすることに疑問を感じたことはない。	4	3	2	1
14, まわりの動きについていけず, 自分だけとり残されたと感じることもある。	4	3	2	1
15, 人と活発に遊べない。	4	3	2	1

Ⅱ. 次の 24 個の文について、あなたに「よくあてはまる」場合は4, 「少しあてはまる」場合は3, 「あまりあてはまらない」場合は2, 「あてはまらない」場合は1を選び、数字を○でかこんでください。	よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
1, 自分が気に入らない人には、しつこく注意をしたり、文句を言い過ぎたりしてしまう。	4	3	2	1
2, たとえ言いにくくても、間違っていることは指摘(してき)できる。	4	3	2	1
3, やり通さなければならないことは、どんな誘惑(ゆうわく)があっても最後までやり通すことができる。	4	3	2	1
4, 自分の思い通りに行かないと、すぐにきげんが悪くなる。	4	3	2	1
5, 周囲の人と自分の意見が違っていても、自分の意見を主張する。	4	3	2	1
6, 仕事・課題や遊びなど、周囲にいちいち聞かずに、自分のアイデアで進めることができる。	4	3	2	1
7, 周りから決められた役割が困難なことでも、すぐにあきらめたりせずに、がまんしてやり通す。	4	3	2	1
8, いやな事があっても、人やものに八つ当たりをしない。	4	3	2	1
9, やりたいことに自分から進んで参加できる。	4	3	2	1
10, 集団の中で、自分の決められた役割があるときは、どんな誘惑(ゆうわく)にも負けずに取り組む。	4	3	2	1
11, 相手から不快なことを言われても、自分の感情を露骨(ろこつ)に表したりはしない。	4	3	2	1
12, 話し合いの場で、進んで自分の意見を述べる。	4	3	2	1
13, 困難なことでも、集中して取り組む。	4	3	2	1
14, 友達から間違いを指摘(してき)されたら、素直に自分が間違っていたことを認める。	4	3	2	1
15, 自分が考えていることを相手にわかるようにはっきり言う。	4	3	2	1
16, 皆でやるべき課題がある時は、遊びたくなってもがまんできる。	4	3	2	1
17, 面倒くさいことは人に押し付ける。	4	3	2	1
18, 自分がされていやなことは人にもしない。	4	3	2	1
19, 順番に並んでいる時に横から入り込んでくる人たちがいたら注意をする。	4	3	2	1
20, 友達がいやがらせや悪ふざけなどをしているとき、よくないと伝えることができない。	4	3	2	1
21, いやなことを頼まれたとき、いやだという気持ちを伝えることができる。	4	3	2	1
22, やりたくないことや興味のないことは、皆といっしょにやらなければならないときでもサボってしまう。	4	3	2	1
23, 自分の考えだけを聞いてもらおうとするのではなく、相手の考えも聞いて、分かってあげようとする。	4	3	2	1

Ⅲ. 次に、友人‘グループ’についてお聞きします。

※記入上の注意

すべての質問において、友人という言葉が出てきた場合、同性の友人についてです。また、‘グループ’という言葉が出てきた場合、2人以上の‘グループ’についてです。異性の友人はふくめないで教えてください。

(1)あなたは現在、決まった同性の2人以上の友人‘グループ’に所属していますか？
あてはまる方の数字を○でかこんでください。

1. はい 2. いいえ

(2)‘グループ’があること自体をどう思いますか？

1. とても良い 2. まあまあ良い 3. あまり良くない 4. 絶対に良くない

(3)※これより先の質問は、(1)で‘はい’と答えた人(‘グループ’に所属している人)のみ教えてください。

①あなたの所属している‘グループ’は、あなたをふくめて何人ですか？()内に数字を記入してください。

()人

②あなたの‘グループ’には、リーダーのような存在の人がいますか？

1. 自分がリーダーである 2. 自分ではないがリーダーがいる 3. リーダーはいない

③現在の‘グループ’や過去の‘グループ’において、‘グループ’からはずされたことがありますか？

1. はい 2. いいえ

④現在の‘グループ’や過去の‘グループ’において、‘グループ’から誰かをはずしたことがありますか？

1. はい 2. いいえ

(4)友人‘グループ’に関する以下の質問にお答えください。

次の30個の文について、あなたに「よくあてはまる」場合は4、「少しあてはまる」場合は3、「あまりあてはまらない」場合は2、「あてはまらない」場合は1を選び、数字を○でかこんでください。	よくあてはまる	すこしあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
1, 現在の‘グループ’に満足している。	4	3	2	1
2, ‘グループ’にいることで、ひとりぼっちで心細い思いをしなくてすむ。	4	3	2	1
3, ‘グループ’にいると、学校で役に立つ情報を教えてもらえる。	4	3	2	1
4, ‘グループ’の人が一緒にいてくれないと、一人では行動できない。	4	3	2	1
5, ‘グループ’の人がいるから学校が楽しい。	4	3	2	1
6, 内心どう思っているかが、とりあえずうまく調子を合わせていることがある。	4	3	2	1
7, ‘グループ’ではお互いに安心して何でも話すことができる。	4	3	2	1
8, いざこざが起きるような行動や発言はひかえるようにしている。	4	3	2	1
9, 必ずしも気が合うわけではないので、疲れを感じる時がある。	4	3	2	1
10, 気の合わない人を‘グループ’からはずそうとすることがある。	4	3	2	1
11, ‘グループ’にハマりすぎず、ある程度、距離を置くようにしている。	4	3	2	1
12, あまり自分をさらけ出さないようにしている。	4	3	2	1
13, 自分の所属する‘グループ’以外の人と交流がしにくい。	4	3	2	1
14, ‘グループ’は、うまく人付き合いをするための勉強になる。	4	3	2	1
15, ‘グループ’に所属していない学校生活は考えられない。	4	3	2	1
16, 今の‘グループ’にいることで、得をしていると感じる。	4	3	2	1
17, 日頃から、‘グループ’からはずされないように気をつけている。	4	3	2	1
18, 自分の所属している‘グループ’を誇りに思っている。	4	3	2	1
19, 自分の所属している‘グループ’が他の人からどう思われているか気になる。	4	3	2	1
20, 無理して一緒にいる感じがすることがある。	4	3	2	1
21, ‘グループ’内では、個人の考え方や意見を表に出してはいけない雰囲気がある。	4	3	2	1
22, ‘グループ’の人と悩み事を親身になって相談しあうことができる。	4	3	2	1
23, ‘グループ’内での行動は、誰かに合わせていることが多い。	4	3	2	1
24, 自分が‘グループ’の人からどう思われているのか気になる	4	3	2	1
25, あこがれている‘グループ’がある。	4	3	2	1

26, 'グループ' にいると, 自分らしさがうしなわれる気がする。	4	3	2	1
27, 'グループ' に所属せず, ひとりでも問題なくやっいてける。	4	3	2	1
28, 'グループ' は学校生活において, とても重要なものだと思う。	4	3	2	1
29, 'グループ' の中に上下関係があるように感じる。	4	3	2	1
30, 'グループ' 以外の人とも, もっと仲良くしたいと思う。	4	3	2	1

(5)現在, 中高生の 90%以上が「'グループ'」に所属していると言われています。

そして, 'グループ'には, 学校が楽しくなるといったプラスの面と, 'グループ'からはずされないのであるが、精神的に疲れてしまうといったマイナスの面があります。あなたにとって, 'グループ'があることによるプラスの面とマイナスの面はどれくらいありますか?それぞれあてはまる数字に○をつけてください。

〈プラスの面〉

1. ひじょうにある 2. かなりある 3. 少しはある 4. あまりない 5. ほとんどない
6. 全くない

〈マイナスの面〉

1. ひじょうにある 2. かなりある 3. 少しはある 4. あまりない 5. ほとんどない
6. 全くない

ご協力ありがとうございました。

研究 4・研究 5(中学生・高校生用)

友人‘グループ’についてのアンケート調査

私は、心理学を研究している大学院生です。現在、中学生・高校生の同性友人関係についての調査を行っており、その資料とするため、皆様の考えをおうかがいしたいと思います。無記名ですので、誰が答えたかは分かりません。また、先生が見ることもありません。アンケートの結果はコンピュータで処理し、このアンケート用紙は分析後に適切な方法で処分します。ご協力をよろしくお願いいたします。

白百合女子大学大学院 幸本香奈

(1)はじめに、あなたの性別・学年を教えてください。下線が引いてある部分はあてはまる方の番号に○をつけ、()内には数字を書いてください。

・性別 : 1. 男 2. 女

・学年 : 1. 中学校 2. 高校 3. 大学 の () 年生

I. あなたのふだんの友達とのかかわり方についてお答えください。

I. 次の18個の文について、あなたはふだん、友達に対してどの程度行いますか？あてはまる番号に○をつけてください。	いつもする	たいていする	あまりしない	まったくしない
1. 意見が食い違ったときに相手の意見に合わせる。	4	3	2	1
2. 自分の感情や気持ちを素直に言う。	4	3	2	1
3. 相手が自分の話を理解していなさそうなときに、「そうそう」などと言って適当に話を終わらせる。	4	3	2	1
4. 相手が勝手な行動をとって、自分に迷惑がかかったときは怒る。	4	3	2	1
5. 相手に自分がやってもらいたいことを素直に言う。	4	3	2	1
6. 争いやケンカになったときに、理解したふりをしてとりあえず謝る。	4	3	2	1
7. 気乗りしないのに遊びなどに誘われたとき、適当ないいわけをつけて断る。	4	3	2	1
8. 相手が間違っただけをしているときには、「間違っている」とはっきり言う。	4	3	2	1
9. 相手と意見が食い違ったときに、その話題にはふれないようにする。	4	3	2	1
10. 一緒にいるときに、自分の意見を言わないで相手に合わせる	4	3	2	1
11. 相手に会ってすぐに、自分から話題をふって会話を始める。	4	3	2	1
12. 相手を怒らせそうになったときに、すかさず相手のきげんをとってその話を流す。	4	3	2	1
13. 何か失敗をしたときに、反省してすぐに謝る。	4	3	2	1
14. とくどき、その場にいない人の悪口を言う。	4	3	2	1
15. うまくやっていくために、心にもないことを言う。	4	3	2	1
16. 本心はどうであれ、とりあえず同調して(相手に合わせて)安心させておく。	4	3	2	1
17. 相手が先に誰かと話しているところへ気軽に参加する。	4	3	2	1
18. もめごとの原因になる話題をつい口にしてしまう。	4	3	2	1

Ⅱ. 次の1～3の場面とその時の対応を表した選択肢を読んで、質問にお答えください。

1. 休みの日に、6人‘グループ’で遊びに行くことになりました。当日、駅で10時に待ち合わせをしていたのですが、Aさんだけが10時を過ぎてもなかなか来ません。10時30分になったころ、やっとAさんがやってきました。「あーごめん、ちょっと遅れた。よし、行こう」とAさんは言いました。実は、以前にもAさんは待ち合わせに遅れてきたことがあったので、他のみんなもうんざりした様子です。このとき、あなたならどうしますか？

①～③の中で、

(1)「あなたが実際に言いそうなこと」の1位と2位を書いてください。

1位		2位	
----	--	----	--

(2)「本当はどう言いたいか」の1位と2位を書いてください。

1位		2位	
----	--	----	--

①「ううん、気にしてないよ。行こうか。」と言う。

②「どうしたの？心配したよ。遅れるなら誰かに言っておいてね」と言う。

③「いつまで待たせたら気がすむの？いつも時間守らないじゃん。いいかげんにしてよ」と言う。

2. あなたは学校で4人‘グループ’に入っています。‘グループ’の中にはリーダーのような存在のBさんがいて、Bさんの言うことを聞かないといけなような雰囲気(ふんいき)があります。ある日、Bさんが‘グループ’のメンバーのCさんについて、「Cって最近ウザいよね。‘グループ’からはずさない？無視しよう。」とってきました。あなたは特にCさんのことをきらいだとは思っていません。このとき、あなたならどうしますか？

①～③の中で、

(1)「あなたが実際にとりそうな行動」の1位と2位を書いてください。

1位		2位	
----	--	----	--

(2)「本当はどうしたいか」の1位と2位を書いてください。

1位		2位	
----	--	----	--

①Cさんのことをきらいではないが、Bさんの言うことに合わせてCさんのことを無視する。

②「私はCさんのことをきらいではないし、無視をするのは良くないと思うけど。いやなところがあるならC

さんと直接話をしてみれば？」とBさんに言う。

③Bさんには「そうだね」と言ってその場では合わせておいて、Bさんと一緒の時は無視するが、BさんがいないときにはCさんとも仲良くする。

④「無視するなんて絶対ダメだよ！ありえない！」と言う。

3. あなたは、仲良し‘グループ’のメンバーと修学旅行で同じ班になりました。修学旅行では、AとBの2種類のコースから好きな方を選んでまわる時間があり、あなたは先輩から「Aが楽しかったよ」とすすめられ、以前からAコースの方に行きたいと思っていました。しかし、話し合いの中でひとりのメンバーが、「絶対Bコースだよ！そっちの方が楽しそうだし！」と言うと、他のメンバーもうなずいて同意している様子です。このとき、あなたならどうしますか？

①～③の中で、

(1)「あなたが実際にとりそうな行動」の1位と2位を書いてください。

1位		2位	
----	--	----	--

(2)「本当はどうしたいか」の1位と2位を書いてください。

1位		2位	
----	--	----	--

①「そうだね。Bがいいと思う」と言って本音(本当の気持ち)を言わずに合わせる

②「私は絶対Aがいい！先輩がAの方が楽しいって言ってたし、絶対A！」と言う。

③「確かにBは楽しそうだね。でもAも考えてみない？」と言う。

④特に何も意見を言わない。

Ⅲ. ここでは、友人‘グループ’についてお聞きます。

(1)あなたは現在、学校でいっしょに教室移動したり、お昼ごはんをいっしょに食べたりするような決まった同性の友人‘グループ’に入っていますか？あてはまる方の数字を○でかこんでください。

1. 入っている 2. 入っていない

※「1.入っている」と答えた人は、(2)の質問に進んでください。「2.入っていない」と答えた人は、これで終わりです。

(2)友人‘グループ’について、以下の質問にお答えください。

①‘グループ’に対するあなたの気持ちについて、次の22個の文は、あなたにどの程度当てはまりますか？それぞれ当てはまる番号に○をつけてください。また、「これまで」や「今まで」という言葉ができた場合は、過去に入っていた‘グループ’もふくめて答えてください。	まったくそのとおりだ	かなりそうだ	どちらかといえばそうだ	どちらかといえばそうではない	そうではない	全然そうではない
1.‘グループ’では、みんなと仲良く過ごせるように気を配っている。	6	5	4	3	2	1
2.これまでの‘グループ’において、‘グループ’の友達との接し方に悩んだことがある。	6	5	4	3	2	1
3.‘グループ’の友達と、もっと深く付き合えるようになりたい。	6	5	4	3	2	1
4.今の‘グループ’のメンバーは、かけがえのない存在である。	6	5	4	3	2	1
5.学校生活では、多くの時間を‘グループ’の人と一緒に過ごしている。	6	5	4	3	2	1
6.今までにおいて、‘グループ’の友達との関係について疑問に思ったことがある。	6	5	4	3	2	1
7.‘グループ’は、自分にとって特に意味のないものだと思う。	6	5	4	3	2	1
8.今の‘グループ’に入っていなければ、学校生活はとてつまらなかったと思う。	6	5	4	3	2	1
9.‘グループ’の友達には、あまり自分のことに干渉(かんしょう)しないでほしい。	6	5	4	3	2	1
10.これまでの‘グループ’において、‘グループ’の友達の期待にそった振る舞いを	6	5	4	3	2	1

することに抵抗を感じたことがある。						
11. 'グループ' の友達には、特に何も期待していない。	6	5	4	3	2	1
12. 今の 'グループ' には、何かと便利だから入っているだけである。	6	5	4	3	2	1
13. 'グループ' から浮かないように気を付けている。	6	5	4	3	2	1
14. 'グループ' では、言いたいことが言えなかったり、やりたいことができないと感じたことがある。	6	5	4	3	2	1
15. 'グループ' 内で、もう少し自分の意見を言えるようになりたい。	6	5	4	3	2	1
16. 'グループ' にさえ入っていれば、今のメンバーでなくても特に何も変わらない。	6	5	4	3	2	1
17. 'グループ' の友達とは距離を置いて、気楽に過ごしたい。	6	5	4	3	2	1
18. これまでの 'グループ' において、'グループ' 行動が面倒だと感じたことがある。	6	5	4	3	2	1
19. 今後、どんな 'グループ' に入ることになっても特にかまわない。	6	5	4	3	2	1
20. 今の 'グループ' のメンバーとは、卒業後もずっと仲良くしていきたい。	6	5	4	3	2	1
21. 'グループ' で過ごす時間は、とても楽しい。	6	5	4	3	2	1
22. これまでの 'グループ' において、'グループ' から抜けたいと思ったことがある。	6	5	4	3	2	1

②現在入っている 'グループ' について、おうかがいします。 次の 28 個の文は、あなたにどの程度あてはまりますか？ あてはまる番号に○をつけてください。	非常に よくあて はまる	あて はまる	少し あては まる	あまり あては まらない	あて はまら ない	全く あては まらな い
1. 'グループ' にいるとひとりぼっちで心細い思いをしなくてすむ。	6	5	4	3	2	1
2. お互いに安心して何でも話することができる。	6	5	4	3	2	1
3. メンバーそれぞれの考え方の違いが刺激(しげき)になる。	6	5	4	3	2	1
4. お互いに面倒な気遣いをしなくてすむ。	6	5	4	3	2	1
5. 'グループ' にいることで協調性を身につけることができる。	6	5	4	3	2	1

6, 'グループ' にいると学校で役に立つ情報を教えてもらえる。	6	5	4	3	2	1
7, 合わない人を仲間はずれにしてしまう傾向がある。	6	5	4	3	2	1
8, 自分の所属する 'グループ' 以外の人と交流がしにくくなる。	6	5	4	3	2	1
9, 自分の考え方や意見を表に出してはいけない雰囲気がある。	6	5	4	3	2	1
10, 'グループ' の人が一緒にいてくれないと, 一人では行動できない。	6	5	4	3	2	1
11, 必ずしも気が合うわけではないので, 疲れを感じる時がある。	6	5	4	3	2	1
12, 'グループ' にいると自分の居場所を確保できる。	6	5	4	3	2	1
13, 悩み事を親身になって相談しあうことができる。	6	5	4	3	2	1
14, それぞれの興味や考え方の違いから, 意見を言い合うことができる。	6	5	4	3	2	1
15, お互いをよく知った関係なので, 余計な気疲れを感じなくてすむ。	6	5	4	3	2	1
16, 'グループ' は, 周りとうまく関わっていくためのコツを学ぶことができる。	6	5	4	3	2	1
17, 試験に関する情報など有益な(ためになる)情報を, 手に入れることができる。	6	5	4	3	2	1
18, 'グループ' 同士でそれぞれ固まってしまう傾向がある。	6	5	4	3	2	1
19, 個人の意思をおさえなければならぬと感じる。	6	5	4	3	2	1
20, 'グループ' なしには, 一人で物事を決めることができないと感じる。	6	5	4	3	2	1
21, 興味のわかないことでも一緒に付き合わないといけない。	6	5	4	3	2	1
22, 休み時間や昼食の時に一人にならずにすむ。	6	5	4	3	2	1
23, 落ち込んでいるときに支えあうことができる。	6	5	4	3	2	1
24, 友達の意見を聞き, 考えを広げることができる。	6	5	4	3	2	1
25, 気を使わず, 気楽にしていられる。	6	5	4	3	2	1
26, うまく人付き合いをするための勉強になる。	6	5	4	3	2	1
27, 'グループ' から離れると, 一人では何もできなくなってしまう。	6	5	4	3	2	1
28, 無理をして周りに合わせているので, 負担に感じる時がある。	6	5	4	3	2	1

研究 4・研究 5(大学生用)

友人‘グループ’についてのアンケート調査

私は、心理学を研究している大学院生です。現在、中学生・高校生の同性友人関係についての調査を行っており、その資料とするため、皆様の考えをおうかがいしたいと思います。無記名ですので、誰が答えたかは分かりません。また、先生が見ることもありません。アンケートの結果はコンピュータで処理し、このアンケート用紙は分析後に適切な方法で処分します。ご協力をよろしくお願いいたします。

白百合女子大学大学院 幸本香奈

(1)はじめに、あなたの性別・学年を教えてください。下線が引いてある部分はあてはまる方の番号に○をつけ、()内には数字を書いてください。

・性別 : 1. 男 2. 女

・学年 : 1. 中学校 2. 高校 3. 大学 の () 年生

I. あなたのふだんの友達とのかかわり方についてお答えください。

I. 次の18個の文について、あなたはふだん、友達に対してどの程度行いますか？あてはまる番号に○をつけてください。	いつもする	たいていする	あまりしない	まったくしない
1. 意見が食い違ったときに相手の意見に合わせる。	4	3	2	1
2. 自分の感情や気持ちを素直に言う。	4	3	2	1
3. 相手が自分の話を理解していなさそうなときに、「そうそう」と言って適当に話を終わらせる。	4	3	2	1
4. 相手が勝手な行動をとって、自分に迷惑がかかったときは怒る。	4	3	2	1
5. 相手に自分がやってもらいたいことを素直に言う。	4	3	2	1
6. 争いやケンカになったときに、理解したふりをしてとりあえず謝る。	4	3	2	1
7. 気乗りしないのに遊びなどに誘われたとき、適当ないいわけをつけて断る。	4	3	2	1
8. 相手が間違っただけをしているときには、「間違っている」とはっきり言う。	4	3	2	1
9. 相手と意見が食い違ったときに、その話題にはふれないようにする。	4	3	2	1
10. 一緒にいるときに、自分の意見を言わないで相手に合わせる	4	3	2	1
11. 相手に会ってすぐに、自分から話題をふって会話を始める。	4	3	2	1
12. 相手を怒らせそうになったときに、すかさず相手のきげんをとってその話を流す。	4	3	2	1
13. 何か失敗をしたときに、反省してすぐに謝る。	4	3	2	1
14. とくとき、その場にいない人の悪口を言う。	4	3	2	1
15. うまくやっていくために、心にもないことを言う。	4	3	2	1
16. 本心はどうであれ、とりあえず同調して(相手に合わせて)安心させておく。	4	3	2	1
17. 相手が先に誰かと話しているところへ気軽に参加する。	4	3	2	1
18. もめごとの原因になる話題をつい口にしてしまう。	4	3	2	1

Ⅱ. 次の1～3の場面とその時の対応を表した選択肢を読んで、質問にお答えください。

1. 休みの日に、6人‘グループ’で遊びに行くことになりました。当日、駅で10時に待ち合わせをしていたのですが、Aさんだけが10時を過ぎてもなかなか来ません。10時30分になったころ、やっとAさんがやってきました。「あーごめん、ちょっと遅れた。よし、行こう」とAさんは言いました。実は、以前にもAさんは待ち合わせに遅れてきたことがあったので、他のみんなもうんざりした様子です。このとき、あなたならどうしますか？

①～③の中で、

(1)「あなたが実際に言いそうなこと」の1位と2位を書いてください。

1位		2位	
----	--	----	--

(2)「本当はどう言いたいか」の1位と2位を書いてください。

1位		2位	
----	--	----	--

①「ううん、気にしてないよ。行こうか。」と言う。

②「どうしたの？心配したよ。遅れるなら誰かに言っておいてね」と言う。

③「いつまで待たせたら気がすむの？いつも時間守らないじゃん。いいかげんにしてよ」と言う。

2. あなたは学校で4人‘グループ’に入っています。‘グループ’の中にはリーダーのような存在のBさんがいて、Bさんの言うことを聞かないといけなような雰囲気(ふんいき)があります。ある日、Bさんが‘グループ’のメンバーのCさんについて、「Cって最近ウザいよね。‘グループ’からはずさない？無視しよう。」とってきました。あなたは特にCさんのことをきらいだとは思っていません。このとき、あなたならどうしますか？

①～③の中で、

(1)「あなたが実際にとりそうな行動」の1位と2位を書いてください。

1位		2位	
----	--	----	--

(2)「本当はどうしたいか」の1位と2位を書いてください。

1位		2位	
----	--	----	--

①Cさんのことをきらいではないが、Bさんの言うことに合わせてCさんのことを無視する。

②「私はCさんのことをきらいではないし、無視をするのは良くないと思うけど。いやなところがあるならC

さんと直接話をしてみれば？」と B さんに言う。

③ B さんには「そうだね」と言ってその場では合わせておいて、B さんと一緒の時は無視するが、B さんがいないときには C さんとも仲良くする。

④「無視するなんて絶対ダメだよ！ありえない！」と言う。

3. あなたは、大学で一緒に行動している仲良し‘グループ’の友達と夏休みに旅行に行くことになり、旅行会社のツアーに申し込みました。ツアーでは、A と B の 2 つのコースから好きな方を選んで観光する日があり、あなたは旅行が好きな知り合いから「A に行ったことあるけど素晴らしかったよ！」とすすめられ、以前から A コースに行ってみたくて思っていました。しかし、旅行の計画を話し合っている際にひとりのメンバーが「絶対 B コースだよ。そっちの方が楽しそうだし！」と言うと、他のメンバーもうなずいて同意している様子です。このとき、あなたならどうしますか？①～③の中で、

(1)「あなたが実際にとりそうな行動」の 1 位と 2 位を書いてください。

1位		2位	
----	--	----	--

(2)「本当はどうしたいか」の 1 位と 2 位を書いてください。

1位		2位	
----	--	----	--

①「そうだね。B がいいと思う」と言って本音(本当の気持ち)を言わずに合わせる

②「私は絶対 A がいい！先輩が A の方が楽しいって言ってたし、絶対 A！」と言う。

③「確かに B は楽しそうだね。でも A も考えてみない？」と言う。

④特に何も意見を言わない。

Ⅲ. ここでは、友人‘グループ’についてお聞きます。

(1)あなたは現在、学校でいっしょに教室移動したり、お昼ごはんをいっしょに食べたりするような決まった同性の友人‘グループ’に入っていますか？あてはまる方の数字を○でかこんでください。

1. 入っている 2. 入っていない

※「1.入っている」と答えた人は、(2)の質問に進んでください。「2.入っていない」と答えた人は、これで終わりです。

(2)友人‘グループ’について、以下の質問にお答えください。

①‘グループ’に対するあなたの気持ちについて、次の22個の文は、あなたにどの程度当てはまりますか？それぞれ当てはまる番号に○をつけてください。また、「これまで」や「今まで」という言葉ができた場合は、過去に入っていた‘グループ’もふくめて答えてください。	まったくそのとおりだ	かなりそうだ	どちらかといえばそうだ	どちらかといえばそうではない	そうではない	全然そうではない
1.‘グループ’では、みんなと仲良く過ごせるように気を配っている。	6	5	4	3	2	1
2.これまでの‘グループ’において、‘グループ’の友達との接し方に悩んだことがある。	6	5	4	3	2	1
3.‘グループ’の友達と、もっと深く付き合えるようになりたい。	6	5	4	3	2	1
4.今の‘グループ’のメンバーは、かけがえのない存在である。	6	5	4	3	2	1
5.学校生活では、多くの時間を‘グループ’の人と一緒に過ごしている。	6	5	4	3	2	1
6.今までにおいて、‘グループ’の友達との関係について疑問に思ったことがある。	6	5	4	3	2	1
7.‘グループ’は、自分にとって特に意味のないものだと思う。	6	5	4	3	2	1
8.今の‘グループ’に入っていなければ、学校生活はとてつまらなかったと思う。	6	5	4	3	2	1
9.‘グループ’の友達には、あまり自分のことに干渉(かんしょう)しないでほしい。	6	5	4	3	2	1
10.これまでの‘グループ’において、‘グループ’の友達の期待にそった振る舞いを	6	5	4	3	2	1

することに抵抗を感じたことがある。						
11. 'グループ' の友達には、特に何も期待していない。	6	5	4	3	2	1
12. 今の 'グループ' には、何かと便利だから入っているだけである。	6	5	4	3	2	1
13. 'グループ' から浮かないように気を付けている。	6	5	4	3	2	1
14. 'グループ' では、言いたいことが言えなかったり、やりたいことができないと感じたことがある。	6	5	4	3	2	1
15. 'グループ' 内で、もう少し自分の意見を言えるようになりたい。	6	5	4	3	2	1
16. 'グループ' にさえ入っていれば、今のメンバーでなくても特に何も変わらない。	6	5	4	3	2	1
17. 'グループ' の友達とは距離を置いて、気楽に過ごしたい。	6	5	4	3	2	1
18. これまでの 'グループ' において、'グループ' 行動が面倒だと感じたことがある。	6	5	4	3	2	1
19. 今後、どんな 'グループ' に入ることになっても特にかまわない。	6	5	4	3	2	1
20. 今の 'グループ' のメンバーとは、卒業後もずっと仲良くしていきたい。	6	5	4	3	2	1
21. 'グループ' で過ごす時間は、とても楽しい。	6	5	4	3	2	1
22. これまでの 'グループ' において、'グループ' から抜けたいと思ったことがある。	6	5	4	3	2	1

	非常に よくあてはまる	あてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	全くあてはまらない
②現在入っている 'グループ' について、おうかがいします。 次の 28 個の文は、あなたにどの程度あてはまりますか？ あてはまる番号に○をつけてください。						
1. 'グループ' にいるとひとりぼっちで心細い思いをしなくてすむ。	6	5	4	3	2	1
2. お互いに安心して何でも話することができる。	6	5	4	3	2	1
3. メンバーそれぞれの考え方の違いが刺激(しげき)になる。	6	5	4	3	2	1
4. お互いに面倒な気遣いをしなくてすむ。	6	5	4	3	2	1
5. 'グループ' にいることで協調性を身につけることができる。	6	5	4	3	2	1

6, 'グループ' にいると学校で役に立つ情報を教えてもらえる。	6	5	4	3	2	1
7, 合わない人を仲間はずれにしてしまう傾向がある。	6	5	4	3	2	1
8, 自分の所属する 'グループ' 以外の人と交流がしにくくなる。	6	5	4	3	2	1
9, 自分の考え方や意見を表に出してはいけない雰囲気がある。	6	5	4	3	2	1
10, 'グループ' の人が一緒にいてくれないと, 一人では行動できない。	6	5	4	3	2	1
11, 必ずしも気が合うわけではないので, 疲れを感じる時がある。	6	5	4	3	2	1
12, 'グループ' にいると自分の居場所を確保できる。	6	5	4	3	2	1
13, 悩み事を親身になって相談しあうことができる。	6	5	4	3	2	1
14, それぞれの興味や考え方の違いから, 意見を言い合うことができる。	6	5	4	3	2	1
15, お互いをよく知った関係なので, 余計な気疲れを感じなくてすむ。	6	5	4	3	2	1
16, 'グループ' は, 周りとうまく関わっていくためのコツを学ぶことができる。	6	5	4	3	2	1
17, 試験に関する情報など有益な(ためになる)情報を, 手に入れることができる。	6	5	4	3	2	1
18, 'グループ' 同士でそれぞれ固まってしまう傾向がある。	6	5	4	3	2	1
19, 個人の意思をおさえなければならぬと感じる。	6	5	4	3	2	1
20, 'グループ' なしには, 一人で物事を決めることができないと感じる。	6	5	4	3	2	1
21, 興味のわかないことでも一緒に付き合わないといけない。	6	5	4	3	2	1
22, 休み時間や昼食の時に一人にならずにすむ。	6	5	4	3	2	1
23, 落ち込んでいるときに支えあうことができる。	6	5	4	3	2	1
24, 友達の意見を聞き, 考えを広げることができる。	6	5	4	3	2	1
25, 気を使わず, 気楽にしていられる。	6	5	4	3	2	1
26, うまく人付き合いをするための勉強になる。	6	5	4	3	2	1
27, 'グループ' から離れると, 一人では何もできなくなってしまう。	6	5	4	3	2	1
28, 無理をして周りに合わせているので, 負担に感じる時がある。	6	5	4	3	2	1

謝辞

本論文を作成するにあたり、調査にご協力頂きました中学生・高校生・大学生の皆様に深謝申し上げます。皆さまの協力なくしてこの研究が遂行されることはありませんでした。母校である日向学院中学校・高等学校には4度に渡り調査にご協力いただきました。調査の依頼を快く受けて下さった濱崎敦校長先生、谷聡史前校長先生には深く感謝しております。また、恩師である齋藤正春先生、吉田悦郎先生には質問紙の配布や郵送など手間のかかる作業にもご協力いただきました。また、先生方からの「頑張れよ」という温かいお言葉に何度も励まされました。深く感謝いたします。

主査の鈴木忠先生には、学部3年時の“プレ卒論”から10年に渡りご指導いただきました。分析が上手くいかない時、遅々として稿が進まない時など上手くいかないこともたくさんありましたが、私自身くじけそうになり投げ出してしまいそうな時にも、時に厳しく、時に優しく手を差し伸べて励まして下さいました。ご多用の中、いつも私のまとまらない話を真剣に聞いて下さり、興味深い文献をご紹介下さったり、様々なアイデアを提案して下さいました。本研究がここまで来られましたのも先生の的確なご助言あってのことと深く感謝しております。

宮下孝広先生には、卒業論文や修士論文の研究時から貴重なご助言を頂きました。特に、初めてこの研究を見る人の視点に立つことや理論的に説得力のある文章を書くことの重要性をご教示頂き、論文の改善に向けてたくさんのご指導を頂きました。

眞榮城和美先生には、ご専門の領域からの興味深いご助言を頂きました。ご多用の中、個別に相談に伺った際には丁寧に話を聞いて下さり、一緒に考えて下さいました。また、臨床的な観点からのご指摘もたくさん頂き、データから炙り出される現代の若者像を理解する上で非常に有効な知見をご教示下さいました。心よりお礼申し上げます。

田島信元先生には、生涯発達の視点からの貴重なご指摘を頂くとともに、論文の構成や文章の表現など細部にわたり、たくさんのご指導いただきました。ご多用の中、丁寧にご指導を頂いたことを深く感謝いたします。

篠田勝英先生には、専門外の視点からの貴重なご指摘を頂きました。改めて自分自身の

視野の狭さに気付かされると同時に、これまでとは違った視点から本研究を見直すきっかけとなりました。重ねて御礼申し上げます。

大学入試センターの荘島宏二郎先生には、データの分析に関してたくさんのご助言を頂きました。また、論文作成にあたっての構成の仕方やストーリーを描くことの重要性についてもご教授くださいました。休み時間や授業後などに何度も質問に伺わせて頂きましたが、いつも笑顔で温かく迎えてくださり本当に感謝しております。

本論文の中学生や高校生の友人‘グループ’は、10年に渡る私の研究テーマです。私自身、中学生や高校生の学校生活の中心は‘グループ’で、時に苦しみ、時に支えられもしました。修士の頃よりボランティアや実習などで学校現場に関わる機会をたくさん頂き、心理士として臨床の現場に出るようになってからも、たくさん子どもたちや保護者、先生方と出会いました。友人関係がうまくいかずに悩んでいる生徒や保護者との関わり、また、そのような生徒への対応に奔走する先生方との関わりが研究を進める原動力となり、子どもたちの心を理解するにあたり重要な視座をたくさん頂きました。これまで、出会ったすべての子どもたちと保護者の皆様、先生方に心より感謝を申し上げます。

そして、同期をはじめとする仲間には本当に助けられました。研究が煮詰まっている時には真剣に一緒に考え、上手くいかずに落ち込んでいる時には愚痴に付き合ってくれたり励ましてくれ、1つの課題を乗り越えるたびに「お疲さま」と労ってくれました。修士の頃より同志に恵まれ、たくさんの方に支えて頂き本当に感謝しております。

最後に、長い学生生活を支えてくれた家族に感謝を申し上げます。大学院に進学したいという希望を受け入れ、本日に至るまで様々な面でサポートをしながら見守ってくれた両親と、データの収集に際して協力を引き受けてくれた兄弟に心より感謝を捧げます。どうもありがとう。そして、新婚早々、家事を疎かにし、資料を散らかしながらパソコンの前で難しい顔をしている私を見守り、研究が滞っている時やサボろうとしている時には叱咤激励し、集中できる環境を作ってくれた夫に感謝いたします。